
夕日と鏡と私のトラウマ

山石リコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夕日と鏡と私のトラウマ

【Zコード】

Z8985T

【作者名】

山石リコ

【あらすじ】

夕暮れ時、近道するために廃校に入り込んだ麻奈に、その後訪れた奇妙な訪問者。「怖がらないで、私と一緒に来てください」半ば強制的に連れて来られた先は、異形の男達が住む廃校だった。一度入つたら一度と出られない。「自分の姿が変わる前に、此処から出る方法を探さなくちゃ」一人奮闘する麻奈を余所に、唯一の女性が入ってきたことに色めく住人達。

それぞれが抱えるトラウマに戸惑いながらも、脱出口を懸命に探す物語。

奇妙な迎え 1

夕暮れ時には何かが起こる。昔から人々はその時刻を逢魔ヶ時と呼んで恐れてきた。なぜ、そう呼ばれるのか……。それは、文字通り「逢う」からだ。魔と呼ばれるモノに。

腕時計を覗き込みながら、水上麻奈は誰もいない廃校の前で一人悩んでいた。目の前の廃校に侵入して近道をするべきか、それとも普段使う道を通って見たいテレビ番組を見逃すか。

今日に限つてバスが遅れるなんて本当にない。こんなことなら最後の講義を欠席して、早く帰つてくれればよかつたと麻奈は後悔していた。

今日は朝から小さな不運が重なつている。麻奈は襟元にそつと手をやつた。いつの間にか、一番上のボタンがぐらぐらと揺れている。あと一息で取れてしましそうだ。

おまけに、さきほど何かに引っ掛けたレギンスを見ると、ため息がこぼれてくる。ショートパンツから伸びる太ももの裏側に引きつれたような切れ目が出来ていて、そこから日に焼けていない肌が覗いていた。

この切れ目のせいで、どんなにバスの中で恥をかいしたことか。麻奈は今考えただけでも、恥ずかしさで消えてしまいたい思いに駆られる。

もう一度時計に目をやつた。こうして迷つてゐる間にもぐんぐん

時間は進んでいく。辺りは日が沈みかけているせいで薄暗く、廃校には不気味な影が落ちている。僅かに西の空が茜色を残していたが、濃い藍色に押し出されて今にも消えそうだ。

散々考えた挙句、麻奈は鎧だけの校門をそつとずらし、意を決して中に足を踏み入れた。どうしても今日のドラマは外せない。何しろ最終回なのだ。

久しぶりに人を招きいたのであるう学校は、奇妙なことに喜んでいるように麻奈には感じられた。麻奈はきょろきょろと辺りを見渡した。校庭には200メートルトラックの痕が所々剥げかけながらも未だに残っている。

「夜の学校つて気味悪いなあ」

大きな学校である。生徒数もかなり多かつたのだと容易に想像できるが、地方の公外に建てられたこの学校は、少子化が進んだために何年か前に廃校になってしまった。

もつとも、大学に通うために一年前に引っ越して来たばかりの麻奈にはそれ以上の事は分からぬのだが。

草雜だらけの寂しい校庭を抜けて、校舎を迂回するように歩き出した。L字型の校舎をぐるりと回ると、奥には中庭と体育館がある。その先にある裏門を通り抜けようと麻奈は考えていたのだ。

ここに入るのは初めてだが、近くを通る度に何となく目をやつていたので、大まかな造りは知っていた。

人気の無い校舎は静まり返っていて、校庭に流れる空気までひんやりと冷たく感じる。それはきっと、ただ単に日が沈んでしまった

からだと思つことにした。

人の居ない建物は傷むのも早い。校門には鎧が浮き出でていたし、コンクリートの校舎もあちこち色褪せ、ひび割れていた。それらを見ていると、何とも物悲しい気持ちにさせられる。

一つ身震いしてから、麻奈は殆ど駆け足で校舎を迂回して裏口へと抜けて行つた。脇田も振らずに走つていたせいだろう、校舎の中からじつと自分を追いかけるたくさんの視線に、ついに麻奈は気付く事は無かつた。

家に着いてから、麻奈はまずテレビの電源を入れた。

「間に合つた」

それから破れてしまつたレギンスを脱ぎ捨て、買い置きしている冷凍食品を電子レンジに放り込んだ。朝のうちにタイマーでセットしていたご飯を茶碗によそつている間に、テレビからドラマの主題歌が聞こえてきた。

一度見たことがある再放送だが、麻奈の好きな俳優が出ているので毎日欠かさず見てている。

麻奈は茶碗を持つて慌ててテレビの前に座った。一皿の中でも一番好きな時間だ。しかし、今日はその時間をゆっくりと味わう事は出来なかつた。なぜなら、テレビの前に座ると同時に、ピンポーンと間延びしたチャイムの音が玄関から聞こえてきたのだ。

「信じられない！　こんな時に」

麻奈はイライラしながら乱暴に鍵を開けた。

このアパートのドアには覗き穴が付いていない。勿論、モニターは言わずもがな。そのため、来客のたびに警戒しながらドアを開けなければならぬ。しかし、今日は早くテレビの前に戻りたかったために、麻奈は勢い良くドアを開け放つた。

ドアを開けると、そこには若い男が立つていた。麻奈は見覚えのない男を見て眉を寄せた。宅配便や新聞関係の者では無いのは一目で分かつた。

男は胸の開いたセーターを着て、その上にラフなジャケットを羽織つていた。光沢のある細身の黒いパンツと黒光りする皮の靴、指にはたくさんのリングが光つて見える。両耳にはピアスがずらりと並んでいて、開いた胸元にはシルバーのネックレスが幾重にも巻かれていた。

「こんばんは」

男がそう言って一寧にお辞儀をすると、彼の胸のネックレスがシヤラシャリと音を立てて鳴つた。

「どちら様ですか」

麻奈の声は固い。男の整つた顔立ちは良く見れば麻奈好みなのだが、何とも言えない奇妙な違和感を彼から感じた。はつきりいつて胡散臭い。怪しむ麻奈を氣にも留めず、男はにこやかに笑つて言った。

「夜分遅くに申しわけありません。突然の訪問にさぞ驚いているでしうが、どうしても貴女にお聞きしたい事がありまして」

麻奈は眉間の皺を深くした。男は構わずに話しを続ける。

「貴女、先ほど何処かに立ち寄りませんでしたか」

「……は？」

思わず質問を受けて、間の抜けた返事を返してしまった。なぜそんな事を聞かれなければならないのか、さっぱり分からぬ。麻奈は完全に不振人物を見る目つきで男を眺めた。

「失礼」

男はそう言つと、麻奈の左腕を素早く掴んだ。慌てる麻奈を無視して、男は掴んでいる麻奈の腕を顔の近くまで引き寄せた。どうやら腕時計を凝視しているらしい。覗きこむように俯いている男の頬に、癖の無い黒い髪がさらさらと落ちてきて、麻奈はつい男に目を奪われていた。

男が目線を上げる。前髪越しに男と眼が合ひ、気まずくなつて麻奈の方が先に視線を逸らした。男はくすりと笑つと、腕をそつと放した。

「やはり、私達の前を通りましたのは貴女ですね。この止まつた時計が

何よりの証拠です

「え、そんな？ 電池入れ替えたばかりなのに」

その時の麻奈は、腕時計を確かめる事に夢中で、男がドアをゆっくりと閉めた事に気が付かなかつた。

奇妙な迎え 1（後書き）

読んで頂いてありがとうございます。初めての小説＆投稿でドキドキしています。ご意見、ご感想頂けたら幸いです。どうぞよろしくお願いします。

奇妙な迎え 2

力チャンと鍵が閉まる小さな音が聞こえた。麻奈がはつとして顔を上げると、男は唇の端を上げて麻奈を見下ろしていた。

「ちょっと、それ以上入らないで！ 警察を呼びますよ」

麻奈は携帯を取り出そうとしたが、ポケットに届く前に男の手が素早く伸びてきて、震えるその手を捕らえてしまった。麻奈は恐怖で声も出ない。男は優しく諭すように囁いた。

「怖がらないで下さい。貴女に危害を加えるつもりはありません。ただ、お願いがあるのです。私と一緒に来てください」

麻奈は首を振った。

「お、お金なら鞄の中にお財布が入ってるから、それを持って行って」

男も困った顔で首を横に振った。

「お金が欲しい訳ではないのです」

男が麻奈の耳元に顔を寄せて囁く。

「じゃあ、一体何が目的なの？」

「貴女が必要なんです。残念ですが、今は理由を説明している時間がありません」

「え？」

「貴女も選ばれたのだから」

麻奈は意味深な言葉に首を捻る。男はそれを無視すると、麻奈の手を強く引いて玄関先へと下りるように促した。

「さあ、急ぎますよ。靴を履いて下さい」

麻奈は動搖していたが、ここで下手に騒いでは駄目だと思つた。男に片手を掴まれている以上、抵抗しては危険だ。今は大人しく男に従つて、外に出てから誰かに助けを求めよう。そう心に決めて、麻奈は実にしおらしく頷く。

恐る恐る自分のブーツを引き寄せて片足を入れ、もたつきながらもチャックを閉めた。

屈んだ拍子に男の黒い靴が目に入った。良く磨かれた上品な革靴。だがそれを見た時、やはり何か違和感を覚えた。

麻奈はそれを見た時、初めは錯覚だと思った。拉致されようとしている異常な精神状態が作る幻、きっとそうに違いない。男の足は皮靴から上の部分が半透明に透けていた。

「透けてる」

麻奈は思わず口に出てしまつた言葉に自分で驚いた。何度瞬きしても、男の黒いパンツを通して玄関のタイルがくつきりと見て取れる。恐る恐る男を見上げると、悲しそうな瞳とぶつかった。まさか、幽霊？ だろうか。

「言つておきますが、幽霊じゃありませんよ」

麻奈の心を読んだかのように男がため息を吐いた。

「説明は後です。早く、もう時間がありません」

男に急かされて、麻奈は震えながら片手でブーツのチャックを上げた。もう一本の手は未だ男に掴まれたままなので、酷く履きにくく。男は麻奈が靴を履くのを見届けてから、少しでも距離を保とうとしている麻奈の腰に手を回して抱き寄せた。

「ちよっと

抗議の声を上げる麻奈を無視して、男はそのまま部屋へと上がつていった。

「あ、土足」

「すみません。ああ、この鏡が良さそうですね」

男は寝室に置いてある姿見の前に立つた。

それは頭の先からつま先まで映すことが出来る大きな鏡で、麻奈が実家から持ってきた物だった。今は恋人のように寄り添う一人が映つていて、その姿はとても誘拐犯とその被害者には見えなかつた。男は、鼻がくつ付きそうなほど近づいて鏡を覗き込むと、勢い良く振り向いた。

「しつかり私に掴まつて、舌を噛まないよつて気をつけ下せー」

「は？」

要領を得ない麻奈を置いてけぼりにして、男はそのまま鏡に向かつて大きく一步踏み出した。引きずられるよつにして麻奈も続く。鏡に激突する衝撃を予想して、麻奈は思わずギュッと目を閉じた。しかし、予想に反して冷たい感触が全身を覆つただけだった。二人はそのまま、まるで水の中へと入つて行くよつに、鏡面を波立たせて鏡の中へと入つていった。

奇妙な迎え 2（後書き）

少しでも楽しんで頂ければ嬉しいです。宜しければ、これからもどうぞよろしくお願いします。

いつまで経つても、鏡にぶつかる衝撃は襲つてこなかつた。

麻奈は何か奇妙なことが起きているのだと分つていたが、恐ろしくて目を開けることが出来ない。ただひたすら、唯一の命綱のように男の手をぎゅっと握りしめていた。

すると、たちまち四方から強く引っ張られるような感覚が襲つてきた。身体を滅茶苦茶に振り回されているような強い力を受けて、麻奈は前後左右が分からなくなってしまった。

強い遠心力に三半規管が耐えられなかつた。何とも言えない気持ち悪さに身震いすると、すぐ近くから男の声が聞こえてきた。

「もう少しで收まりますよ」

男の言つ通り、身体を揺さぶる力がゆっくりと消えていくのを感じて、麻奈はそつと目を開けた。そこは一面真っ暗な闇が広がっていて、二人は何も無い空間にゆらゆらと所在無さ気に浮いていた。視覚で確認してしまうと、足元の覚束ない感覚が更に増した気がした。

一人から遠く離れた所で、微かにきらきらと淡く光つてゐる物が目に付いた。目を凝らして見ると、色とりどりの光が瞬くように点滅をくり返している。

今の状況も忘れて、麻奈は素直に綺麗だと思った。赤や黄色、緑にピンク。暗い闇に光を放つその景色は、星を散りばめた宇宙空間のようにも思える。

「エリ、エリ」

半ば独り言のように呟いたのだが、以外にも返事が返ってきた。

「私にもよく分かりません。強いて言つなら、『鏡の中』ですかね。
さあ、行きましょう」

男は麻奈をリードするように歩き始めた。それに促されて麻奈も慌てて足を出しが、靴底からは何の感触も感じられない。

悪戯苦闘している麻奈を見て、男はやれやれといった顔で彼女の腰を更に引き寄せた。麻奈はこの時だけは、自分の腰に男が手を回している事に感謝した。

どのくらい歩いただろうか。男が紫色の光の前で足を止めた。

良く見ると、それは人の背丈を軽く超えた巨大な鏡だった。額も何もついていないただの裸の鏡だったが、こんな所に鏡があること自体が、麻奈には不気味に感じられる。

「今度は何の衝撃も無いですから、安心して付いて来て下さい」

男はそう言いながらも、麻奈の腰に巻きついている手を決し離そうとしない。逃亡を防止するためなのかもしれないと考えて、麻奈は少し男を恐ろしく思った。

来た時と同じように、男が何の抵抗もなく鏡に身を投じる。麻奈も仕方なしに息を止めて後に続いた。またしても、ぬるつとした冷たい鏡の感触が全身を包む。おかしな出来事続きで感覚が麻痺していた麻奈だったが、もう後戻り出来ないような予感が一瞬頭をよぎった。

鏡を抜け出ると、そこは薄暗くひんやりとした空氣の室内だった。

高い天井。吹き抜けになつた螺旋階段。その踊り場に立つていると分かつた時、麻奈は自分の身に何が起つたのか信じられずに何度も辺りを見渡した。

薄汚れて何色かも分からぬ陰気なタイルの床に、冷たい鉄の手すり。しかし、どこか懐かしい雰囲気を孕んだ見覚えのある場所のようを感じる。

振り返ると、後ろには麻奈の背丈よりも大きな鏡が取り付けられていて、まだ仄かに紫色の光が零れていた。

「お疲れ様でした。着きましたよ」

男はそう言つと、麻奈の腰に回していた手をよじやく離した。解放感を感じるよりも、縋り付く対象を失つて麻奈は不安になつた。

この異様な出来事を前にして、麻奈の頭は上手く働いてくれなかつた。男に文句を言ってやりたいのに、何をどう言つていいかが分からぬのだ。不安そうな表情で辺りを窺う麻奈に構わず、男は螺旋階段をどんどん下りて行く。

「私達、あのあ、まさか……この鏡から出てきたの？」

麻奈は言葉を慎重に選びながら男の背に声を掛けた。

「そうです。貴女も早く降りて来て下さい」

階段を下りきつた男が、吹き抜けを下から見上げている。

逃げるのなら今かもしれない。一瞬そう思つたが、今来た道を戻

る気にはなれなかつた。

階段を上がつて他の出口を探そつかとも考えたが、それは諦めることにした。自分の足の遅さでは、きっとすぐに追いつかれてしまうだらう。

逃亡計画を断念する自分を不甲斐なく感じながら、麻奈は手すりに掴まつて階段を下り始めた。何気なく上を見上げる。緩いカーブを描きながら上階へと続く階段はとにかく長い。円を描く階段を見上げてみると、暗い穴の中に落ちてしまつたような錯覚を感じさせる。

「足元に気をつけて下せー」

男はにこやかに微笑みながら手を差し出してきたが、麻奈は首を振つて断つた。ついでに非難を込めた視線を男へ送る。それは麻奈に出来る、ささやかな抵抗だつた。しかし、実際に優しく笑いかけられると悪い気はしない。整つた顔立ちのこの男ならばなおさらだつた。

麻奈は男の顔から無理やり視線を引き剥がした。男を責める気持ちが、この笑顔の前では挫けてしまいそうだ。

男は付いて来るよつて西川元に、ゆつたりした足取りで歩き出した。

「此處はどーなの」

「此處がどこで何なのか、実は私にも良く分からんんです。何しろ、此處は随分と風変りな所なので」

「どういつ事？　何処かも分からぬのに、どうやって私を連れてきたの？」

「此処に入るのはそう難しいことではないんですよ。現に、先程貴女は入つて來たじゃないですか」

「私が？ もう此処に？ そんなはずないわ」

「いいえ。貴女が息を切らして駆けて行くのを見ましたよ。ああ、あの時は黒いタイツを履いていたのに、今は履いていないんですね」

麻奈は息を飲んだ。帰宅するまで履いていたレギンスの色は確かに黒い色をしていた。男は振り返ることなく先を歩きながら続ける。

「問題は、此処に来ることではなくて、此処から出ることなんです」

「どういった事？」

男は、察しが悪いな。という顔を麻奈に向けると軽くため息を吐いた。

「出られないんです。此処から」

「……嘘」

「残念ながら本当です。試しにそこから外に出てみますか？」

男が指差した先には、木で作られた下駄箱がずらりと並んで置かれている。一段下がった所にはスノコが置かれていて、その先にはガラスで出来たスライド式の扉が付いている。

麻奈はそれを見て学校を連想していた。そこはちょうど、学校の玄関口のような場所だった。

麻奈はガラス戸に手を掛けると、それを思い切り引つ張った。レールが軋んで嫌な音を立てたが、扉は予想に反して何の抵抗もなく開いた。

奇妙な迎え ③（後書き）

読んでいただきて本当にありがとうございます。もう少ししたら登場人物増える予定ですので、もうしばらくお待ち下さい。

「何だ、普通に開くじゃない」

麻奈は拍子抜けして呟くと、そのまま校庭へ向かって歩き出した。しかし、数歩も行かないうちに足は止まり、馬鹿みたいに口を開けて立ち尽くしてしまった。

放心する麻奈の目に飛び込んできたのは、茜色の空と200メートルトラックの白い線が書かれた学校のグラウンド。後ろを振り返れば、近所の見慣れた廃校が建っている。

強張っていた肩の力が、すとんと抜けた気がした。

「ひーって、家の近くの学校」

拍子抜けしてしまった麻奈は、そのまま校庭を横切つて校門へと歩いていった。

何故自宅の鏡が近所の廃校に繋がっていたのかさっぱり分からないが、此処からなら家に帰るのは簡単だ。さっきの男の話も嘘だったようだ。

麻奈は笑いだしたい気分でグラウンドを横切り校門へと歩いていった。しかし、校門に近づくにつれ、外の景色に違和感を覚えてきた。何かがおかしい。

「何あれ、電信柱……」

校門の向こう側に細長いシルエットがいくつも見える。いつもの見慣れた交差点も角のパン屋も、麻奈が利用しているバス停も見当たらない。そこにあるのはたくさんの電信柱だけだった。夕焼けを

背にして、何百本、何万本といつ電信柱が隙間無く立ち並んでいる。それ以外は何も存在しない、まるで「テッサン」を間違えた絵のような景色だ。

夕日を浴びながら、ずらりと立ち並ぶ電信柱だけの光景は、全く不吉なものに見えた。

夜の始まりを告げる夕闇色に染まった世界。

麻奈はめまいがした。此処は一体どこなのだろう。近所の廃校に似ているが、自分の全く知らない場所に迷いこんでしまったのだと気が付かされ、夢の中にもいるような不気味な光景に身震いした。この異様な世界に当たられて胸が悪くなつてくるようだ。自分はもしかして夢の中に居るのだろうか？もしもそうだとしたら、これは絶対に悪夢に違いない。

ピチヤン。

どこかで魚が跳ねるような水音が聞こえた。麻奈は突然男の言葉を思い出す。出られないんです。彼は確かにそう言つた。嫌な予感を感じながら、麻奈は弾かれた様に校門に手をかけた。

まるで頭のどこかでチカチカと警告ランプが点滅しているようだ。校門を持つ手に力を入れる。さつきは簡単に開いた校門は、今は膠にかわでも張り付いたように動かない。

「何で？ 何で？」

「うなつたら乗り越えるしかない」と思い、麻奈はそこによじ登つてはみた。しかし、透明な壁のようなものに阻まれてしまい、学校の敷地内から指一本たりとも出す事は出来なかつた。麻奈はするすると校門から滑り落ちていた。

「無駄ですよ」

いつの間にか麻奈の背後に男が立っていた。麻奈の肩にそっと手を置いて力なく笑う。

「私もここから出ようと何度も試しました。しかし、この敷地内から出ようとすると、さつきのように見えない壁に阻まれてしまうのです。」「こを壊さうとしてみましたが、それも全く無理でした」

「そんな。でも、貴方さっき私の部屋へ来たじゃない。あれはどういう事? どこか抜け道があるんでしょ? さつきの大きい鏡は?」

「あの鏡は、今はもう使えないはずです」

男の声は始終穏やかだった。しかし、その中には微かな諦めが含まれているような気がして、麻奈はだんだんと腹が立ってきた。

「そんなの、やってみなくちゃ分からないじゃない」

「あれは、普段は至って普通の鏡なんです。今から行つても大鏡の中に入る事は出来ません」

「でも、さつきは」

「ええ、私たちは大鏡を通つて来ました。あの鏡を通るには、条件があるのです」

「どんな」

男は麻奈を指差した。

「それは、新しい住人が選ばれた時です。新しい住人が選ばれると、鏡は光りその人物を映します。鏡が光っている間に誰かがその人を呼びに行かなければならぬのです」

麻奈は首を捻った。

「呼びに行くつてことは、外に出られるんでしょう。貴方はどうしてその時に逃げなかつたの。何でまた此処に戻つて來たの」

「勿論、そのまま逃げられるものならとつぐの昔に逃げていますよ。私も色々試ました。でも、それは不可能だつたんです。外に出る時には、目に見えませんが透明な細い糸の様な物がいつの間にか体に巻きついているんです。一定の時間が経つたり、そのまま逃亡しようとしたりすると、ものすごい力で引き戻されてしまうのです」

「それは切ることとは?」

「やつてみましたよ。もちろん。ですが、それを切ることは出来ませんでした」

麻奈は泣きそうになつてきた。

「此処から出られない事を知つて、どうして私を連れてきたのよ

男の顔が僅かに曇つた。

「貴女を巻き込んでしまつて本当に申し訳なく思いますが、私たちには貴女の助けが必要なのです。私たちが不本意ながら、新しい仲間を増やすのには訳があります」

男は悲しい顔をして自分の足元を指差した。男の足はさつき見た時と同じように、皮靴から上の部分が透き通つて見えた。否、前に見た時には透き通つているのは脛までだつたが、今では膝の辺りまでが半透明になつていた。

「見て下さい。此処に長く閉じ込められると、体が徐々に変形していくのです。自分が一番望む姿に。同時に、一番見たくない姿に…。私も少し前から変化し始めました。姿が完全に変わつてしまつて、帰る道が見つけられなくなるのです」

「どうして」

「気が触れてしまいますからですよ」

男は何でもない事の様にせりつと口にしたが、その表情は固いままだ。

「じきに私の姿も完全に変わつてしまつでしょう。自分がそうなつてみて、初めてその恐ろしさが分かりました。今この場所で姿が変わりきつていなければ私だけなのです。このまま私まで変わつてしまえば、私たちは永遠にこの場所に閉じ込められてしまします。ですが、貴女なら帰る道を見つけられるはずなのです。お願いです。どうか私達を助けてください」

男はそう言つて麻奈に頭を下げた。その体は僅かに震えている。麻奈は困惑しながら、自分に頭を深く下げる男を見つめた。

正直なところ、今の説明では納得出来ない事がたくさんある。なにより、こんな事に巻き込んだ男に腹を立てていた。しかし、震えながら恐怖に耐えている男を見ると、胸の奥がどうしようもなく切

なくなつた。麻奈は少し迷つてから、おずおずと男の肩に手を置いた。

「あの、頭を上げて。まだ貴方の事を許したわけじゃないけど、帰り道を探すのは私の為にもなることだから 私やるよ。」いつなつちやつたら一蓮托生だしね。だから 「

だから泣かないで。そう言おうとしたが、男の人にはそんなことを言つるのは少し失礼かと思い、慌てて違う言葉にした。

「だから、一緒に頑張ろう

男は不意に顔を上げた。びっくりしたような瞳から、涙が一筋頬を流れていく。その顔がまるまる崩れて泣き笑いのような表情に変わつていつた。

可愛い。麻奈がそう思った途端、男が麻奈の両手を掴んだ。息を飲む間も無く男の手に柔らかく握りこまれ、麻奈の心臓は一気に跳ね上がつた。

「あらがとうござります」

痛いほど固い握手を交わしながらこりと微笑まれて、麻奈はぎこちない笑みを返した。うるさい位に高鳴っている心臓を叱りつけ、男の手を無理やり振り解いたが、激しい動悸はいつまでも治まらない。

「そついえば、まだ貴方の名前聞いてなかつた。私は水上麻奈」

「私はジュリアン田中と申します」

「は？」

「ジュリアンと呼んで下さい」

ジュリアンは笑顔を浮かべている。

「ええっと。ハーフとか？」

麻奈はジュリアンの顔をまじまじと見つめた。少し長めの黒い髪や薄い唇、すつきりと通つてはいるがそれほど高くない鼻。とても端正な顔立ちをしているが、どう見てもジュリアンは日本人に見えた。しかし、長い睫に縁取られた少し吊り目の瞳が、不思議な緑色をしている事に気が付いた。

「いいえ、クオーターです。麻奈は名前の通り日本人ですね」

「まあ、そうだけど

麻奈は心の中で苦笑した。私は貴方と違つて見たままで、と。

「私もです。国籍は日本なんですよ」

親近感を覚えたのか、ジュリアンは更に笑みを深めた。

「ジュリアンはどこに住んでたの？」

「火星です

「……火星って、あの？」

「ええ。火星です」

麻奈は自分の耳を疑つた。聞き間違いにしては酷過ぎるような気がする。しかし、更に聞き直す勇気は湧いてこない。そんな麻奈の様子を見ていたジュリアンは、またですか。と呟いてため息を吐いた。

「此處には色々な場所から人が集められています。正直、聞いてもどこの国か全く見当の付かない所から来た人たちばかりです。もしかしたら、世界そのものが違う人達なのかもしませんね」

ジュリアンはやれやれと軽く首を振る。

「その様子なら、麻奈は火星を『存じですね』

「一応は」

「」へりと頷ぐ。それを見てジュリアンは微笑んだ。

「麻奈はどうやら私と同じ世界から来たようですね。でも、火星と聞いて困惑つとこう事は。。せつと時間が違うのでしょうか。ときには、今は西暦何年ですか」

「え、2032年でしょ」

「成程、そうですか。でも、私にとつては2625年なんです」

麻奈の眉間の皺は深まるばかりだ。

「どういう事」

「つまり、私は麻奈の時代よりも600年、後の世界から来たといつ」とですよ」

麻奈はジュリアンの話を聞けば聞く程呆気に取られるばかりだ。もつ何が何だかさっぱり分からない。

「まさか、信じられない」

「信じられなくても、事実なんですからしうがないでしょ」

麻奈はぽかんと口を開いてジュリアンの話を聞いていた。もづ、何に疑問を持てばいいのか分からない。

唸りながら考え込む麻奈の顔を、ジュリアンが心配そうに覗き込んだ。その拍子にジュリアンの胸のネックレスがシャラリと音を立てる。

「私の話が信じられなくても構いません。ですが、これだけは信じて下さい。私は麻奈の味方です。どうか此処から出るために、私に力を貸して欲しいのです」

麻奈はひとしきり考えてから、何かを吹っ切る様に勢い良く顔を上げた。

「分かった。ジュリアンを信用する。今は考えてもどうしようもない事は置いといて、やるべき事だけを考えよ」

「ありがとう。麻奈は強い人ですね」

ジュリアンは感心しているとも、呆れているとも取れる顔をした。

「そんな事無いよ」

麻奈は少し照れて笑つて見せた。

「さあ、まだ校舎の中を案内していませんでしたね。中へ戻りまし
よつ

ジュリアンに続いて麻奈も校舎へと歩き始めた。

麻奈何気なくは校庭を振り返る。なぜだろ。夕日を背にして真
っ黒な針のように見えるたくさんの電信柱と、そこから伸びる長い
影。それらを見ていると、妙に心がざわめくのだった。

奇妙な迎え 4（後書き）

読んでいただきありがとうございました。書き方を少し変えました。
今まで読んで下さっていた方はアレ?と思つかもしだせんが、
どうかご容赦下さい。

スクロールが結構面倒なことになってしましました。そちらも合わ
せまして、本当にスママセン。こんな山石ですが、どうぞこれから
もお付き合いでいらっしゃれば嬉しいです。

校舎に入ると、ジュリアンは麻奈の一歩前を歩いて中を案内した。不思議な事に、それはジュリアン自身も初めて来る場所を確かめているような、拙い案内の仕方だった。おまけに、此処は学校としてはかなり不思議な造りになつてるので、麻奈にはさっぱり理解できなかつた。

玄関にたくさんの中駄箱が並んでいたり、廊下の真ん中に白線が引いてある様子は学校そのままなのだが、廊下の照明が華美なシャンデリアになつたり、麻奈の腰の辺りまである高級そうな壺が飾つてあつたり、崩れ落ちた瓦礫で通れない階段などがあつたりする。なんとも違和感たっぷりの学校だ。

「慣れるまでは常に私と行動して下さい。危険な場所もありますから」

そう言つと、ジュリアンはひびの入つた廊下に転がる瓦礫を器用に避けた。今、ふたりは二階の廊下を歩いていくところだつた。

「此処はどうして、こんなにわけの分からぬ造りになつてるの？」

麻奈はジュリアンに手を引かれながら瓦礫の山を越えていく。

「私も詳しくは分かりませんが、住人の馴染みの深い場所に建物がどんどん変化していくようです。ちょうど増改築を繰り返しているような感じですかね。だから、住人が増えれば新しいイメージがどんどん追加されてしまい、今ではこのようにおかしな造りになつたんです」

「だからこんなに統一感がないのね。でも、誰がそんなことしてるのかな。住人に馴染みの深い場所つてどうやって分かるの？」

「さあ。それは私にも分かりません。いつの間にか建物の造形が変わってしまいますから。今回も、私が麻奈を迎えて帰つたらこの形になつていきました。どうやら、麻奈が来てから『学校』という要素が加わったようですね。見たところ、今はそれがメインになつっています……ああ、そこ崩れそつなので気をつけて下さい」

足を乗せた廊下が崩れ始めたのを見て、麻奈は慌てて足をどかせた。二人は天井と壁が吹き飛ばされた様に抉れている廊下を、蟹歩きで進んでいた。

まるで、崖の中腹にへばり付いているのかと錯覚するほど危険な廊下。最早そこは廊下と呼べないような道だったが、麻奈は一步ずつ慎重に足を進めていた。

ほとんど外に剥き出しのこの廊下は、眺めが無駄に良すぎる。うつかり下を見てしまい、麻奈は血液がすうっと下がつて行くような気がした。

麻奈は命を懸けた蟹歩きで、ジュリアンの足元だけを見て彼について行つた。

「こんな危険な所に何があるの」

「此処で暮らしている人たちを麻奈に紹介しようと想いまして。まずは比較的安全なサルーンの所へ」

事も無げにそう言つてジュリアンを、麻奈は涙目で睨みつける。とりあえず前進するものの、麻奈は自分の指先が徐々に冷えていくのを感じた。その癖、手のひらは汗でじつとりと濡れている。緊張は

既にピークに達していた。

「IJの状況のど」「が安全なの？」一步踏み外したら即死なんだけど
「

麻奈の必死の叫びにもジュリアンは全く動じない。

「ああ、サルーンの所へは此処を通らないと行けないと行けないんです。向こうの階段は通れなくなっているでしょう？だからこの廊下を通るしかないんですよ。大丈夫、そのうち慣れますよ。それよりも、本当に注意するべきは此処に暮らす人達の方です」

「え」

「私以外の人間は完全に姿形が変わってしまいます。つまりどういう事か」と「

ジュリアンは意味深な間を空ける。

「皆、正気じや、ない」と「」

「正気じや、ない」

麻奈は無意識に生唾を飲み込んだ。「ゴクリと大きく鳴る喉に自分で驚く。

「どうしてそんな人たちに会わせようとするの？」

「知らない今までいる方が危険だからです。どんな人物なのか、あらかじめ知つておくほうが後々対処しやすくなります。ああ、です

がこれから会うサルーンは比較的穏やかな性格なので心配要りませんよ。中には会話すら成立しない人もいますからね。そういう危険な人にはあまり近寄らずに遠巻きに紹介します。それから、悲鳴は上げないで下さいね。悪戯に刺激するのは非常に危険ですから

そこまで危険な存在を人と言えるのだろうか。

喉まで出掛けた言葉は、麻奈の口から発せられる事は無かつた。何故なら、脆くなつた廊下が麻奈の重みで崩れ、支えを失つた彼女の右足ががくんと落ちていたのだ。

「つきやあああ！」

バランスを崩して落下する麻奈。必死に伸ばした手はジュリアンには届かず、空しく宙を搔いた。呆然とするジュリアンの顔。

落下する視界の中で、麻奈の目はジュリアンの後ろから不意に伸びてきた浅黒い何かを捉えた。

一瞬の出来事だったが、麻奈には全てがスローモーションのように感じられていた。それは日に焼けたたくましい腕だった。比喩でも何でも無く、突然ジュリアンの後ろから伸びてきた腕が、落下し続ける麻奈の手を間一髪で掴んでいた。

自分の体重が手首にかかり、衝撃と強い痛みに襲われたが、麻奈は安堵の息をそつと吐き出した。

「そっちの手も寄越せ」

低い声が上から降つてきて、麻奈は声のした方へと顔を上げた。逆光で黒い影になつて見えるが、かなり上方に人がいる。随分下まで落ちてしまったようだ。

麻奈は自分を掴んでいる手の長さを不思議に思いながら、もう片方の手も差し出した。すると、同じような腕が上から三本下りてき

て、それぞれ麻奈の手と手首をがっちりと掴んだ。

引き上げられながら、麻奈は奇妙な事に気が付いた。追加で腕が三本伸びてきたのに、上に見える人影は相変わらず一つだけだとうことに。

麻奈が静かに鳥肌を立てている間も、合計四本の腕は安定して麻奈の体を引っ張り上げていく。

徐々に露になる人物を見て、麻奈は何とか悲鳴を喉の奥へと飲み込んだ。悲鳴は危険。さつきジユリアンにそう教わったことを思い出したからだつた。

遭遇 1（後書き）

いつも読んでいただきましてありがとうございます。前回に続き、今回も説明が長くなってしまいました。早く残りの人物を書きたいのですが……。

今回、3人目の人物がようやく出てきました。次回詳しく描写できるとおもいますので、宜しければまた遊びに来て下さい。山石でした。

麻奈を助けた男には、異様に長い腕が六本生えていた。通常の腕がある位置に一本、胸から腹にかけて四本の腕が生えている。その為なのか、男は上半身には何も身に着けていない。

下半身には、たくさんの中ポケットが付いた迷彩柄のズボンと、黒い重厚なブーツを履いている。

今、男が麻奈を掴んでいるのは通常の腕一本と、胸の上部から生えている一本だった。たくさんのたくましい腕が男の体からによつきりと生えている様子は例えよつも無く不気味だった。おまけに、男の空いている腕は何かを求めるように手を握つたり開いたりしている。

麻奈は男を目にした途端、自分の状況も忘れて震えていた。今すぐこの腕を振り払つてしまいたい衝動に駆られるが、慌てて思い直す。今この手を放したら、麻奈は真っ逆さまに地面に激突してしまう。

お礼を言わなければと思うのに、なかなか口から言葉が出てこない。麻奈は口を開いたまま動けなくなってしまった。

男は麻奈を軽々と引っ張り上げると、自分の目線の高さまで引き上げた。残りの腕がそれぞれ麻奈の腰に当たられる。背中に悪寒と鳥肌が走った。男はそのまま、ひび割れの無い安全な廊下へと移動する。

その様子を少し離れた所で見ていたジュリアンは、麻奈が引き上げられたのを確認して密かに胸を撫で下ろしていた。彼は男の邪魔にならない様にと、一歩後ろへ下がつて見ていたのだった。ジュリ

アンは安堵の息を吐き出しながら、改めて男の腕に抱えられた麻奈を見て彼は思つ。

まるで蜘蛛に捕まつた綺麗な虫のようだ、と。

長身の男の腕にすっぽりと収まつてゐる麻奈は、いつもよりとても華奢に見えた。恐怖のために、荒い呼吸を繰り返して激しく上下している豊かな胸。艶やかな髪が纏わり付いている汗で湿つた首筋。微かに震えながら、何か言葉を発しようと半開きになつてゐる唇。その全てが彼には妙に艶めかしく見えた。

ジユリアンは無意識に乾いた唇を舌で濡らさせていた。

麻奈を抱えた男は、充血した眼で腕の中の少女を見つめていた。その口元には、つづらと微笑みすら浮かべている。

「助けてくれてありがとうございました」

ようやく麻奈が口に出来た言葉は、ずいぶんと掠れていた。

その途端、男の顔から奇妙な熱がすっと引き、絡めていた視線を不意に外した。そして、男は急にぽいつと麻奈を放り投げた。まるで、興味が無くなつたというかのようだ。

「いだつ

突然放り出された麻奈は、お尻を強か打ちつけて涙目で叫んだ。ジユリアンが、大丈夫ですか？と駆け寄つて来る。

麻奈を投げた男は、今までの様子が嘘のような無表情になり、虚ろな瞳で麻奈を見下ろしていた。否、その瞳はもう麻奈すら見てはいなかつた。

「サルーン、助けてくれてありがとうございました。よく私達が来

たのが分かりましたねえ」

サルーンと呼ばれた男は虚ろな瞳のままジュリアンの方を向いたが、直ぐに興味が無さそうにあらぬ方向を向いてしまった。

「音が聞こえた」

答える声には張りが無く、どこか気だるげだった。

「彼がサルーンさん？　じゃあ、ジュリアンが紹介したかったのはこの人」

麻奈は隣に立つサルーンを見上げて、その身長の高さに今更ながら驚いた。麻奈は決して背が低くはないのだが、その麻奈が首を垂直にして見上げなければならないほどの長身だ。おまけに、彼は全体的に筋肉質で体格が良いので、なお更大きく見えてしまう。

赤銅色の髪は無造作に伸びていて、顔には無精髭が生えている。くつきりとした二重の大きな赤茶色の目と、きりつとした眉が精悍な印象を与えるが、虚ろな表情と体から生えている六本の腕がその印象を台無しにしていた。

麻奈がしげしげと見つめていると、サルーンと視線がぶつかつた。しかし、サルーンの瞳は虚ろなまま動かない。確かに視線は交わっているのに、何の感情も浮かばないその目を見て、麻奈はサルーンの奇異な外見以上に薄ら寒いものを感じた。

「紹介します。こちらがサルーン。彼は内乱中の国から来たそうですよ」

だからこの廊下はぼろぼろのかと納得する麻奈。ジュリアンは、

今度はサルーンに麻奈を紹介し始めた。

「サルーン、これからは麻奈。ついで此處に来たばかりです」

「どうも、よろしく」

紹介されて麻奈は深く頭を下げるが、サルーンは無反応。

「あの、本当にさつきはありがとうございました。サルーンさんがいなかつたら、私死んでいたかもしれません」

更に話しかけるが、やはり反応は無い。

嫌われたのだろうか。あからさまに無視をされると気分が沈む。麻奈はこいつそりため息を吐きながらサルーンから視線を逸らした。

「では、行きましょうか？」

突然明るい声でジュリアンに肩を叩かれ、麻奈は驚いてジュリアンを見た。

「もういいの？」

「ええ、今は顔合わせだけにしようと思つていました。サルーンは無口なのでこのまま此処に居ても、ほとんど独り言になつてしまいますがよ」

「そういう事なら。あの、失礼します」

麻奈はもう一度頭を下げてサルーンに背を向けた。その拍子に麻奈のポケットから何かが落ちて、瓦礫の隙間に入り込んだ。あまり

音がしなかつたせいで。その事に、今は誰も気が付かなかつた。麻奈がジュリアンの後を追つて歩き出すと、後ろから声がかかつた。

「この場所は危険だ。気をつけろ」

「はい」

麻奈は手を振つた。サルーンの視線は相変わらず明後日の方向を向いていたし、六本の腕は不気味に動いていたが、何となく嬉しくなつた。どうやら嫌われてはいなかつたようだ。

少し心が温まつた気がしたのも束の間、またぼろぼろに崩れかかつた廊下を前にすると、気持ちは一気に急降下してしまつた。

もう廊下の中ほどまで進んだジュリアンに置いていかれないように、麻奈は意を決してそろそろと慎重に進みだした。行きで大分慣れたのか、帰り道の方がスムーズに渡ることが出来た。

崖のような廊下を無事渡りきり、瓦礫が疎らに転がっている道を歩きながら、ふと疑問に思つたことをジュリアンに尋ねてみた。

「サルーンさんは、どうしてあんな姿になつたのかな」

ジュリアンは含みのある顔で笑いながら、邪魔な瓦礫を蹴飛ばした。

「ああ……。今度会つた時にサルーンに聞いてみて下さい」

麻奈は横倒しなつている柱の残骸を乗り越えながら、うん。と氣の無い返事を返した。顔を上げたその時、ある事に気が付いた。

「またあつた

「何がですか」

麻奈は廊下の壁に備え付けられている鏡を指差す。

「ほら、あれ。此處には大きな鏡が沢山あるね。どの廊下にも必ず一面は掛けている」

ジュリアンは、ああ。と呟いて鏡の前で足を止めた。ぼろぼろでひびの入った壁とは相反して、その鏡は一点の曇りもなく夕焼けの紅い光を反射している。

ジュリアンは一時鏡を見ていたが、何気なく足元の瓦礫を拾い上げる。屈んだ拍子に首のネックレスがぶつかり合つて、シャラシャラと音を立てた。ジュリアンは手の中の瓦礫を暫くもて遊んでいたが、突然、鏡目掛けてそれを投げつけた。

ガシャーンと音を立てて割れ落ちる鏡を、ジュリアンは複雑な表情で見つめていた。そして、疲れたようにぐるりと首を回すと、いつもの笑顔で麻奈を振り返った。

「行きましょうか

麻奈は反射的に頷いた。見てはいけないものを見てしまった気分になる。まずい話だつたかな？ と麻奈はこつそり首を捻つた。

遭遇 2（後書き）

いつも読んで下さりありがとうございます。ジュリアンが黒さの片鱗を見せ始めました……。皆さんの気つきの通り、彼の敬語はパフォーマンスです。

廊下を歩きながら、ジュリアンがぽつりぽつりとこの場所の説明をし始めた。その時には、もういつもと同じく麻奈は密かにほつと胸を撫で下ろした。しかし、彼の突然の破壊行動の理由を聞くに聞けず、悶々としながら説明を受け続けた。

「どうやら、此処ではいつも夕暮れの風景が広がっているらしい。そう言われて窓の外を見ると、地平線すれすれに居座っている、紅く潰れた夕陽が見えた。なぜずっと夕暮れなのか。麻奈が疑問をぶつけると、ジュリアンは自分の腕時計を示した。

「私の推測ですが、此処では時間が狂っているようなのです。私の時計は半永久的に動くものなのですが、此処に来たとたん止まってしまいました。麻奈の時計も止まっているでしょう？」

「そういわれると。でも、私の腕時計が止まったのは此処に連れて来られる前だつたはず」

「それはきっと、先ほど此処を通り抜けた時に止まってしまったんですよ。恐らく麻奈が校門をくぐった瞬間、この場所に片足を突っ込んでいたのでしょうかね。でなければ、あの時走っていく麻奈を私が見ることは出来なかつたはずです」

「やうなの？」

「あの時はまだ此処に完全に囚われる前だつたので、易々と抜ける事が出来たようですが、時間の狂つている空間を通つた為に、麻奈の時計はそのまま止まってしまったんだと思います。まあ、それを

田舎に私は麻奈を追つたことが出来たんですけどね

「でも、狂つてゐてどうこう」と?

「ううん、何と説明すればいいのか……。これはあくまでも私の推測の域を出ないのでですが、此処では時間がある程度過ぎると、そこから巻き戻つてこようなんですね」

「意味が分からんだけだ」

「分かりやすく説明しましょ。以前此処で怪我をした事があるのですが、しばらくするとその怪我は跡形も無く消えてしましました。自然に完治したとか、そんな事ではありません。文字通り消えたんです。肉体の時間に関して言えば、その出来事は巻き戻つているといえると思います。もっと例を挙げてみましょ。激しい運動をして筋肉痛になつたとします。その痛みも此処ではほんのひと時経つと、何も無かつたように一瞬で消えてしまうのです」

「そんな事が」「

「あるのです。現に、私は自分でも正確には分らないほど長い間此処に閉じ込められていますが、一度も食事をした事がありません。流石に、美味しいものを食べたいという欲求は募りますが、此処には食べ物が何も無いので我慢するしかありません」

麻奈はあまりのことに絶句してしまった。

ジユリアンは皮肉気に笑つて、足元に視線を落とす。

「私達を閉じ込めている誰かは、よっぽど私達を此処に置いておきたいんでしきうね。年を取らせて、そのまま死なせることも、餓死

れかぬ」とも許さないんですから

「どうしてなのかな?」

「え」

急に足を止めた麻奈に気が付いて、ジュリアンは振り返った。

「こんなおかしな事、普通出来る? ジュリアンの所ではあり得る?
私の世界の科学では絶対無理だよ。こんなにまでして、此処に
私達を閉じ込めて、人の形まで変えてしまうなんて……。一体何が
目的なんだ?」

麻奈は先ほど会ったサルーンの姿を思い出して身震いした。

彼はあんな姿になつてしまつて、どれほどショックだったの。
その時のサルーンのことを考へると、麻奈は胸が痛くなるようだ。
自分ならば、きっと耐えられないに違いない。

それに、このままずっと帰る事が出来なければ、明日は我が身な
のだ。

パシヤン。

またどこかで水音が聞こえた気がした。

遭遇 ③（後書き）

いつも読んでいただきましてありがとうございます。

時間。これは難しい問題でした。あんまり詳しく調べたりしてないので、深く考えずに、どうぞさらっとお読みください。

こんないい加減な話ですが、どうぞまた遊びに来て下さい。山石でした。

遭遇 4（前書き）

この話には触手の表現があります。苦手な方は注意下さい。

「目的、か。それが分かれば少しは此処を出る手がかりが掴めるかもしれませんね」

ジュリアンは、何やらぶつぶつ呟きながらまた歩き出した。それを見て麻奈も後について行く。

今は怯えていても仕方が無い。それよりも、この廃校はやはりどこかで見たことがあるような気がする。麻奈は記憶の糸をするすると手繰り寄せ始めた。しかし、その答えが出てくる前に、ジュリアンが突然麻奈を振り返った。

「そうそう、一つ説明しておかなければいけません。此処で暮らしている人たちとはそれぞれ自分の部屋を持つていて、普段はほとんどそこから出る事はありません。唯、例外が一人いて、『アノ人』だけはいつも廊下を徘徊しているんです」

「アノ人？」

「どうして」「ええ、もしもアノ人に会つたなら、全力で逃げて下さい」

ジュリアンは声を一段落として麻奈の顔を覗き込んだ。

「とても危険な人なんです。彼に言葉は通じません。だから、問答無用で襲ってきますよ」

「そんなに危険な人が」

麻奈は青褪めた。

「一体どんな人なの……」

「しつ」

麻奈の言葉を遮つて、ジュリアンが麻奈の口を片手で塞いだ。その視線は警戒するように辺りを見ている。一瞬にして緊張が走った。ジュリアンを見て、麻奈も息を潜めて周りを窺つた。

聞こえる。廊下の突き当たりにある階段からベチャリ……ベチャリと嫌な音が響いてきた。

ジュリアンが麻奈を制して聞き耳を立てる。濡れたモップを床に付けるような音が、階段の下から徐々にこちらに近づいて来る。

「噂をすれば、アノ人です」

ジュリアンが急に踵を返して、麻奈の手を引いて走り出した。いきなりの事で麻奈は完全に面食らつていたが、ダッシュするジュリアンに引きずられるように走り出した。

あまりに素早いジュリアンの動きに、麻奈はアノ人なる者の姿を見る事は出来なかつた。最も、散々脅かされていたので、今更見たいとも思はない。今しがた聞こえてきた粘ついた足音と相まって、麻奈の頭の中ではおどろおどろしいアノ人の姿が出来上がつていた。

麻奈は頭を振つて、その嫌な想像を無理やり追い出した。今はそんな空想に浸つていい暇はないのだ。引っ張つてもらつていいとはいえ、ジュリアンの疾走について行くのは麻奈の体力ではかなり無理がある。

麻奈の心臓は今にも張り裂けそうになり、喉はひりひりと痛み、

鼻から口にかけて血の味が広がる。もつれる足を懸命に動かし続けるが、もう足はがくがくで言う事を聞いてくれない。倒れそうになつた瞬間、麻奈のすぐ後ろで何かがベチャリと貼り付く音がして、慌てて振り返つた。

途端、ひつ！ と漏れる悲鳴。

淡いピンク色をした細長い物が、麻奈の腰にべつたりと張り付いている。

その根元は同じ色をした大きなゼリー状の塊に繋がつていて、ねばねばした粘液を滴らせながら床を這つてているのだった。肉色をしたその塊には、真ん中辺りにぱっくりと切れ目が入つていて、そこから真っ赤な内部が見えていた。それは歯も舌も無い唯の裂け目だつたが、麻奈には紛れも無くアノ人の口なのだと理解できた。

アノ人は四方に触手のようなものを広げ、麻奈とジュリアン田掛けて這つて来る。本体の動き自体はそう速くは無いのだが、そこから伸びる触手はものすごい速さで伸びていて、二人を絡め取ろうとしていた。麻奈の腰に張り付いたのは、その中の一本で、粘液を垂らしながらうねうねと麻奈の腰に更に巻きついてきた。

「いやああ！ 取つて、取つて！」

麻奈はパニックに陥り、腰の触手を振りほどこうと手を田茶田茶に振り回した。その拍子にジュリアンと繋いでいた手が離れる。

「麻奈、駄目です」

ジュリアンが慌てもう一度麻奈の手を取ろうとする。しかし、不意に麻奈の体が後方へ飛んだ。アノ人が見つけた獲物を逃すまい

と、驚異的な力で麻奈を手繰り寄せ始めたのだ。

ずるずると引きずられる麻奈。その顔は蒼白になり、恐怖で悲鳴すら出てこない。

ジュリアンは舌打ちすると、迫る触手をかわしながら麻奈を残して走り去つていった。麻奈はそれにも気が付かずにアノ人を凝視していた。怖くて仕方が無いのに、視線を外すことが出来ない。

麻奈がアノ人の足元まで手繰り寄せられると、ぶよぶよとした体に紅い三日月が浮かんだ。口を吊り上げて笑っているのだと気が付いて、麻奈の背筋は凍りついていた。

遭遇 4（後書き）

いつも読んで下さってありがとうございます。また、お気に入りに登録して下さった皆様！！本当に、本当にありがとうございます。皆様の存在が山石の励みになつております。

今回新キャラを出す事が出来ました。容姿にかなり問題あります。あ、問題ないキャラの方が少ないみたいですね……。
これからもどうぞよろしくお願い致します。山石でした。

遭遇 5（前書き）

引き続き、触手表現があります。苦手な方は「」注意下さい。

アノ人は何本も触手を差し出すと、麻奈を抱きしめるようにそれらを絡みつかせた。そして、ゼリー状の自分の身体に押し込めるよう、捕まえた獲物をきつく締め付ける。

「つう、ぐるしい」

顔や身体にべとべとした粘液が滴り落ちてきたが、それを気にしている余裕は麻奈には無かつた。身体を締め付けられながらピンクのゼリーに顔を押し付けられると、たちまち息が出来なくなつた。

もう駄目だ、そんな言葉が頭の中をよぎつた途端、麻奈は無意識にアノ人の身体をタップしていた。それは、幼い頃に兄とプロレスごっこをしていた時に教わった「参った」のサイン。

その途端、アノ人の体がピクリと動いた。きつく巻きついていた触手が心なしか緩んだ気がする。

反応があつたことに驚き、麻奈はもう一度とんとんとゼリー状の身体を叩いた。実際にはベチャベチャという音がしたが、締め付けは明らかに弱くなつた。

今度は気のせいではなかつた。麻奈は確信をもつて、もう一度それを繰り返す。すると、麻奈の背中に回されている触手がとんとん、と同じよじよじに叩き返してきた。

「アアオオオオ」

真っ赤な裂け目から、水の中で喋るような竪つた声が漏れた。通じた。麻奈は思い切つて話しかけてみた。

「あの、ちょっと苦しいんだけど。離してくれませんか？」

すぐ鼻先にある、肉色をしたゼリーからは何の反応も無い。ジュリアンが言つていたように言葉は通じないらしい。それでも麻奈はアノ人の身体を軽く叩きながら話しかけた。

「じゃあ……せめてコレを少し緩めて欲しいんですけど」

頬がくっつくほど距離を強いられていて、内心はかなり気持悪かつたが、ゼリー状の体を叩きながら勤めてフレンドリーに話し続けた。麻奈が助かる道はこれしか無いのだ。気持悪くても何でも、続けなければならない。そもそも、麻奈のすぐ横にある真っ赤な裂け目に今にも放り込まれてしまふ気がする。

アノ人は律儀に麻奈の『とんとん』に返事を返してくれる。強弱やリズムをそつくり真似て。

「コレ気に入りました？　またいつでもするので、今日のところは離してくれませんか？」

優しい口調で続けるが、正直もう一度とやつたくなかった。『とんとん』のバリエーションも尽きてきた頃、麻奈の体は粘液でぐつしょりと濡れていた。

「あの、そろそろ本題に離して下さいね？」

麻奈はアノ人の身体を撫でながら続けて話しかける。すると突然、アノ人の動きがまたもピタリと止まった。

あれ？　と戸惑う麻奈を他所に、ゼリー状の体が小刻みに震えていた。

次の瞬間、がばっと全ての触手が麻奈の身体に巻きつけられ、頬擦りでもするかの様にアノ人が更に身を寄せてきた。

「アアア、アアアツ」

圧迫が強くなり、麻奈は霞む意識の片隅でアノ人の咆哮を聞いた。息が出来ない。もう駄目かも知れない。

麻奈の瞼が落ちかけたその時、突然冷水をかけられた。
水を浴びせられた途端、アノ人が震えながらその場に硬直した。
麻奈に巻きついていた触手たちも、一瞬硬直した後に一斉に力が抜けて離れていった。麻奈はそのままくたりと床に崩れ落ちたが、途端にはつと識を取り戻す。落ちかけていた瞼を引き上げると、バケツを持ったジュリアンがすぐ側に立っていた。

「麻奈、今ですっ」

後にも先にも、この時の動きが一番素早かつたと麻奈は思う。アノ人の足元から転がり出ると、綺麗なクラウチングスタートを決めてジュリアンの元へと走りだした。

ジュリアンはバケツを放り投げると、バトンを受け取る要領で麻奈の手を掴み、一目散に走り出した。二人は廊下を曲がり、階段を下りてからも暫く走り、更に手近にあつた教室へ飛び込んだ。ここまで来ればアノ人も追っては来られないだろう。

教室に入ると、麻奈は安堵と共に腰が抜けたその場にしゃがみ込んだ。全力以上の疾走をしたお陰で、麻奈の疲労は限界を超えていた。ぜえぜえと肩で息をしている。

「ジュリアン……ありがと」

「どう致しまして。無事で何よりです」

ジュリアンは涼しい顔で答える。

「アノ人の弱点は水です。水をかけると一瞬だけ動きが鈍るので、今度からは捕まる前に水をかけて下さい」

「了解、覚えとく」

「それにしても……」

ジュリアンが麻奈を見下ろした。

「酷い有様ですね」

麻奈はアノ人に捕まつたお陰で、全身ぬるぬるの粘液塗れだった。

「知ってる」

麻奈はぶすっとした顔で頷いて、頬に滴る粘液を指で掬い取ると、嫌そうに手を払った。指に付いていた粘液が、ぴちゃりと音を立てて床に飛び散るのを見て、ジュリアンは麻奈に気取られない様にそつと息を吐き出した。

麻奈の姿を上から下まで舐める様に見つめながら。

薄桃色の粘液に濡れて肌に張り付く麻奈の上着は、豊かな胸の膨らみを忠実になぞっている。ショートパンツから覗く太ももはてらてらと光って卑猥なほど眩しい。はあはあと力なく乱れる呼吸と、その頬に滴る粘液も背徳感を搔き立てた。

これはこれで、なかなかそそる。ジュリアンは心の中でこっそり

と笑う。唯一つ残念なのは、シャツの中にもう一枚服を重ねていることだらう。濡れても服が透けないのだ。

しかし、そんな考えをおぐびにも出さず、ジュリアンは麻奈の隣にしゃがみ込むと、実に誠実そうな心配顔で話しかける。

「大丈夫ですか？ 怖い思いをしたでしようから、住人を紹介するのはまた今度にしましょ。今は少し休んでください。まずはその汚れを落としましょ。」

麻奈はこくりと頷いて、まだ疲労感が抜けていない身体に鞭打つて立ち上がった。

遭遇 5（後書き）

読んで下さりありがとうございました。
ジュリアン……かなりのむつりですね。
それでは、また次回お会いしましょう。山石でした。

「まずは、麻奈の部屋を決めましょう」

ジュリアンは足取りの重い麻奈を伴いながら廊下を進む。

「今はほとんど学校になっていますが、探せばまだホテルだった頃の部屋が残っているかもしません」

「ホテル？」

麻奈が首を傾げた。たつたそれだけの動作なのに酷くだるい。

「ええ。少し前まで、此処はホテルだったんです。探せばまだ一部屋ぐらい残っているかもしません」

「良かった、ベッドで寝られるんだね。最悪、机を並べてそこで寝るのかと思つてたよ」

「それは、痛そうですね」

ジュリアンが呆れ顔で言った。

一人は手近な教室を、一部屋ずつ探して回つたが、どこも机が並べてあるだけのただの平凡な教室だった。そろそろ当たりを引き当てたいところで、麻奈が思い出したように口を開いた。

「やついたら、此處つて私の中学の時の校舎にそつへつ

「何ですか？」

麻奈の何気ない呟きを耳にして、ジュリアンが振り返った。

「え？ ほり、このジャージなんかそのまんま私の中学校の時のものだよ」

麻奈は、傍のロッカーから取り出した紺色のジャージをジュリアンの目の前で振って見せた。ジュリアンは驚いてジャージを見つめている。どうやら、小物まで細かく再現されている事に驚いているようだ。

「全く。考へても、考へても此處の謎は答えが分らない。最早、これは怪奇現象なのではないかと思えてきますよ」

ジュリアンは深いため息をつくと、軽く目頭を揉んだ。彼は一旦考えるのを止め、解けない謎を頭の中から追い出すことにしたようだ。

「ああ、有りましたよ」

暫くして、一人はよつやく田舎の部屋を見つけることが出来た。ジュリアンは、『2・4』の札がかかっている扉をからじと開けて

麻奈を手招きした。それを受けて、麻奈は横開きの見慣れた扉の脇から中を覗いてみた。

そして、驚きのあまり口が半開きになつた。

そこは、眩しいほどに白い小奇麗な部屋だった。床は白く光る大理石で出来ていて、アンティークのソファーアー一組にサイドテーブル。部屋の奥にあるダブルベッドには、世の女性達の憧れである天蓋がついている。麻奈は嬉しさを抑えきれずに、夢見る様に胸の前で手を組んでいた。

しかし、ジュリアンは部屋を見渡して眉を寄せた。部屋の隅に置かれた場違いな物が気にかかつたのだ。

ジュリアンは部屋の隅に近寄ると、それに手を触れてみた。そこにあるのは、巨大な水槽だつた。天井まで届きそうな高さと、大人が両手を広げてもまだ余裕がある幅。奥行きもかなりあるようで、巨大な鮫でも楽に入れる事が出来そうだ。

しかし、こんなに大きな水槽はこの部屋には似つかわしくない。おまけに、中は水で満たされてはいるものの、魚は一匹もいなかつた。麻奈も不振に思つて水槽に近づく。

「コレ、何がいたのかな？ ジュリアンの所では客室に水槽があるのは普通の事？」

「いいえ。観賞用の魚がいるのならまだ分かりますが、こんな水だけの水槽を客室に置いたりはしません」

ジュリアンは水槽に顔を近づけたが、何かがいた痕跡は見つけられない。水は透明で浮遊物は何もなかつた。

「よっぽど大きな魚を入れるつもりだったのかな？ ……まあ、いや。ちょっと邪魔だけど、生活するのに問題はないし。それより、

「バスルーム見てくる」

「ああ、使い方が麻奈の時代と少し違つかもしれません。説明しますよ」

ジュリアンが後を追つてきた。

「ん？ つてことは、ジュリアンの馴染み深い場所つていうのがこのホテル？」

「ええ、そうですよ」

ジュリアンはあまり話したくないのか、それだけ言うと麻奈の背中をとんと一つ押して、一緒にバスルームへと入った。麻奈は、男人と一緒にバスルームに入るのが何となく恥ずかしかつたが、中に入つてみて更に驚いた。

大きなドレッサー付きの脱衣所の奥には、床に埋め込むタイプの丸い湯船があり、その隣にはシャワーブースまで付いている。ドレッサーの上には様々なアメニティーが並べられていて、引き出しを開けると化粧品まで揃つていた。

「うわあ、何か無駄に豪華だねえ。当然の様に大理石だし」

「気に入りましたか？」

「それはもう」

ジュリアンはなぜか得意げに笑うと、浴槽の傍にあるボタンを指差した。

「「」のボタンが浴槽にお湯を溜めるもので、「」しつちがジヒットバス。これはバスソープに間接照明。シャワーは此処に手をかざすと出できます。此処に立つとHアーハタオルです」

説明を受ける麻奈の目はキラキラと輝いていた。

「脱衣所に洗濯乾燥機があるので、汚れた服はそちらで洗って下さい」

「え、そんなの無かつたよ」

「」です。と言つてジユリアンがドレッサー脇のボタンを押すと、壁から四角い箱が迫り出してきた。どうやらこれが洗濯機らしい。

「はあ、何かすくべ便利だね。指先一つで何でも出来ちゃう」

ジユリアンはやはり得意げに笑う。

「他に分からないことがあつたら呼んで下さー」

「ありがとう」

「では、ゆっくり休んでください。肉体的な疲労は問答無用でなかつた事にされますが、精神的な疲労はどんどん蓄積されていきます。一度睡眠をとるのがお勧めです」

「そうする。何だか色々あり過ぎて頭がパンクしそう

ジユリアンの言葉通り、麻奈に肉体的な疲労はもう残っていなかつた。あれだけへばつていたのが嘘の様に、いつの間にか疲れが消

「それでは、お休みなさい。起きたら私の部屋に来てもらいますか。しかし、なぜだか氣だるい疲労感がこびり付いているような気がしてならない。

「それでは、お休みなさい。起きたら私の部屋に来てもらいますか。しかし、なぜだか氣だるい疲労感がこびり付いているような気がしてならない。

「ジュリアンの部屋はどこ？」

「私は三階の『1・2』と書かれた部屋にいます」

途端に麻奈の顔が曇る。

「遠いね。三階にまだアノ人がいるかもしれないし」

麻奈は無意識にジュリアンの袖を掴んでいた。それを見てジュリアンは、やんわりとため息を吐いた。自分の袖を掴む麻奈の手を優しく剥がす。

「では、暫くしたら私が迎えに来ます。此処の時計は止まっているのでいつとは言えませんが、それでもいいですか」

「うん、お願ひします」

麻奈は大げさなほど頷いた。一人で廊下はしばらく歩けそうにない。

「あ、もしも迎えに来た時に私がまだ寝てるようだったら、部屋に入つて直接起こしてくれる？ 私、ノックの音で起きる自信がないから。それじゃあ、早速お風呂使わせてもらつね」

そう言つと、麻奈はぐるりと踵を返してバスルームへと消えて行つた。後に残されたジュリアンは何ともいえない顔でその場所に立ち尽くしていた。

「直接起こして良いって。。。麻奈はついさっき会つたばかりの男に寝姿を見られても平氣なのか？」

ぼそりと呟きながら麻奈の部屋を後にする。その顔には今まで見たこともないような暗い笑みが浮かんでいた。

「信用している、という事か？　だとしたら、とんだ勘違いだよ」

ジュリアンは自嘲気味になおも笑う。

「私がどんな人間なのか知つたら、君は一体どうするのだろうね」

ジュリアンの靴音が夕焼けに染まつた静かな廊下に響いてゆく。不意に立ち止まり、彼は自分の足元に目を落とした。透けることなく夕日を反射している革の靴。そして、消えかけた足。もう膝まで透けている。きっと足の先は完全に透明になつていることだろう。

消えていく体。

廊下の壁を見ると、そこにも鏡が掛けてあった。ジュリアンは鏡の中の自分と目が合い、笑みを深めた。

ジュリアンは考える。もしかしたら、自分はもう狂い始めているのかもしれない。

麻奈に最初にした忠告を思い返してみた。此処に住む人達に気をつけろと、自分は確かにそういうたばずだ。

「それは勿論、私も含めて」

ジュリアンは楽しそうに独り言を続けながら、足元に伸びる影を見つめた。影の足は透けることも無く、長く長く伸びている。ジュリアンは一人くつくつと笑う。とても楽しくなってきた。

麻奈が自分の過去を知つたら、一体どう思つのだろ？。もう話しかけてもくれないだろ？か。それとも、田線さえも合わせなくなるかもしれない。

そんな想像をしながら、しかしじュリアンは思う。此処に来るようには選ばれたという事は、麻奈にも後ろ暗い過去が有るという証拠なのだ。なぜならば、此処に招かれるのは胸に罪悪感や後悔を抱えている者ばかりなのだから。

紅い廊下にまた靴音が響く。
コツコツコツコツ……

「所詮は同じ穴の貉。ならば麻奈の望む『いい人』を続けるのも悪くないかもしれない。君はどんな黒い過去をもつているんだ？。せいぜい、化かし合つてしまつ。私が正氣でいられる内は」

遭遇 6（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。評価までしてもらえて嬉しい限りです。本当にありがとうございましたーー！
麻奈は乙女趣味のようですね。
ジュリアン、真っ黒になつてきました……。
それでは、また。山石でした。

麻奈は熱い湯を頭から浴びながら、いつの間にか鼻歌を歌つてゐる自分に気がついた。

汚れた服は洗濯機に放り込んでおいたから、じきにまた着られるようになるだろ？ シャワーでぬるぬるした薄桃色の粘液を流して全身を綺麗に洗うと、さつきまでの恐怖が少し薄れていく気がする。

湯張りを終えた合図の音楽が浴室に響いた。麻奈は湯煙の立ち上る浴槽に、足先からゆっくりと浸かつた。バスソープで泡立てたお湯に入ると、じわじわと張がほじけていくよ？

「あー、極楽極楽」

言つてから、それはこの瞬間だけの事だと気がついて、寂しさと少しの不安を覚えた。

此処は極楽とは程遠い場所だったことを思い出す。それでも、風呂に入る時は気持ちが良かつた。疲れや嫌な気持ちがまるでお湯に溶け出していくよ？

気持ちに余裕が出でると、さつき会つた人たちの事を思い返してみる気になつた。

アノ人。彼のことを考えると、まだ体が少し震えてしまう。

彼に捕まり手繩り寄せられた瞬間、麻奈が感じていたのはただの恐怖だけだった。もう絶対会いたくないとさえ思う。

しかしそう思う一方で、彼の何かが気にかかっていた。『とんとん』に反応したり、子供みたいにそれを真似をしたり。

「本当はどんな人で、どんな事を考えているのかな」

麻奈は湯船の泡を掬い取つて、ふうと飛ばした。

次に浮かんできたのは、サルーンだった。麻奈の中での彼の印象は、静かで絡みづらい人だつた。

彼の奇妙な外見には少し驚いたが、恐らく優しい人なんだと勝手に思つていた。サルーンの遠い眼差しを思い出して、麻奈はふうと一つため息をついた。

麻奈はのぼせる前に湯船から上がり、そのままシャワーの線を捻つた。熱いお湯が出てきた、麻奈の肌から細かな泡が流れていった。麻奈は排水溝に吸い込まれていく泡を見つめながら、ジュリアンのことを考えていた。彼の事を考えると、自然に笑みが零れてくるから不思議だ。

彼の物腰や穏やかな顔を見ると、心が少し落ち着くような気持ちになる。

麻奈は浴室を出ると、いつの間にか、にやけてしまつている顔をバスタオルに押し付けた。体に付いた水気をふき取つてから、さつき見つけたジャージに着替える。下着も洗濯中なので直接着ると、肌にじわごわした生地が触れた。少し着心地悪いが、この際仕方が無い。何だか心もとない胸元に手を当てながら、麻奈はすぐにベッドへ潜り込んだ。

「ジュリアンの姿が完全に消える前に、帰る道を見つけてあげたいなあ」

そう言葉に出してから、ふとジュリアンの泣き顔を思い出して、一人顎を染める。自分はどうやらジュリアンに好意を寄せ始めているようだ。麻奈は胸に芽生えた淡い思いに少しだけ身を任せた。こんな気持ちになるのは何年ぶりだろう。

ふわふわの羽根布団の感触を堪能していると、眠気はすぐに襲ってきた。神経が高ぶついて眠れないかも知れないと心配していたが、自分で思うよりも麻奈の神経は図太く出来ているらしく。心地よい睡魔に身を任せて、麻奈は夢も見ずに深く眠った。

見慣れぬ美しい男に圧し掛かられるまでは……。

「おー」

麻奈は夢うつつに自分を呼ぶ声を聞いた。それは囁きにも似た微かな声だったが、低く涼やかに麻奈の耳に流れ込んできた。しかし、聞こえてはいるものの眠くて目を開ける氣にもなれず、わざわざそれに答える気も全く湧いてこない。まだ覚醒は遠い。

「ん、まだ。もう少し」

鬱陶しそうに眉間に皺を寄せて寝返りを打つ。まだ眠たいのだ。枕元に立つ男は、ギシリとベッドを軋ませながら片膝を乗り上げる。

「起きないのか？」

返事を待つ様子もなく男は完全にベッドに上がり、覗き込むようにして麻奈に覆い被さった。

男の長い髪がさらりと落ちて、麻奈の頬を撫でていった。麻奈はくすぐつたそうに男の髪を払いのけ、薄く目を開けた。寝ぼけているため、多少焦点の合わない瞳で男を見据え、次の瞬間には驚いて目を覚ました。

そこには夢のように美しい男がじっと自分を見下ろしていた。銀色の長い髪を高い位置で一括りに縛り、切れ長のアイスブルーの瞳は憂いを含んだように冷たく鋭い。高い鼻に、艶のある薄い唇。一見すると女性的にも見えるのだが、太く凛とした眉毛と広い肩幅、たくましい均整の取れた体格は間違えようもなく男性のものだった。

まさかこんな風に起こされるとは夢にも思っていなかつた麻奈は、事態が把握出来ずにただ目を丸くするばかりだつた。何という心臓に悪い起じそれ方だらう。

男は襟を立てた黒い前合わせの服を着ていて、香が焚き染めてあるのか、その胸元からは甘い香りが漂つっていた。

「なんだ起きたのか」

どうでも良い事のように麻奈にそう告げると、男は何の遠慮も無く頬に触れてきた。すぐ間近で柔らかい衣擦れの音が聞こえてきて、麻奈の胸は寝起きにしては大分速い鼓動を刻み始めた。

呆けたように声も出せない麻奈を他所に、男は顔を近づけて更に見つめてくる。男の不羨な視線を浴びながら、麻奈はまず浮かんだ疑問とこの体勢解消することにした。

「あの、誰ですか？ 退いてください」

男は凜々しい眉を寄せると、不機嫌な声で言った。

「普通」

「は？」

「もつと色氣のある女の方が良かつたが、この際選り好みしていらっしゃねえか」

男は麻奈の布団を剥ぎ取ると、ジャージの胸元に手をかけよつとする。

「ちよ、ちよっとー、何するの?」

慌てて麻奈は男の手を払いのける。男はびっくりしたよつな顔をした後、舌打ちして麻奈の手を捕まえた。

「手間をかけさせんな」

声を荒げたわけでもないのに、男の言葉は麻奈の動きを止めさせた。

逆らってはいけないよつな気迫を男から感じ取つて、麻奈は身を竦めた。捕らえられた手も、万力で締め上げられたように動かない。男がおとなしくなつた麻奈の服を捲り上げよつとしたそのとき、トントントンと扉をノックする音が響いた。

「いぬせえのが来やがつたか」

舌打ちして男が手を止める。

助かつた。と思った瞬間、男は麻奈の脣をべろりと舐め上げて素早く身を起こした。不意打ちを受けた麻奈は、何が起きたのか理解出来ずにベッドに未だ転がっていた。

「油断しそぎだ。犯されかけてたつて分つてんのか？」

男は初めて笑った。その美しい顔に似合わない露骨な物言いに、麻奈は羞恥と怒りが湧いてきた。

入りますよ。という遠慮がちな声がして、横開きの扉からジュリアンが顔を出した。いつまで経っても中から変事が無いので、様子を見ようと覗いたらしい。ジュリアンは銀髪の男を見てたちまち表情を固くした。

「ユーハ。どうして此処に」

ユーハと呼ばれた男は面倒くさそうに顎で麻奈を示す。

「新しい奴が女だったから見に来たんだよ。一部屋ずつ風漬しに探して来てやつたのに、とんだ期待はずれだ」

ユーハの言葉に麻奈はむつとした。ユーハは尚も続ける。

「顔も身体も並だな。悪くねえけど、良くもねえ。期待した分がつかりだ」

「ユーハは言葉に気をつけねばいけですね。麻奈、やつて良いですよ」

ジュリアンは枕を振り上げている麻奈に大きく頷いた。ジュリア

ンのお許し（？）を得て、麻奈はコエの後頭部に掛けて思い切り枕を投げつけた。しかし、それが当たる直前、コエは前を向いたまま首を傾けただけでそれをひょいとかわした。

「何しゃがる」

美しい顔に怒りを孕ませコエが振り返った。

「それは、いつちの台詞」

ジユリアンが来たことによつて、すこしだけ強気にでる麻奈。

「貴方には、自分が何したか分つてゐる」

「あれぐらいで騒ぎ立てやがつて」

コエは舌打ちしながら麻奈に近づく。麻奈は剥ぎ取られた掛け布団を手繰り寄せ、胸まで引つ張りあげた。下着を着けていないことを、今思い出したのだ。コエが再び枕元までやつて来て、麻奈を冷めた目で見下ろした。麻奈も目だけを動かしてコエを睨む。

「騒がしい女は興醒めだな。俺はもっと淑やかな方が好みだ」

そう言つが丘や、コエは麻奈の顎を掴んで無理やり上を向かせた。

「何するの？」

麻奈は伸びてきた手をすかさず払いのけた。コエが舌打ちするが、麻奈は彼を睨んだまま動かない。ぴりぴりとした雰囲気のまま硬直する一人へ、柔らかい声が割つて入つた。

「麻奈、彼を相手にしては駄目ですよ。それよりも」

ベッドの反対側からジュリアンの手が差し出され、麻奈の手をそつと優しく掴んだ。手を引いて麻奈をベッドから降りるように促し、彼はそのままバスルームまで案内していく。

「まずは着替えて来て下さい」

ジュリアンの丁寧なエスコートに、怒り心頭だった麻奈も頬を染めて大人しく従つた。「ごゆっくり」と声をかけてバスルームの扉を閉めてからジュリアンが部屋へと戻つて行くと

「甲斐甲斐しいことだな」

ユーハが長い足を組んでソファーに腰を下ろしていた。

「まだいたんですか」

ジュリアンの声はいつになく冷たい。その視線は心底嫌そうにユーハを見ていた。凍えそうな視線をものともせずに、ユーハは尊大な態度を崩さない。

「随分大切にしてるじゃねえか」

「まだ来たばかりで、色々不安でしうからね」

「嘘吐け。利用できそつないと」とん利用する気だろ。可哀想にあのお嬢ちゃん、ぼろぼろになるまで酷使されるとも知らないで」

「人聞きの悪い事を言わないで下せー」

ゴエは鼻で笑つた。

「お前だけに甘い汁を吸わせるわけにはいかねえよ」

「おや? セつき好みじやないと云つたじやありませんか」

「此處には女がいねえんだから、アレで我慢するしか無いだら」

ゴエは立ち上ると、ジュリアンの胸の上にズボンと拳を打ち下ろした。ジュリアンは僅かに表情を強張らせて、咳き込んだ。かなり痛い。

「独り占めしやがつたら許さないからな」

ゴエの剣呑な視線を、ジュリアンは唇の端を持ち上げて受け止める。

「見返りがなければ分けてあげませんよ」

ゴエは美しい顔を歪めて忌々しげに舌打ちする。

「お前のものじゃねえだろ!」

ゴエは足音も荒くドアを力任せに開け、同じように閉めて出て行つた。ジュリアンは楽しそうに笑いながらソファーに身を沈め、ゆつたりと足を組んで目を瞑つた。

「 もうほどなんぞ、俺のものだよ

遭遇 7（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございました！！
新しいキャラ出てきました。彼は口が悪いです。
それでは、また次回お目にかかりたいと思います。山石でした。

「お待たせ」

着替えを済ませた麻奈がおずおずとバスルームから顔を出した時には、頭の寝癖はきちんと直っていて、薄く化粧も施してあった。ユエに『期待はずれ』呼ばわりされたのはかなり悔しかつたのだ。

「そんなに待つていませんよ」

ジュリアンは微笑みながら席を立つた。

「さつきの人は」

麻奈は小動物のような警戒した目できょろきょろと辺りを探つていた。

「追い返しましたよ」

途端に麻奈は安堵とも落胆とも取れるため息を吐いた。

「そつか、良かつた。あの人本当に失礼な人だつた」

頭にきちゃう。と頬を膨らませる。

「私あの男は嫌いです」

ジュリアンの同意に麻奈は笑つた。

その笑顔を見ながらジュリアンは思つ。ユエは本当に馬鹿な男だ

と。もつと一寧に接していれば、恐らくすぐにでも麻奈を落とせていたのだろうに。

ユエの失敗にジュリアンが内心ほくそえんでいると、麻奈がすぐ側まで寄ってきた。

「私、随分寝てたの？ 大分待たせちゃった？」

「いいえ、ご心配なく。私も自室でのんびりしていましたよ」

「それなら良かつた」

「早速ですが、残りの住人を紹介しましょう。ああ、さつきの男はユエと言つて、美人ですがあの通りの男です。今後も、あまり関わらない方がいいでしょうね」

「もう、近づきたくない」

渋い顔で頷く麻奈の顔がほんのり赤くなるのをジュリアンは見逃さなかつた。それは怒りのためなのか、それとも……。

「では、最後の一人に会いに行きましょう」

了解。と返事をして、麻奈はジュリアンの後に付いて歩き出した。

「ねえ、最後の一人はどんな人なの」

麻奈は最初に通った螺旋階段を下りながら、斜め下で揺れているジユリアンの後ろ頭に話しかける。

「そうですねえ」

ジユリアンは振り返らずにどんどん階段を降りていく。その歩みに置いていかれないように、麻奈は早足で追いかけた。彼は色々な事に良く気が付く人なのだが、歩調だけはマイペースだった。

麻奈はジユリアンを追いかけながら、こつそりため息を吐いた。

「最後の一人は、そうですねえ、少々驚くような外見ですね」

「 そう」

此処でびっくりしない外見の人がいただろうか。全員、漏れなく驚くような外見だなんて、まるでお化け屋敷だ。と麻奈は密かに思つた。

一階の廊下を歩きながら、麻奈は忙しなく周辺を警戒していた。物陰や角には特に注意を払う。保健室や職員玄関、どれもこれも懐かしいものが目に飛び込んでくるが、懐かしさに浸る事は出来ない。何時アノ人があの濡れたモップを引きずるような音を立てて出てくるか分からなかつた。

今は懐かしさよりも、恐怖の方が断然大きい。

「着きましたよ」

そう言つてジユリアンが軽く扉をノックした部屋は、『木工室』

の札が掛かっていた。色の剥げかけた木の扉には細かな傷がたくさんついている。そうそう、此処って確かにこんな感じだつたなあ。と麻奈はやはり懐かしい気持ちが湧き上がる。

「リーズガルド、入りますよ」

返事は無いが、ジュリアンは扉を開けて中に入つて行つた。麻奈も恐々、お邪魔します。と咳きながら続く。

まず驚いたのはその部屋の暗さだつた。次に気がついたのは、力サカサと何かが擦れあう音。それは一つ一つは小さな音だが、幾つもの音が重なり合い、大音量となつて押し寄せてきたのだ。おまけに、部屋には濃密な何かの空気が満ちていて、入るのを一瞬躊躇つてしまつ。

それでも、勇気を持つて麻奈が一步踏み出すると、ブーツの下で力サリと何かが音を立てた。驚いて側の壁に手を付いたが、そこにもかさかさとした手触りのものがびっしりと付いている。

「何これ」

麻奈は素早く手を引つ込んだ。ようやく目が慣れてきた頃、麻奈は誰かが窓際に立つてゐる事に気が付いた。

自分と同じ位の身長のその人は、俯いているようで顔が良く見えない。突然現れたお客に気付いていないのか、じつと佇んだままぴくりとも動かなかつた。

「リーズガルド、起きてください」

ジュリアンがそう言つてカーテンを開けた。シャッと音を立ててカーテンが引かれると、窓から入つてくる西口が部屋の中を紅く染めた。

麻奈は目の前の光景に声が出そうになるのを、口に手を当てて何とか抑えた。悲鳴は危険、悲鳴は危険。何度も自分に言い聞かせる。

そこは、見渡す限り緑の葉が生い茂っていた。壁や床、果ては天井に至るまで、びつしりと薦が張り巡らされていて、脈打つように部屋中に薦植物が広がっている。それ等は全て窓際に立つ人物から生えている物で、その人の腰から下は緑色の薦の集合体に変わっていた。それは最早、人と呼べるのか不安になる姿だった。

良く見ると、床や壁の薦達はもぞもぞと思い思いに動いていて、それぞれの葉が触れ合ってカサカサと耳障りな葉ずれの音を響かせている。

薦やその葉っぱが勝手に動いているのを見ると、嫌悪感がせり上がりてくる。しかし、麻奈は何とかそれを表に出さないように、無表情を装つた。

一面緑色の蠢く部屋は、何かの体内に居るような錯覚を感じさせ、麻奈はまた血液がすうっと下に降りていくような気がした。
どうやら、さつき踏んだ物は、床を覆いつくす薦から生えている無数の葉の一枚だったようだ。それはアイビーの様な形をしていたが、唯一つ違うのは葉の中心部分に毒々しい赤色の斑点模様があるところだろう。

「リーズガルド、新しい住人を紹介しにきました。君で最後ですよ。
彼女は麻奈、少し前に着いたばかりです」

ジュリアンの紹介に麻奈は慌てて軽く会釈する。しかし、リーズガルドと呼ばれた男は目を閉じたまま動かない。聞こえていないのだろうか。麻奈は、男がまだ起きていないのかと心配になつたが、リーズガルドの瞼がゆっくりと開いて、ジュリアンと麻奈を交互に見た。

最初はぼんやりと見つめているだけだったが、その視線が好奇心を含んで麻奈に張り付いた。じつと見つめられて、麻奈は若干居心地の悪さを感じたが、麻奈の視線もリーズガルドに吸い寄せられていく。

色素の薄い茶色の髪をハリネズミの様に立て、同じ色のくりくりとした大きな目が特徴的だ。口角の上がった口元と顔に浮いているそばかすが、彼を一層可愛らしく見せている。

恐らく中学生くらいの年齢だろう。男の子なのにとても可愛い姿をした子だった。

この場所に年下の男の子がいる事に少なからず驚いたが、麻奈はリーズガルドを凝視していた視線を少しだけ下へ逸らした。人間離れした、リーズガルドの奇妙な下半身を残念に思っていると、突然少年から声が掛かつた。

「ねえ、アンタ物覚えはいいほう？」

「え？ まあ人並みには」

薦男からの突然の質問にきょとんとする。

「じゃあ、覚えといてよ。オレはリーズガルド。オレの名前を勝手に略したり、愛称なんかで呼ばないでよね。そういうのすこくムカつくから」

太陽のような笑顔でそう告げる少年だが、窓を背に立つその顔には拭い難い影が張り付いていた。

「それからさあ、アンタさつきからオレの葉っぱ踏んでるんだよね。

痛いんだからや、早く退いてくんない」

「あ、『めん』」

可愛い顔で辛辣な言葉を放つこの少年は、相当地い性格をしているようだ。

麻奈は慌てて足を退けた。しかし、床中に葉が生い茂っているため、足の踏み場が殆ど無い。仕方なく、今退けた右足を床が見える僅かなスペースにねじ込むと、殆ど爪先立ちになつて体を支えた。

「もしかして、コレ全部感覚があるの」

「あるから痛いって言つてるんだけど」

お前は馬鹿か、という視線に麻奈は少しイラつとした。奥歯を噛み締めて怒りを静めていると、リーズガルドが薦の一本を持ち上げて、麻奈の後ろにある扉を器用に叩いた。

「じゃあ、用が済んだら早速出てつてくれる?」

困惑のない顔で彼は出口を顎で示した。

遭遇 8（後書き）

読んでいただきましてありがとうございました。
それから、評価してくださった皆様！！本当にありがとうございます。書き手になってみて、評価してもらうのがこんなにも嬉しいことを初めて知りました。これからも皆さんに楽しんでいただけるように、もつともっと頑張りますので、どうかこれからもよろしくお願い致します！山石でした。

それまで黙つて見ていたジュリアンが待つてましたとばかりに口を開いた。

「わづですね。それではお邪魔しました。麻奈、行きましょ'づ」

「え、こんなにあつさり終わつていいの？ サルーンさんの時もそうだつたけど、もつとこ'づ、あるでしょ'づ紹介する事が。これじゃあ、お互いの名前ぐら'こしか分からぬよ」

「彼が生意氣だといつ事も理解して頂けたと思つのですが

ジュリアンの言葉にリーズガルドが顔を歪めた。

「相変わらず、すげえ毒吐くなあジュリアン。ねえ、アンタ麻奈だつけ。此処ではさあ、馴れ合いたい奴なんて誰もいないんだよね。まして、こんな姿になつたら尚更ね。アンタだつて本当は気持悪いと思つてるんだろう」

リーズガルドの言葉にどきりとした。確かに、彼の異形な姿は目を逸らしてしまいたくなるほど恐ろしい。しかし、それを彼に悟られたくはなかつた。

「全然、そんな事ないよ。そりやあ、初めて見たときはびっくりしたよ。でも、そんなもの第一印象に過ぎないもの。大事なのはその後。それに、私たち此処に閉じ込められている仲間じゃない！みんなで協力して出口を見つけようよ」

「ふーん。でも口ではさあ、何とでも言えるよね」

興奮気味にまくし立てる麻奈に、リーズガルドは疑わしそうな視線を送る。可愛らしい顔で人を踏みみするような目をするリーズガルドは、悪戯を思いついた子供のような顔をしていた。

「あ、じゃあこうしよう。他の奴らにも会つたんだつたら、これからオレの言う奴の所に行つて来て、そいつから何かもらつて来てよ。化け物じみた相手でも仲良く出来ます。つて証拠にさあ」

「待ちなさい、なぜ麻奈がそんな事に付き合わなければいけないんですか。私たちはリーズガルドのお遊びに付き合つている時間は無いんですよ」

リーズガルドは一瞬顔を背けたくなるような、にたりとした笑いを浮かべた。

「時間が無いのはアンタだけだろ、ジュリアン。姿が変わる前に、コイツに出口を見つけてもらおうと必死だもんな。アンタが校庭で肩震わせて泣いてるの見て、オレ思わず笑っちゃつたよ」

ジュリアンの目がすっと細まった。構わずリーズガルドは続ける。

「本当、大爆笑！ アンタそんなタマじやないだろ。麻奈さあ、ジュリアンに何を言われたか知らないけど、真に受けの止めたほうが身のためだよ。この男は自分以外」

「黙れ」

リーズガルドの言葉を、ジュリアンの唸るような低い声が遮った。

その静かな洞窟に、肉食獣のよつた鋭さを感じて、麻奈は背筋が冷たくなった。

「おあ怖！ リーズガルドが肩をすくめてみせた。

「麻奈、もう行きましょう。時間の無駄です」

振り返るジュリアンの顔は、いつもの穏やかな顔に戻っている。麻奈は彼に従おうか迷った。窓際の少年が軽蔑したような眼差しを向けてきたのを見て、胸がざわめいた。

詰まらない奴。リーズガルドの目はそう語っていた。子供の心を掴むには、一緒に遊んでやらなければならない。子供にとって、遊びに付き合えない大人は軽蔑の対象にしかなら無いのだと、6歳以下の弟がいる麻奈には良く分っていた。

「私、こんな所に来たくなかった。みんな酷い姿だし、はつきり言つてお化け屋敷よりもよっぽど怖い。でも、来ちゃったものはしようがないじゃない。今はやるべき事をやるしかない。絶対みんなで此処から抜け出してみせる。だから　さっきの条件をクリア出来たら、リーズガルドも出口を探すのを手伝つて」

「麻奈っ」

苛立ちを含んだ声。ジュリアンの制止を麻奈は振り切った。

「ごめんなさい。時間が無いのは分かつてるの。でもこのまま黙つてるなんて悔しいじゃない。それに、此処から出るにはリーズガルドにも協力してもらつた方が良いと思う。姿が変わった人には出口が見つけられなくても、みんなで探せば何か手がかりが分かるかもしない」

「彼はただ難題をふつかけて遊んでいるだけです。例えそれをクリアしたところで、彼は私たちに協力する気なんて更々ありませんよ」

「それでも、このまま嘘吐き呼ばわりされるのは嫌」

麻奈とジュリアンのやり取りをリーズガルドは楽しそうに耳をくくるくわせながら見ていた。

「ねえ、もしも麻奈が条件をクリア出来たら、アンタ達に協力してやつてもいいよ」

「約束よ、絶対ね」

麻奈はリーズガルドに歩み寄る。途中、彼の葉っぱを踏まないようになり気をつけた。

「約束」

リーズガルドはへらへらと笑いながら小指を突き出してきた。麻奈も小指を出すと、リーズガルドの細い指がするりと巻きついてきた。

麻奈はジュリアンに田を向けると、彼は不機嫌な顔で、麻奈のお好きなように。と言つて腕を組んだ

「じゃ、早速行つてもらおうかな。アンタが一番苦手なのつて誰? 見た目のグロさからいつてサルーンかな。あ、それともオレ?」

リーズガルドは田を輝かせている。本当に楽しそうだ。

「一番は……アノ人」

麻奈はついさっき彼に襲われた事を思い出し、苦いものを吐き出すように答えた。その時の恐怖も拭い難いが、ぬるぬるした粘液の感触を思い出すと、自然と眉間に狭くなつてくる。麻奈の答えにリーズガルドは、成る程。と頷いた。

「でもアノ人相手じゃ言葉は通じないし、流石に無理かなあ。それじゃ、サルーンの所に行つて貰おうかな」

リーズガルドは一人で頷くと、その顔に満面の笑みを浮かべた。

「そういう訳で、これからサルーンの所に行つて、アイツの物だつて分かる物をもらつて来てね」

心底楽しそうに笑いながらひらひらと手を振るリーズガルドを尻目に、麻奈は不安な面持ちで歩き出した。ジュリアンの制止を振り切つた手前、一緒に来てとは言えないが、やはり一人で廊下を歩くのはまだ怖い。

壁に寄りかかったままのジュリアンに縋るような視線を向けてみたが、彼は無表情な顔で肩を竦めただけで、一緒に行くと申し出ではくれなかつた。その態度は普段の彼とは違い、とても余所余所しない。

何となく駄目だと分かつてはいるのだが、独り言を装つて弱々しく呟いてみる。

「もしも、途中でアノ人に会つたらどうしよう

「教えたでしょう、水かけて下さい」

間髪入れず冷たい答えが返つて来て、麻奈は震え上がった。
どうやらかなり怒つてるようだ。

「い、行つてきます……」

「行つてらつしゃーい」

陽気なリーズガルドの声を背にして、麻奈は辺りを警戒しながら歩き出した。

リーズガルドの部屋に残つたジュリアンは、冷めた表情で顔に掛かる前髪をかき上げた。それを見てリーズガルドがおかしそうにクスクと笑う。

「そんなんに面白くないなら、アンタも付いて行つてやればいいのに

リーズガルドを横目で見ながら、ジュリアンはフンと鼻を鳴らした。

「それより、ちゃんと後を追つているんでしょうねえ

「勿論！ こんな面白い事滅多に無いもん」

リーズガルドの薦が一斉にざわつと揺らいだ。

「それなら結構です」

不機嫌な顔で麻奈の出て行つた後を見ると、リーズガルドの薦がするすると伸びて、薄く開いている扉から廊下へと出て行くところだった。

「麻奈に何かあつたら教えて下さー」

有無を言わぬ響きに、薦の主は苦笑した。

「……やっぱり一緒に行つてやれよ」

ジュリアンはそれには答えずに、端整な顔に不機嫌な表情を貼り付けたままだつた。

その腹の中では、散々麻奈に毒づいていた。自分の言つ事が聞けないのなら、少し怖い目に遭つてくれればいい。彼はそう思つていた。

無理難題 1（後書き）

いつも読んでいただき、ありがとうございます。

それから、評価してくださった皆様。本当にありがとうございます。
拙い文章ですが、もっと読みやすく面白い文が書けるように今後も努力していきたいと思います！

麻奈はびくりと肩を震わせながら、辺りを注意深く窺つた。後ろから物音が聞こえたような気がしたのだが、どうやら『氣のせい』だつたらしい。

ため息を呑み込んで耳を済ませながら、恐々進み出す。幸い廊下は何処までも静かで、自分の足音以外は何も聞こえない。

夕暮れの学校はただでさえ薄気味悪いのに、いつアノ人と鉢合わせするかと考えると、麻奈は今すぐにでも走り出したい衝動に駆られる。しかし、ここはぐつと我慢しなければいけない。アノ人に見つからないようにするのが最上の策なのだ。目立つ行動を取つて見つかるわけにはいかない。

サルーンの部屋は三階だったが、早いうちに水を用意しなければ安心できない。麻奈は一階へ続く階段を静かに素早く上ると、近くの教室のドアを開けた。きっとここにも田当てのバケツがあるはずだ。ガラリと音を立て、懐かしい光景に一瞬目を細めた。

夕日を受けた紅い教室に立つと、放課後に忘れ物を取りに来たような錯覚を起こさせる。そういうえば、何か忘れている事があるような気がした。

どこかでパシャパシャと、水の中で何かが跳ねる音が聞こえた。

「そうだ、水を汲まなくちゃ」

麻奈は一瞬の白昼夢から我に返ると、バケツバケツ、といいながら掃除用具入れを開けた。

アルミ製のバケツを片手に下げて廊下へ出ると、何となく今から

掃除を始めるような気分になつてくる。

窓から差し込む紅い光に照らされた廊下は、ひび割れたタイルを寂しげに浮かび上がらせる。人気の無い学校は、なぜか寂しさを増幅させるようだ。

水飲み場がある所まで行くと、廊下の材質が変わったことに麻奈は気が付いた。

色の剥げたタイルではない。ワックスがかけられたような光沢のある滑らかな木製の廊下だ。その上には幾何学模様の毛足の長い絨毯が敷かれている。窓も木枠の飾り窓に変わっていて、壁には繊細な細工が施された鏡が取り付けられていた。

そこは学校というよりも、古風なお屋敷という雰囲気に近いように思える。それでも、学校のように備え付けられた水飲み場と、男女別のトイレがある辺り、じちや混ぜな気がして笑つてしまつ。

麻奈はあの人を警戒して、びくびく怯えながら蛇口を捻った。蛇口から出てくる水は意外にも透明な色をしていた。錆びてなくてよかつたと安堵して、バケツに水が溜まるのを待つ。

バケツに半分ほど水が入った所で、不意に何かが肩に触れた。ただでさえ縮みあがっていた麻奈の心臓はドクンと心臓が跳ねる。

「きやあっ」

麻奈は背後に向けて、持つていたバケツの水を思い切りぶちまけた。

「うっ」

呻き声が聞こえて、麻奈は恐る恐る振り返る。

「てめえ、何しやがる」

そこには怒りを露にしたユエが、水を滴らせながら立っていた。冷えた怒りの表情は無表情にすら見えるが、それが一層この男の美しさを際立たせている。

ユエはす、ぶ濡れの髪を搔き揚げた。その手元が小刻みに震えるのを見ると、相当頭にきていることが伺える。しかし、麻奈は彼を怒らせた事などすっかり忘れて、ユエにたつぱりと見えていた。文字通り水を滴らせた美丈夫は、麻奈には刺激が強すぎた。

ユエの銀の髪は滑らかな頬に張り付いて、長い睫には雫が光っている。水を吸った衣服がユエの肌に張り付き、広い肩幅や筋肉の隆起を浮き彫りにしていた。

頬を染めて自分を見上げる麻奈を見て、ユエは至極満足気に口元を綻ばせた。不機嫌だった気持ちが、馴染み深い眼差しを感じて、ぞくぞくとした快感に変わった。

「ごめん、アノ人かと思つて。つい手が滑っちゃた」

目を伏せながら、麻奈は歯切れ悪く謝罪する。そのもじもじしていた麻奈の手をユエは強引に掴むと、彼は大股で歩きだした。

「え？ ちょっと！ 謝ったじゃない！」

抵抗する事も出来ずに、麻奈はするすると引きずられてゆく。有無を言わせぬ強い力で、遂には近くにあつた部屋へと連れ込まれてしまつた。

無理難題 2（後書き）

いつも読んで下さって本当にありがとうございます。今回は少し短めになってしまい、少し物足りないかもしません。すみません、次回はガツツリと書きますので、どうぞご容赦下さい。
それでは、山石でした。

そこは部屋の真ん中に巨大な寝台が置かれている広い部屋だった。寝台の周りを囲うように、四方の壁に本棚が配置され、中にはびっしりと本が並べられている。

部屋の一角には大きな鏡を掛けられているが、それには鏡を覆う絹の布が掛けられていた。

スタンド型の油式のランプがベッドサイドに置かれているのを見て、麻奈は違和感を覚えた。品があるが、どことなく古い時代の部屋のようだ。あまりにも整然としていて生活感が無く、むしろ図書室のような部屋だった。そのせいで、大きな寝台がやたらと目立つている。

「ここ、ユエの部屋？」

「呼び捨てか。まあ、構わねえよ」

そう言つなり、ユエは麻奈を寝台に突き飛ばした。麻奈はたらきを踏んで寝台に倒れこむ。

「痛つ」

麻奈は寝台に投げ出された拍子に尻餅を付いた。スプリングの利いていない、何かごわごわしたものが詰まっているような固い感触がする。

居心地が悪い。きっと寝心地も悪いのだろうな。と思つてみると、上から水滴がぽたりと落ちてきた。

「お前のせいで服が濡れたじゃねえか。責任取れよ」

ぞくりと背骨に響くどろみのある声で、ユウは麻奈に覆い被さる
よつて寝台に上がつてくる。

「謝つたじやない。それに、ユウも悪いんだからね。急に肩を叩く
から……」

麻奈は極力ユウを見ないように寝台の上を後退していく。
しつかり頬を染める麻奈を見て、ユウは追い詰めるように後を追
つた。獲物を捕らえた猫がそれをいたぶるように。

寝台が軋んギシギシと鳴つている。ユウの追従は執拗だ。今は怒
りではなく、情欲に燃える瞳で麻奈を捉えたまま、じりじりと距離
を詰めてくる。時折、面白がるよつて瞳を覗きこんでくるので、麻
奈はその度に息苦しくなつた。

「ユウは思つ。自分の美貌を意識する存在の、なんと心地良いこと
か。

「水かけた方が悪いに決まつてゐるだろ?」

意味のない会話も、スパイスだとユウは心得ている。

ついに麻奈は背もたれまで下がりきつてしまい、寝台から降りよ
うと身体を捻つた。ユウは逃がすまいと、麻奈を囮うよつて手を広
げ、背もたれと自分の胸で麻奈を挟み込んだ。

僅かな距離で揺れるユウの美貌に、麻奈は頬を染めて見入つてしまつた。

麻奈はこの時、彼を嫌つていた事すら忘れて目の前で薄く笑う彼
の美しさに溺れていた。

ユエは寝台の背もたれに手をついて、自分の腕の中で小さくなる
麻奈を見下ろした。自分に注がれる潤んだ視線を堪能しながら、こ
れから行われる行為を思い浮かべ身震いする。

そんな艶のある視線に気が付いて、麻奈は慌てて目を伏せた。早
鐘のように鳴る心臓の音が外に聞こえるのではないかと不安になる。
好きでもない、むしろ苦手としている男とこんな雰囲気になるのは
絶対に良くない。

「お、お詫びに洗濯するから」

上ずつた声で場の雰囲気を壊そうとする麻奈の意図を察して、ユ
エは彼女の両手首を素早く掴んだ。麻奈は驚いて小さく悲鳴をあげ
る。

細い両手首をまとめて持ち上げて、ユエはそれを寝台の背もたれ
に押し付けた。

麻奈は極度の密着に緊張しきりて抵抗らしい抵抗も出来ずに、困
惑氣味に引きつった声を上げる。それを満足そうに見下ろして、ユ
エは自らの襟元に手をかけると、それを一気に引き下ろした。上着
がはだけてユエの素肌が露になる。

麻奈は緊張のあまり、死ねるのではないかと思えるほど鼓動が早
くなるのを感じていた。息苦しくて仕方が無い。

ユエは、冷てえ。と呟きながら零が滴る前髪をかき上げ、器用に
片手で上着を脱ぎ捨てた。ユエの裸体を目にした瞬間、麻奈はこの
体制の危うさを思い知った。ユエの美しさに目を奪われて、抵抗も
せずにいた事を今になって後悔する。この先に、何が待ち受けるの
かを考えると鳥肌が立つた。

麻奈は、身をよじってユエの手から逃れようとした。しかし時既
に遅く、彼に掴まれた両腕はびくともしない。せめて体がこれ以上

密着しないようになると、体育座りのよう膝を引き寄せバリケードを作つてみたが、それだけでは何となく心もとない。

「洗濯なんてしなくても、服はそこに放つておけばそのまま乾くだろ。だが、その間俺は寒くてしょうがねえ。だからお嬢さん、一緒に温まる運動してくれねえか」

麻奈の抵抗を笑いながら、ユエは右手で麻奈の膝をゆっくりと撫でた。

「む……無理、無理です！」

撫でられた膝から何かが甘く身体に沁みこんで、ゆっくりと広がつてゆく気がした。それを振り払つように麻奈は首を激しく横に振る。

その拍子に麻奈の髪が一房、肩口から胸元へと流れ落ちた。ユエがそれを指で掬つて払いのけると、肩からりゅうりゅうと麻奈の鎖骨に指を這わせた。

「俺は気の遠くなるような長い間、ずっと我慢してきたことがあるんだ」

物語でも聞かせるよつなゆつくつとした口調。

「それもこれも、此処には野郎しかいないせいだ。だからもういい加減、限界なんだよ」

ユエの指が麻奈の体の線をなぞる様に、ゆるゆると下がり始めた。

「へへ

脇腹を掠める長い指に、麻奈は思わず声が漏れそうになる。ユエはそんな麻奈の反応を瞬きもせずに見つめた。次第に熱を孕んでくる呼吸を感じて、ユエも段々と熱いものが込み上げて来る。

ユエは麻奈の太ももに手を這わせながら、彼女の両手の拘束を解いた。だらりと下がるその手に力は無い。ユエの思った通り、もう抵抗する気は無いようだ。

堕ちたな。ユエはにんまりと笑って麻奈の顎を掴み、そのまま上を向かせる。

「ま、待つ……」

麻奈は最後の理性でユエに懇願したが、その蕩けるような瞳と、色づいて薄く開いた唇はユエには逆効果だった。この顔は悪くないと思い、ユエは満足気に唇を寄せる。

「これ以上待てねえ。どんな不細工な奴でも良いから、女が来るのを待つてたんだ。ただで帰すわけにはいかねえよ」

ユエは麻奈の唇にゆっくりと近づいていく。一人の吐息が触れ合いい、唇が重なる瞬間……

「ぐつ

突然、ドンという衝撃を腹に受け、ユエはみぞおちを押さえて体をくの字に折り曲げた。それは全くの不意打ちだった。

油断していただけに、みぞおちに綺麗に入った衝撃で皿を白黒させる。苦悶するユエを尻目に、麻奈はするりと寝台から降りた。

「誰でもいいなら、私じゃなくてもいいでしょ」

麻奈は涙目で後ずさりした。

「テメエ、こんな時に腹を蹴るか？」

美しい顔を歪めて歯を剥ぐユエに、麻奈は屈辱に震えながら言った。

「ユエ、一体なんのつもり。突然こんなことして」

実は、麻奈はさつきまでこのまま流されてしまつても良いかと思いつめていた。彼が突然自分を好きになつたとは到底考えられないが、ユエの美貌を見ていると、そんなことはどうでも良くなつていた。

それなのに…… いうに事欠いて不細工とは。

麻奈は枕元に置かれていた火のついていないランプを掴むと、ユエ掛けて思い切り引き倒した。

「不細工で悪かつたわね！」

麻奈はそのままユエを一警することも無く、ドアを乱暴に開けた。途中、何かを踏みつけて靴の下でカサリと音がしたが、麻奈はそれに気が付く事なく本だらけの部屋を後にした。

さつき水を汲もうとした水飲み場まで行き、無造作にバケツを捨ていあげて水を入れ始めた。

麻奈は自分に腹が立つていた。どうして、流されてもいいなんて思つたのだろう。

水がバケツの底に当たる音を聞きながら、水が一杯になるのを待

つ。その眉間に深い皺が刻まれていた。

麻奈は、今の出来事を全て忘れる事にした。何にも無かった。私は誰にも会わなかつた！

自分に暗示をかけながら蛇口を閉じて、足早にその場を離れた。幸い、麻奈の蹴りが余程効いたのかユエが後を追つて来ることは無かつた。

麻奈はずつしりと重いバケツを抱え、足早に階段を上り始めた。

無理難題 3（後書き）

「こんなにちば、山石です。いつも読んでいただきましてありがとうございます。」

今回「こんな感じですが、R-18にならなによつて苦労しました（笑）」

それでは、また次回お田にかかりたいと思います。山石でした。

サルーンの部屋に近づくにつれて、廊下や壁にはひび割れが目立つようになった。

いつ崩れてもおかしくない廊下を歩くのはやはり慣れない。おまけに、アノ人の気配を探りながら進むので、自然と足元が疎かになってしまい、瓦礫に足を取られそうになる。

麻奈はバケツを持ちながら、慎重に瓦礫の山を越えていった。途中バケツの重さによるけてしまい、むき出しの鉄骨で腕を擦りむいたが、それ以外はほとんど順調に目的地まで進んでいた。

改めて見るとそこは酷い廊下だった。壁には何の跡なのか分らぬいほど大きな穴が開いていて、所々焦げたような黒ずみが残っている。そこかしこに小さな穴が開いていて、これが全て銃弾の跡ではないかと考えて、麻奈は背筋が冷たくなった。これらを見るだけで、サルーンの国の内乱の悲惨さが想像できるようだ。

麻奈はバケツを持ちながら、思つた以上に困難な道を越えて、問題の壁と天井がえぐれた廊下に到着した。この道を渡るにはバケツを置いていかなくてはいけない。少し前に、此処から落ちかけたことを思い返して身震いする。

麻奈は少し離れた所にバケツを置いて、深く呼吸を繰り返した。頭の中を出来るだけクリアにして、無事に渡りきった自分を思い描きながら慎重に一步を踏み出す。

ゆっくりと、しかし確実に麻奈は前に進んでゆく。呼吸は自然と浅く速くなり、どうしても指先が震えてしまう。しかし、麻奈は前だけ見つめて必死に足を進めた。

ようやく向こう側に渡った時には、麻奈は汗だくなっていた。しつかりした足場に辿り着いた途端、足の力が抜けてその場に座り込んでしまった。すると、突然サルーンが音も無く現れた。六本の蠢くたましい腕を携え、相変わらずどこを見るとも無い目つきで麻奈を見る。

「わ。びっくりした！　あの、何度も来てすいません……」

麻奈は出来るだけ自然に声を出したつもりだった。しかし、一度会っているとはいえ、サルーンのグロテスクな外見に緊張して、麻奈の声はひっくり返っていた。

麻奈の怯えをサルーンは敏感に察知したらしく、表情の無かつた顔が僅かに曇つた。

麻奈は慌てて言葉を搜す。傷つけてしまったのだろうか。

「あの、さつき助けてもらつたお礼をきちんと言いたくて。それから、実はお願ひしたい事もあって来たんです」

しかし、いくら取り繕つても麻奈の言葉は上滑りするばかりだった。何を話せばいいのか、きちんと考えておけば良かつたと思っても、もう遅い。

自分を見ようとしないサルーンを見上げ、麻奈は途方に暮れた。上辺の言葉だけでは、サルーンには届かないのだ。

唇を噛み締めて後悔していた麻奈の前に、サルーンの日に焼けた腕が一本差し出された。その手の上には水色の細長い物が乗せられている。

「君の物だろ？」

「携帯」

麻奈はサルーンから携帯を受け取ると、懐かしむように表面を撫でた。

「いつの間に落としたんだろう? ずっと持っていてくれたんですか?」

微かに頷くサルーン。

「ありがとうございます」

今度は自然に声が出て来た。サルーンと視線が合わなくとも、彼の顔が無表情でも、麻奈はもう気にならなかつた。

「サルーンさんは助けてもらつてばかりですね。何かお礼をしたいんですけど、今は何も持つて来てなくて……」

「必要ない。此処へも、もう来るな

麻奈は何て返事をしていいのか迷つた。彼の拒絶の言葉はまるで自分を否定されたような気持ちになる。

確かめる様にサルーンの顔をそつと伺つてみると、一瞬彼の目が麻奈の瞳を捉え、またすぐに遠い目に戻つていつた。

麻奈はサルーンの真意が少しだけ分かつたような気がした。彼の中に「来るな」という気持ちは確かにあるのだろう。しかし、それと同時に「来て欲しい」という気持ちが垣間見えた気がしたのだ。拒絶されたくないから、その前に人を遠ざける。きっとそれが臆病で優しい彼の本音なのだろう。

麻奈は心中で大丈夫と自分を叱咤した。サルーンはいつも『お出迎え』してくれた。携帯だつて拾つてずっと持つていてくれたのだ。彼は本当は人恋しいのかもしない。もしもそつだとしたら、ここに引き下がるわけにはいかない。

「じゃあ、今何か手伝える事はありませんか？ 私に出来そうな事があつたら何でも言って下さい」

サルーンは麻奈の言葉に何の反応も見せず、踵を返して歩き出した。

「あ。待つて」

麻奈はサルーンの後を追いかけるが、彼の歩みは止まらない。これではまるで暖簾に腕押しした。サルーンは結局、後ろを振り返ることもなく『美術準備室』の札が掛かつた部屋へと入つて行つた。

麻奈は教室の前まで追い駆けてから、どうしたものかと悩んだ。嫌われてはいないだろうが、あまり歓迎されてもいよいようだ。しかし、ここで引いてしまつては、いつまで経つてもリーズガルドの条件をクリア出来そうに無い。

麻奈は思い切つて美術準備室へと飛び込んだ。

麻奈はかなり勇気を振り絞つた。普段の麻奈だったら、こんなに大胆な事は出来なかつただろう。

それは恐らく、サルーンが相手だから出来るのかもしれない。全てにおいて閉じているこの男に妙に親近感を覚えて、麻奈はサルーンの部屋へと入つて行つた。

「うわあ」

壊れたカンバスが数個転がっているだけの、ほとんど何も無い部屋を見て麻奈は思わず呟いてしまった。瓦礫だらけの部屋の隅に、薄汚れたテントが一つぽつんと立っている他は全くと言つてよいほど何もない。しかし、上を見上げると、部屋の天井の一部が崩れ落ちていて、まるで天窓の様に空が覗いていた。

空から差し込む茜色の夕陽が、じんわりと部屋を染めていて、それがテントと相まってノースタルジックな気持ちを搔き立てる。

麻奈は天然の天窓から空を見上げた。夕暮れの空を見ていると、いつも麻奈は無性にシチューが食べたくなる。麻奈にとって、夕暮れは家路を急ぐ色だ。そう思い始めたのはいつの頃だつただろうか。まだ幼い頃、「お家へ帰ろう」とクマが歌いながら家路を走るシチューのコマーシャルを見て以来、夕暮れイコール、シチューの構図が出来上がつてしまつた。

暖かな食卓、それは麻奈にとつて憧れて止まないものだつた。しかし、それが叶わない自分は世界の軸から外れていて、独りぼっちで羨ましげにその周りを漂つているのだと否応なしに思い知られた。

「帰りたい……」

一体どこに? シチューの待つ家に? そんなものはもう手に入らないと分つているのに。

自分でも意図しなかつた言葉が浮かんできたことに麻奈は驚いた。

「俺もだ」

麻奈の呴きはとても小さなものだつたが、サルーンの耳はそれを拾つていた。見ると、彼も空を見上げている。この男には暖かいシ

チューが待つてゐるのだろうか。麻奈はふと聞いてみたくなつた。

「サルーンさん。シチューは好きですか」

「じゅうづ？ 何だそれは？」

在りぬ方向を見ながら不振そつな顔をされた。突然部屋に入つて、訳の分からぬ質問をする麻奈に困惑しているようだ。

「うーん、野菜とお肉のスープ……かな」

そうか、と呑いてサルーンは目を閉じた。

「スープは好きだ。此処に来る以前から、暫くまともな食事をしていない。今、無性に食べたくなつたな」

そう言つた顔が、心なしか笑つたように見えて麻奈は目を丸くした。しかし、途端にクウと腹が鳴つて自分も空腹だったことを思い出す。

そう言えば、夕飯食べ損ねていたのだ。今となつては、味氣ない冷凍食品の夕食も「馳走に思えてくる。

麻奈はこの時、とある決意を固めた。それは、きっとサルーンの微かな笑顔を垣間見たせいだろう。

無理難題 4（後書き）

山石です。いつも読んで下さりて本当にありがとうございます。ふと、思い立つて始めた投稿ですが、はやいもので一ヶ月経ちました。これからも頑張りますので、皆様どうぞよろしくお願ひいたします。

麻奈は躊躇うことなくサルーンに近づいて行った。彼はさつと六本の腕を組んだ。それは、まるで彼が自分の身を守る姿のようだ。これ以上自分の中に踏み込ませないといつ無言のメッセージ。麻奈はそれに気が付いていたが、足取りを変えることなく彼に近づいて行く。

「私、此処から出る道を見つけます。貴方を家に帰してあげる。それが私からのお礼です」

そう言つてサルーンを見上げれば、麻奈と視線を合わせない瞳が静かに左右に振られた。

「それは無理だ」

「どうしてですか？」

「お前も、聞こえているんだろう？」

麻奈は大きく首を傾げた。彼の言いたいことがいまいち分らない。サルーンは視線を逸らすことがあつても、話を逸らしたことは今まで無かつたはずなのに。

「どういう事ですか」

「何が聞こえるのかは、人それぞれだ。初めはただ聞こえるだけ。だが、段々それが見えるようになる。そして、そのうちに目の前に現れるんだ。まるで、すぐ側に本当に居るかのような圧倒的な存在

感を持つて。 そうなつたら、もうこの場所に囚われて抜け出せなく……」

突然サルーンがびくんと体を震わせて動かなくなつた。その瞳が、たちまち霞がかつたように虚ろに濁つてゆく。

俯いた彼の唇は震えていて、血の気が一気に引いてゆくのが分かるほどに青褪めていた。

麻奈が心配になつて声をかけようとしたその時、サルーンが突然顔を上げた。

「アリー・シャ」

ふらふらと覚束ない足取りで後ずさりながら、サルーンは自分を抱き絞めるように六本の腕を体に巻きつけた。

「アリー・シャ、 すまない。 許してくれ」

突然怯えたように謝るサルーンに、麻奈は啞然とするばかりだった。サルーンは麻奈の存在を忘れたかのように頃垂れて、ぶつぶつと独り言を呟いている。

一体なにがどうなつたのだろう。様子のおかしいサルーンを前に、麻奈はどうして良いのか分からずに、ただおろおろするしかなかつた。しかし、サルーンが苦しげな声を上げて膝から崩れ落ちるのを見て、慌てて側に駆け寄つた。

「大丈夫ですか、誰か呼んで来ましょつか

サルーンの横に膝を付いて、苦しげに荒い息を吐く彼の顔を覗き込んだ。その額には脂汗が浮き出ていて、体は小刻みに震えている。何か悪い病気の発作のようにも見える。

麻奈はサルーンの背中に手を触れた。じつとりと汗が滲んでいる。遠慮がちに背中を撫でると、サルーンは顔を上げて縋る様な瞳で麻奈を見つめた。

何か言いたげに彼の唇が動いたが、そこから言葉は出てこなかつた。いよいよ彼の顔色は悪くなり、麻奈は誰かを呼んで来ようと腰を浮かせたその時、サルーンが突然動いた。

「アリー・シャ、そんな田で見ないでくれ……。そんな田で、俺を見るなあっ！」

サルーンは突然腕を振り回して麻奈を払い退けた。サルーンの長い腕が鞭の様にしなり、麻奈のわき腹にそれがめり込む。一瞬息が詰まるほどの強い衝撃を腹に感じて、麻奈の視界は大きくぐるりと回転した。

サルーンに殴り飛ばされたのだと理解する前に、麻奈の体は激しく床に叩きつけられていた。

体が動かない。麻奈の意識は、徐々に暗い淵へと沈んでいった。

「う……痛あ」

どの位気を失っていたのだろうか。気が付くと、麻奈は埃だらけの床に頬を付けて横たわっていた。

何が起きたのか理解出来ずに、じょじょと咳き込みながら、ぼん

やつと床の模様を見ていた。

ずきずきと痛む脇腹が妙に気になる。頭だけ動かして周りを見渡すと、部屋の隅に何か大きな塊がある。

目を凝らしてよく見ると、それはこちりに背を向けて巨体を丸めたサルーンの背中だった。その背中は小刻みに震えていて、そこから切れ切れに彼の苦しげな独り言が聞こえてくる。

麻奈は起き上がりうつする。しかし、体のどこにも力が入らない。

「サ、ルーンさん……」

どうして？ の言葉の代わりに咳が込み上げてきた。

「はい、そこまで」

コツコツと響く軽快な足音を伴つて、ジュリアンが涼しげな声で部屋に入ってきた。彼は目を丸くする麻奈の元に跪くと、立てますか？ と声を掛ける。

無言で頷くと、ジュリアンは麻奈を抱き起こしてから肩を貸してくれた。

「ジュリアン、サルーンさんが」

掠れた声で訴えるが、ジュリアンは首を横に振った。

「ああなつたらもう手に負えません。今は此処を離れましょっ」

「でも……」

「私達に出来る事はあつませんよ。また殴り飛ばされるだけです」

麻奈は後ろ髪引かれる思いだったが、大人しくジュリアンに従つた。今の自分には何も出来る事はないのだ。それに、息をするだけでもわき腹に激痛が走る。麻奈は体を動かす度に走る痛みに、息を詰まらせながら廊下へ出た。

「リーズガルドの所に行く前に、怪我の手当てをしましょう。放つておいても治りますが、痛むようですね。それに、雑菌が入つたら大変ですから」

ジュリアンが麻奈の一の腕の傷を指しながら提案する。麻奈は今出来事のショックが抜けきれずに、こくりと頷く事しか出来なかつた。

無理難題 5（後書き）

いつも読んでいただいてありがとうございます。

この小説は基本的に、あまりアクションシーンのような動きの無い話ですが、今回少しだけそういう場面があつたため苦労してしまいました。アクションものを書いていらっしゃる作家さん……凄いです！！

「此処からだと私の部屋の方が近いですね。一度そこに寄つて手当をしましょ」

ジュリアンの部屋はサルーンと同じ二階にある。サルーンの部屋は「L字型の校舎の長い方の先端部分にあるが、ジュリアンの部屋はその対角である短い部分の先端に位置していた。

一階にある麻奈の部屋へ行くよりは近くにあるが、それでもここからだと少し距離があった。

麻奈はふらつく足取りで、ジュリアンに抱えられるよひにして歩いた。ゆっくりと歩くだけでも、わき腹はずきずきと痛み、崖を通過するときには激痛に耐えながらやつとのことで一人は進んだ。

ジュリアンの部屋に近づくにつれて瓦礫の数も減り、赤い絨毯が引かれた廊下に変わつていった。今は明かりが灯つていないが、クリスタルのシャンデリアのような華美な照明が、夕日をきらきらと反射していた。

手入れの行き届いた廊下を見て、麻奈は安堵のため息を吐いた。ここはもう安全なのだと実感できる。

どうぞ。と促されてジュリアンの部屋に入ると、そこは麻奈の部屋と良く似た造りになつていた。

白く上品な床と壁。落ち着いた家具。しかし、ジュリアンの部屋は麻奈の所よりも一部屋多いらしく、部屋の奥には大きな扉が付いていた。どこを見てもベッドが無いので、ベッドルームなのかもしない。

「そこで休んで下さい。今、救急箱を取つてきまーす」

ジュリアンに言われるまま、麻奈は倒れ込むようソファーに横たわった。ふわふわのソファーに横になると、少し痛みが和らいだ気がした。途端、深いため息が溢れてくる。体に走る鈍い痛みよりも、サルーンに何もしてあげられなかつた自分の不甲斐なさに落ち込んでしまう。

おまけに、リーズガルドとした約束も果たせなかつたのだ。これでは、一体何をしにいったのか分らない。ジュリアンに迷惑をかけただけのような気がする。

「ねえ、ジュリアン。どうしてあの時サルーンさんの部屋に来てくれたの？」

小さな木箱を持って隣室から出てきたジュリアンは、麻奈に向かつてこりと微笑んだ。

「勿論、麻奈が危険だと分かつたからですよ。さあ、まずは腕を出して下さい」

麻奈は横たわつたままおとなしく腕を差し出した。

「確かに危ないところだつたけど、私が危険だつてどうして分かつたの？ もしかして、後をつけてきたの？」

麻奈は腕に消毒スプレーをかけられながら聞いてみる。

ぴりぴりとした痛みと冷たさに一瞬体が跳ねる。ジュリアンは麻奈の一の腕に顔を近づけると、ふうと息を吹きかけて患部を乾燥させた。

「まさか。ほら、あれが教えてくれたんですよ」

そう言つて扉の近くを示す。ジュリアンの指差した床の上には、濃い緑色の薦が一本這つていた。見覚えのある、毒々しいまでに赤い斑点のある葉が、まるで手を振るように震えた。

「これ、リーズガルドの」

「そう。彼が麻奈の後を追つて、何があつたのか逐一私に報告してくれていたんです」

「そつだつたの、全然気が付かなかつた。。。え、逐一？」

ええ逐一。と頷いて、ジュリアンはシルバーリングが光る長い指でゼリー状の薦を掬い、麻奈の切り傷にそつと塗布した。

「つつ」

つんと染みる痛みに、自然と眉の間を狭めてしまう。

「リーズガルドの薦は視覚も聴覚も備わっていますから、麻奈が誰に会つて何を話したのか、どんな事があつたのか、それはそれは事細かに教えてくれました」

麻奈は自分でも、顔が引きつってゆくのが分かつた。

ジュリアンは麻奈の腕に透明なテープを貼つて、おしまいとばかりに軽く叩いた。

「次は脇腹を見せて下さい」

「ええー、ヒーリングはいい」

「駄目です。そっちの方が酷い怪我なんですから。サルーンの力で殴られたら、痣だけでは済まないはずです。それとも……」

言葉を一寸区切ると、ジュリアンは大げさにため息を吐いて見せた。

「ユーハには好奇心をやせるのに、私が触れようとすると拒むんですか」

「なつ」

何でそれを？ と言いかけて、リーズガルドが告げ口したのだと思い出した。なんて厄介な植物だらう。麻奈はジュリアンの顔を直視できずに、そろそろと視線を逸らす。熱を持つ耳と頬。

「脇腹、見せてくれますよね」

にこにこと微笑むジュリアンに、麻奈は首を縦に振るしかなかつた。後ろの方から何かの気配を感じて振り返ると、風も無いのにリーズガルドの薦がカサカサと音を立てて揺れていた。

それは、どう見ても笑つていりうように見えた。

麻奈は腹立たし気にリーズガルドの薦をにらみ付けたが、薦はどこ吹く風で小さく揺れていった。

そんなふたりのやり取りを全く無視して、ジュリアンが軟膏を片手に麻奈の腹に顔を寄せた。

「さあ、服を捲くつて下さい」

なぜか妙に嬉しそうに見える。

「う……はい

抵抗するのは時間の無駄だと観念して、麻奈はおずおずと上着の
裾をたくし上げた。

無理難題 6（後書き）

読んでいただきありがとうございます。お気に入りに登録して下さった方がいつの間にか増えてきました。本当に、本当に嬉しい限りです。皆様ありがとうございます！これからも少しずつ更新していくので、どうぞお付き合いで下さい。

麻奈は観念して、しぶしぶ服を捲くつた。ゆっくりと露になる白い腹部。ジュリアンの視線がそこに注がれるのを感じて、麻奈は緊張に体を硬くした。

見ると、ジュリアンは薄つすらと微笑んでいる。あまり人に見せたことのない場所を凝視されるのは耐え難い。早く終わりにして欲しいと思いながら麻奈はジュリアンの治療を待つていた。

ジュリアンが、そつと麻奈の腹部に触れた。途端、麻奈はびくりと体を振るわせてしまつた。あまりにそつと触れるので、かえつて意識して酷く緊張してしまつ。

ジュリアンは白い腹部をじっと見ながら、丁寧に擦り続けている。麻奈はそんな彼から顔を背けた。心なしか、彼の顔に何かの意思が灯っているような気がして、耐え難い羞恥心が湧いてくる。しきしそう思つたのも束の間、ジュリアンは心配そうに眉を下げるため息を吐いた。

「これは酷い。痛そうですね」

ジュリアンは麻奈の右腹部に赤黒く腫れた箇所を見つけて眉をひそめている。

自分の肌に浮かぶ赤い痣を確認して、麻奈はぞつとした。こんなに酷い痣になつていいとは思わなかつた。ジュリアンが軽く確かめるように麻奈の腹を指で押すと、痛みのために声が出てしまつ。

「恐らくですが、内臓にはさほど問題は無いでしょう。でも、もしかしたら肋骨にひびが入つたかもしれませんね。今痛み止めの薬を用意します。それからサラシも。完全に痛みが消えるまでは安静に

していく下さい」

ジュリアンは木箱の中から小瓶を取り出すと、中の錠剤を一粒取り出して麻奈に手渡した。

「呑んで下さい。水なしでも問題ないはずですから」

麻奈は手のひらの錠剤を見つめていたが、口の中に放り込んで口クリとそれを嚥下した。それを見届けてから、ジュリアンは木箱から出した冷シップを、麻奈のわき腹にペたりと貼り付けた。ジュリアンは続けて木箱を探ると、中から白いサランを取り出す。麻奈はそれを何に使うのかと興味津々で見ていた。

「それ、どうするの」

「巻くんですよ。その状態のままにしておくと、咳やくしゃみをした時に肺が動いて強い痛みを感じるはずです。所詮は応急処置ですが、やらないよりはましでしょう」

麻奈の瞳が知らず、大きくなつた。

「さ、服を脱いでください」

途端に顔色がさつと変わる。

「いい！ そんなの巻かなくても、全然平気！ しばらく経つたら治っちゃうんだから。 大げさだなあ、ジュリアンは」

麻奈は冷や汗をかきながら、必死に首を横に振つて断つた。冗談ではない。そんなに恥ずかしいことをジュリアンにしてもうつ訳にはない。

は断じていかない。

麻奈があまりに懸命に断るからなのか、ジュリアンはサラシを巻く事を諦めてくれた。とてもとも、残念そうではあつたけれど。

「じゃあ、絶対にこのソファードで安静にしていて下さいね」

麻奈は安堵してから、はい。と良い返事を返した。出来る事なら姿勢を正して敬礼も付け加えたい気分だつた。なんにせよ、助かった。

ジュリアンは麻奈の肌を隠すように、捲くつた裾をそつと直してくれた。

手当てとはい、好意を寄せている男の人になんに長い間触れられたのは初めての事だつた。こんな奇妙な所じやなかつたらなあと考えて慌てて首を振つた。

さつきのサルーンの取り乱しよりを思い出すと、甘い妄想もすぐ霧散してしまつ。

「此処は怖い所だね」

麻奈は手当てしてもらつたばかりの腹を擦りながら絞り出すような声で呟く。

「姿が変わるだけでも凄く怖い。でも、それだけじゃないんだね

」

ぎゅっと上着の裾を握りながら、麻奈は床の一点を凝視していた。

「あの静かなサルーンさんが、あんな風になるなんて……。此処にいたら自分が自分でいられなくなる、そんな気がするの」

ジュリアンは救急箱をサイドテーブルに置くと、向かいのソファーに腰を下ろした。ゆつたりと体を傾け、肘掛に左腕を預けて頬杖をつく。

「自分を保てなくなる事は、もしかすると死よりも恐ろしいことかもしれませんね。しかし麻奈、貴女はどれくらい自分というものを知っていますか？ 全てを知っているつもりでも、もしかするとそれは自分の中のほんの一部分で、自分でも気付いていない別の一面が存在するのかもしれません。正気を失って、その部分が漏れ出すことの方が、私は何よりも恐ろしい」

「そんなに難しく考えた事は無いけど、此処に長くいたら駄目だつて事が良く分かったわ」

それを聞いてジュリアンは薄く微笑んだ。なぜかそれはとても満足そうな微笑に見えた。

「ねえ、ジュリアンは何か聞こえるの」

「何かとは」

「サルーンさんが言つたの。此処にいると、何かが見えるんだって。初めは聞こえるだけなのに、段々それが見えるようになるつて。私には何のことなのか分からぬから」

ジュリアンはどうなの？ と麻奈は小首を傾げると、彼は続き部屋の扉をちらりと見た。麻奈もつられて、今は閉じられているそれに目を向ける。

「さあ。私にも何の事だか分かりません」

そう答えるジュリアンは、いつもの素振りと何も変わりない。それなのに、麻奈にはなぜか彼が嘘を吐いているよう感じられた。たった今、続き部屋にちらりと向けた視線のせいだらうか。それとも、何気なさ過ぎるからなのか、それは麻奈にも良く分らなかつた。

「それよりも、この後リーズガルドの所に行こうと思つていましたが、それはとても面倒ですね。丁度あそこに彼の薦があるので、あれに話しかけて今回の件は終わりにしてしましよう」

「ああ、そつか。あの薦は聴覚も備わつてゐるつて言つたつけ。でも、何か逃げたみたいで癪だなあ」

「麻奈は罵られるのが好きなんですか？　ああ、そういう趣味なら勿論止めませんけど」

「嫌いです。スママセン、行きたくありません」

「今後も彼には関わらない方が良いでしょ。恐らく無理難題を押し付けてきますよ。幸い、彼はあの部屋から出て来られないのだからそこに近づかなければ会うこともあつません」

渋い顔をしながら立ち上がりとした麻奈に、ジュリアンが片手でそれを制した。そのまま扉の近くで揺れているリーズガルドの葉を、嫌な物を持つ手付きで拾い上げると、麻奈の口元にマイクのようになづけた。

「どうぞ」

「えーと　。何て言えばいいかな」

麻奈は、差し出された緑と赤の斑模様の植物を見ながら考えた。
「こういう場合、どう言えばいいのだろうか。

失敗した事には変わりはないのだから、取り繕つても無駄だと悟つて、麻奈は自棄になりながら薦に話し始めた。

「えっと、聞こえますか？ 麻奈です。リーズガルドも知つての通り、えー……失敗しました。サルーンさんから記念品も貰えませんでした。でも、私は仲良くなる気満々だったからね。ちょっと今は失敗したけど、まだ諦めてないからそのつもりで。だってリーズガルドは期限設けなかつたでしょ。サルーンさんと親しくなつて、絶対記念品持つて行くから待つてなさいよ！」

「まだ諦めてないんですか？」

「もちろん。あの生意氣小僧に思い知らせてやりたいじゃない」

「今のも彼に聞こえてますよ」

「あ、しまつた」

麻奈は頭を搔いた。興奮してつい本音が漏れてしまった。それを少し冷めた目で見ながら、ジュリアンがリーズガルドの薦を部屋の外へポイッと放り投げた。

「そういう事ですから、君は大人しく部屋に帰つて下さいね」

薦は不満気にカサカサと震えたが、ジュリアンは有無を言わさず、ぴしゃりとドアを閉めてしまった。

無理難題 7（後書き）

いつも読んで下さってありがとうございます。
肋骨にひびが入ったときには、シップとサラシが良いそうです。ジ
ュリアン実は正しい処置をしようとしていました。
それでは、また次回お目にかかりたいと思います。山石でした。

リーズガルドを部屋から閉め出してから、ジユリアンはいつもの中ゆつたりとした足取りでまたソファーに腰を落とした。その様子を見ていた麻奈は、ジユリアンの足元を見て顔を曇らせた。こうして彼の全身を眺めていると、嫌でも足元に目がいってしまう。

「足、また透けってきたね。どうぞ上ってきてくれるみたい」

「そうですね、進行するスピードも速くなつたようになります。このままだと、麻奈を手伝える時間はあまり残されていないようですね」

ジユリアンは困ったような顔をして自分の足元を見る。その足は既に膝まで完全に透明になつていて、半透明の部分は腰の辺りまで上がってきていた。

「じゃあ急がないと。つ痛……」

麻奈は慌てて立ち上がり、脇腹の痛みに一瞬息を詰まらせる。

「急に起き上がってはいけません。それに、麻奈の怪我が完全に治るまでは動くつもりはありませんよ」

「でも」

「いいから横になつて下さい。その代わり、治つたらたくさん歩かせますからね」

少しでも休ませてくれようとするジュリアンの心遣いが嬉しかった。麻奈は素直に頷いてソファーに再び収まつた。

「確かに、自分のなりたい姿になるんだったよね。ジュリアンはどうしてその姿なの？ 透明人間になりたかったの？」

「透明人間。。。そうかもしません」

自嘲氣味に笑うジュリアンを見て、麻奈は聞いてはいけない事だつたかと後悔した。望む姿、それと同時に見たくない姿なのだとジュリアンが言つていたのを思い出す。

しかし、よく考えたらそれはおかしな話だった。普通の人間は、見たくないと思うような姿になりたいだろうか？

麻奈は、小骨が喉に刺さつたような不快な疑問を感じた。それは肝心な所でつじつまが合わないことにに対する奇妙な違和感。そもそも、此処の法則は何もかもがおかしいように感じられる。でたらめでグロテスクで、とても悪趣味なのだ。

気にはなるが、考えたところで引っ掛けた小骨はそう簡単に取れそうもない。それならば話題を変えた方が良さそうだと麻奈は思つた。

「そういうえば、靴はそのままなのね」

「ああ、それは私が靴下を履いているからだと思います。肌に直接触れていない衣服は透けないようですよ」

ジュリアンは靴を脱いで見せてくれた。光沢のある靴の中身は、もう既に透明になつてしまつていて麻奈が見る事は出来なかつたけれど。

「その足は見えないだけで、ちゃんと在るんだよね？ 無くなつたりしないよね？」

「ええ、ちゃんと在りますよ」

そう言つて、ジュリアンは片方の足のつま先を掴んでみせてくれた。目に見えない何かを掴んでいる形で静止するジュリアンの手を見ると、実に不思議な気分になつてくる。まるで出来の悪い手品を見ているようだ。しかし、これは種もなれば仕掛けもない、現実の出来事なのだ。

夢だつたらどんなにいいだろ？ 麻奈は此処に連れて来られてから何度もそう思つたか知れない。しかし、此処に来たおかげでジュリアンに会えた。それだけはこの奇妙な場所で唯一の嬉しい出来事だ。

「良かった。でも、このまま下から透明になつていつたら、最後の方は首だけしか見えなくなつちゃうね」

生首状態のジュリアンを想像して、何とも言えない気持ちになる。美青年の空飛ぶ生首はさぞかし見応えがあるだろ？ 麻奈の良からぬ妄想に、ジュリアンは苦笑した。

「それは私も考えました。ですが、もつと間抜けなのは髪だけになつた時だと思いませんか？ 天辺の髪だけふわふわ浮いているのは、カツラが飛んでいるみたいですよ、きっと」

眉を寄せながら少しおかしそうに笑うジュリアンを見て、麻奈はつられて笑つてしまつた。

「だから、やうなる前に出口を見つけて下さいね。期待しています

よ

予期しなかつた言葉を投げかけられて、麻奈は息を呑んだ。

頑張るよ。と曖昧に麻奈は頷いてみたが、彼の言葉に少しだけ息苦しさを感じた。

期待されるのは嬉しい半面、少し辛い。結果だけを求められることが多い気持ちになるのだ。

期待している。この言葉を浴びるほど聞いていた毎日を麻奈は少し思い出した。

数年前、麻奈の母親は自由奔放な長男に期待を寄せるのは時間の無駄だと早々に諦め、従順な妹の方に家業を継いでもらおうと考えた。

麻奈の家の家業、それは大きな個人病院だった。母親は麻奈に大きな期待を寄せた。麻奈もそれに答えようとしたのだが、頑張れと言われるたびに、陸に上げられた魚のように息苦しくなった。

麻奈は自分のシャツの裾を握り締めた。思い出したくない事を思い出してしまった。なぜだか、本当に酸欠になってしまったみたいに頭が痛くなる。

その時、麻奈の耳元で小さな水音が上がった。

パシヤ、パシヤ。すぐ近くで聞こえる不思議な音。麻奈は物思いに沈んでいた意識を引き上げた。

「どうしました」

「何でもないの。もう痛みも引いたから、治つたみたい。そろそろ行こうつか」

そう言つが早いか、麻奈は立ち上がり歩き出した。

胸に落ちない顔をしながら、ジュリアンも麻奈の後を追つてくる。

麻奈は今、水面を叩く水音を確かに聞いた。絶対に空耳ではないと言いかれる。

それは嗅ぎ慣れた匂いを伴つて麻奈の元に届いたのだ。あれは塩素を含んだプールの匂いだった。

耳に届く音 1（後書き）

いつも読んで下さりありがとうございます。サブタイトルってつけるのが難しいと良く聞きましたが、やつてみると本当に悩みます。それではまた次回、お会いしたいと思います。山石でした。ランキングに登録してみました。もしも、良ければポチッと押して下さい。よろしくお願い致します。

麻奈とジュリアンはそれぞれバケツを持って、廊下に立っていた。アノ人対策のため、中には水がなみなみと入っていてとにかく重たい。こうしていると何かの罰で廊下に立たされているようだが、二人はどこから校舎内を捜索しようか話し合っていたのだ。

「周りをよく見て、何か少しでも気になつた事があつたら教えて下さい」

「分かつた。でも、ジュリアンはこの建物全部調べたんでしょう」

「勿論調べましたよ。しかし、結局出口は見つからず。それに、麻奈が来てから建物の形が変わつてしまつたので、また初めからやり直しです」

うんざりといった顔でジュリアンは肩を落とした。

「それは、お疲れ様だね」

学校のイメージを追加してしまつた麻奈は、若干の責任を感じて在らぬ方向へ視線を逸らした。

「でも何か手応えというか、怪しい所の田星くらいは付いてたんでしょ？」

「それが全く

困っちゃいますよね。とジュリアンは軽く笑つた。

麻奈はため息を吐きたくなつた。

「じゃあ、一度端から順に調べてみたほうがいいかな」

「そうですね。時間は多少かかるかもしませんが、それが一番の近道かもしれません」

「それなら、この三階から始めようか」

麻奈は、ジュリアンの部屋の隣に位置する教室の扉に手をかけた。入つてみると、そこは何の変哲もない普通の教室だった。

机が整然と並べられていて、教壇が少し高い位置に設置されている。黒板も至つて普通の物で、チョークの白い粉の跡が残るそれは授業の名残を思い起こさせる。ざつと見てもおかしな所はあるで無い。今にも生徒が入つてきそうな、そんな雰囲気だ。

ジュリアンは扉の横に備え付けられている掃除用具入れを開けて中を調べている。そこには汚れて真つ黒になつた雑巾と、古い簞が数本入つているだけだった。

出口を探すといつても、何をどうしたらいのか麻奈には検討もつかない。麻奈は持つていたバケツを近くの机の上に置いて、窓から外を眺めた。どこまでも広がる不気味な電信柱の大群が目に入つてきて、麻奈の心臓がきゅうと一回り小さくなつたように締め付けられた。

不気味な景色。しかし、ただそれだけのはずなのに、訳も分らず妙にそれが気にかかる。湧き出る不快感に戸惑いながらも、麻奈はそれに抗うように窓に近寄つていつた。

「開くかな」

試しに窓を開けてみると、スライド式の窓は問題なく開いた。顔だけ出して下を覗き込むと、校舎の側に作られた寂れた花壇が見えた。校庭の端に建てられた緑色に濁ったプールや、ペンキが剥げかけた小さな体育倉庫も麻奈の記憶にあるものと全く同じだった。外の空気は冷たくも暖かくもない。室内と全く変わらない空気に、また微かな違和感を覚えた。

「外つていう感じがしませんね」

いつの間にか、すぐ隣にジュリアンが立っていた。彼は窓から少し身を乗り出す形で外を眺めている。

「風も無ければ、匂いも無い。温度も湿度も部屋の中と変わらない。変だと思いませんか？」

「そうだね。まるで、『の学校』と大きなドームの中にでもいるみたい」

麻奈は自分で発した言葉をもう一度頭の中で転がしてみた。

もしかしたら本当にそうなかもしない。この不可思議な場所で感じる息苦しいような閉塞感はきっとそのせいなのだ。現に、この校舎は透明な何かで覆われている。それは何かの加工を施したドーム状の建設物かもしれない。そうなると、出口は校舎の中ではなくて外にあることになる。

しかし、と麻奈は頭を振った。此処に来た時は鏡を通って来たのだ、少なくともそこには出口の一つに違いない。

麻奈の眉間はだんだんと狭まっていた。頭の中がこんがらかってきた。そうだった。

こんな時にはとにかく動くに限る。思考の迷路に囚われてしまつ前に、目の前にあるものに向かつて行くのだ。

「ねえ、ジュリアン。やつぱり踊り場の鏡を先に調べてみよつ」

ピー……ガガア……

麻奈が最後まで言い終わらないうちに、教壇の上に付いているスピーカーから耳障りなノイズが聞こえてきた。

「何？ 誰が放送なんて」

「しつ！ 静かに」

ジュリアンがスピーカーを睨んだまま、麻奈の唇に指を当てた。スピーカーからは今も耳障りな音が漏れている。麻奈も息を殺して聞き入つた。暫くすると、ノイズに混じつて微かに人の声が聞こえてきた。

『……ガガア……から……ピーラれ……う……な……』

「何で言つてるの」

「しつ」

スピーカーから流れる音は低くか細い。聴き取り辛いその声は、何を言つているのかさっぱり分からなかつた。

徐々にノイズが小さくなつて声が幾分聞き取り易くなつてきた。しかし、言葉が切れ切れにしか聞こえてこないので解読は難攻した。

何度もかの放送を聞く内に、麻奈はようやく内容を繋げる事が出来た。

『「……から……で……られると……おもい……な』

「此処から出られると思つた?」

麻奈は背筋に冷たいものが流れていった。隣ではジュリアンが小さく身じろぎをしている。

スピーカーからは壊れたように、繰り返し繰り返し押し殺した声が流れている。低く抑揚の全く無い声。人の声ではないような、その淡々とした口調に麻奈は鳥肌が立つた。誰かがどこかで自分たちを見ているのだ。

麻奈はいつの間にか、ジュリアンの手を胸の前で握り締めていた。ジュリアンは震える麻奈に気が付いて、その肩を軽く引き寄せた。安心させるように、震える肩をそっと叩く。ジュリアンの手の温かさに麻奈の緊張は少し解けていった。

「麻奈、放送室はどこですか」

「え」

「この学校は麻奈の通っていた中学校にそっくりだと言つていましたね。だったら、放送室の場所は分かりますね」

スピーカーからはまだ不気味な放送が続いている。麻奈がはつと気が付いたのと、ジュリアンが踵を返したのはほぼ同時だった。

「行きますよ」

ジュリアンはそう言ひが早いか、麻奈の手を引っ張つて駆け出していた。その素早い動きに対応できずに、麻奈はジュリアンに引きずられるように後に続いた。

「どうちですか」

廊を出た所でジュリアンが麻奈を振り返る。麻奈は遠い記憶を呼び起こそうとして、廊下の天井を凝視した。当時、あまり放送室には馴染みが無かつたように記憶していたので、思い出すのに時間がかかってしまった。焦れたようにジュリアンが麻奈の手を強く握る。

「待つて！　ええと　確かに階だつたはず。……そうだ！　西側の校舎の突き当たり、サルーンさんの部屋の真下」

ジュリアンはそれを聞くと麻奈の手を離して階段を駆け下りて行つた。

「ジュリアン！　待つて」

一人でそこにあるのが嫌で、麻奈もジュリアンを追つて階段を走る。しかし、全力疾走のジュリアンには到底追いつかない。見る見る遠ざかつて行く彼の背中を、麻奈は必死で追いかけた。しかしすぐに息が切れてしまい、どんどんふたりの距離は離れる一方だつた。

麻奈は、もう見えなくなつてしまつたジュリアンを追いかけて、二階にある自分の部屋の前をぜいぜいいながら通過した。奥の廊下に、上等な幾何学模様の絨毯が敷かれているのを見て、顔を歪めた。その絨毯には見覚えがある。

嫌な事を思い出してしまい、無理をしてでも早く通り過ぎようとした矢先、最も開いて欲しくない扉がガラリと開いてユエが出てきた。ユエは走る麻奈を見つけると驚いた顔をしたが、すぐに美しい顔を不機嫌に歪めた。

「お前か」

麻奈はユエを無視してそのまま走った。ユエの脇をすり抜けようとした瞬間、突如長い手が伸びてきて走る麻奈の腕を強引に掴んだ。急に走りを止められて、麻奈は肩で息をしながらユエを睨んだ。

「急いでるの！ 邪魔しないで」

「！」の不愉快な声は一体なんだ？ ザクしてあんな所から声が聞こえる？』

ユエは廊下のスピーカーを顎で示した。

どうやら、ユエはスピーカーを知らないらしい。ユエの国には無い物なのかもしれない。

「 来れば分かるよ」

説明するのが面倒なのでそう答えて、麻奈はユエの手を振り払って走り出した。背後から舌打ちする音が聞こえたが、麻奈はそれに構わずジュリアンの姿を追いかけた。

いつも読んでいただきましてありがとうございます。小説を評価して下さった方がたくさんいて、とっても驚いております。甘口、辛口どんな評価でもとても嬉しいです。こんな感じの小説ですが、お付き合いして下さって本当にありがとうございます！ それでは、山石でした。

L字型の校舎の一階、東側の長い廊下の突き当たりに放送室はひとつそりとあった。ジュリアンは、音が漏れるのを防ぐための分厚い鉄の扉を開けようとしたが、何度もドアノブを回しても扉は開かない。鍵がかけてあるらしい。ジュリアンは歯軋りした。珍しく焦つていたために、鍵がかかっている可能性を失念していたのだ。

廊下には、未だノイズに混じつてボソボソと低い声が響き渡つている。

いつその事蹟破ろうかとジュリアンが考えたとき、麻奈がユエを伴つて現れた。

ジュリアンはにやりと唇を吊り上げた。渡りに船とはこの事だ。

「ユエ。」のドアを破壊して下せー

突然の無茶な要望にユエは腑に落ちない顔をしながらも、走つてきた勢いのまま扉に思い切り蹴りを入れた。バキンという鈍い音がして、蝶番が壊れて扉はゆっくりと内側に倒れていった。

ユエの隣で麻奈が信じられない物を見る目つきで扉とユエとを見比べていた。

ジュリアンは一人に構わず暗い部屋の中にするりと滑り込んだ。いつの間にか奇妙な放送は止んでいた。ジュリアンが部屋の中に入った事に気が付いて、麻奈も慌てて後を追ってきた。

「誰もいない

そこは小さな部屋だった。部屋の真ん中に放送用のマイクや機材

が並べられていて、床にはCDや年代物のレコードが入った一抱えほどのダンボールが積み上げられているだけで、どこにも人の姿はない。

古い埃の臭いが鼻に付く。ジュリアンが窓に引かれたままのカーテンを開けると、シャツという音と共に部屋は茜色に照らし出された。そこには人が隠れられるような場所など無かった。

「どうして、わざまで放送がかかってたのに 窓から逃げたの？」

「それは無いでしょ。ほら、窓には鍵が掛かっています。それに、床の埃には私達の足跡しか付いていません」

「じゃあ、どうやって逃げたんだ？」

麻奈は不可解な出来事に不安になつた。これでは推理小説の安い密室トリックみたいだ。

麻奈が心の中で悪態を吐いたのも束の間、ジュリアンの一言を聞いて麻奈は蒼白になつた。

「この機材、どうやら使つた形跡がありますね」

分厚い埃が溜まつてゐるそれは、触れればはつきりと指の跡が付くほど汚れていた。しかし、機材には指の跡はあるか何の痕跡も残っていない。長い月日の間に積もつた埃が厚い膜となり、機材の上を覆つていた。

「おまけにこの機材は壊れているようです。電源が付きません」

パチパチとスイッチをいじるジュリアンが神妙な顔で呟いた。誰

かの喉が、「ククリと音を立てた。

「 どうした事」

麻奈は震えながら尋ねた。

「分かりません。でも、この放送室では放送を流す事は出来なかつたという事です。麻奈、他に放送できる設備はありますか」

「分からぬ。でも、私の中学校にはここしかなかつたような気がする」

ジュリアンは考え込むように顎に手を当てている。

麻奈は恐怖が足元から這い上がってくるような気がして、両手で自分を抱きしめた。その手が小刻みに震えているのが分かる。推理小説どころか、一気に怪談になってしまった。

「ユエ、お願いがあります」

扉にもたれて傍観していたユエに、ジュリアンは声をかけた。ユエはじろじろとジュリアンを見ただけで、両腕を組んだまま動かない。

「麻奈を部屋まで送つて下さい。こんな状態の麻奈を、この先連れてはいけません」

麻奈は顔を上げてジュリアンを見た。優しく微笑んでいるのに、冷たい目。足手まといだと言われた気がした。

「大丈夫だよ、私も一緒に」

「いえ、私も少し調べたい事もありますから。それに、その状態でアノ人に会つたら走れるんですか」

そう指摘されて、麻奈は膝に力が入らないことに気が付いた。それほどまでに、この場所に恐怖を感じている事に愕然とする。麻奈は悲しい思いでふるふると首を横に振った。

「調べ終わつたらきつと報告に行きます。だから、私が戻るまで大人しく部屋で待つていて下さい」

麻奈の頭がこくりと頷くのを見て、ジュリアンは目を細めて優しくそこに手を置いた。

「では、お願ひします」

ユーハの肩を叩くと、ジュリアンは扉を跨いで走り出した。

「勝手に頼んで行きやがって。俺の意思は無視かよ」

舌打ちしながらユーハは放送室を後にする。麻奈はこんな部屋に一人残されては堪らないと思い、慌ててユーハの後を追う。廊下に出ると、麻奈を待つていたようにユーハが立っていた。彼は突き刺すような視線を麻奈に向けると、無言で歩き出した。付いて行こうか麻奈が迷つていると、いろいろしたようにユーハが振り返った。

「さっさと来い」

「……うん」

麻奈が自分に追いつくのを待つて、ユエは再び歩きだした。

「ねえ、」「こういう放送は前にもあったの？」

「放送？」

「さつきみたいに、突然四角い箱から声が聞こえてくる事」

「いや、初めてだ。大体、さつきの部屋は一体何だ」

「大雑把に説明すると　あの部屋にある機械を使って、マイクつていう物に話しかけるとその人の声がさつきの四角い箱から流れる仕組み」

「ほう。で、誰が放送したのか確かめに行つたらそこには誰もいなかつた。おまけに機械は壊れていた。それでお前は怯えてるわけか」

ユエはのんびり歩きながらやりと笑つた。美しい顔は邪悪な表情をしても美しい。麻奈は意地悪そうに歪んだユエの顔を見ながら頬を膨らませた。

「だつて怪談みたいで怖いじゃない

「そんな事でいちいち怖がれるかよ、馬鹿馬鹿しい。本当に恐ろしいものって言つのは、こんなものじゃない」

高い鼻の頭に皺を寄せて、なぜか腹立だしげに歩くユエを見ていると、ある疑問が沸いてくる。聞いても良い事かと少し迷つたが、結局好奇心に勝てなかつた。

「ＧＨは普通の姿に見えるけど、ビジが変わったの」

ＧＨは雷にでも打たれたようにびくりと体を震わせた。一瞬の間と冷たい空氣。ゆっくりと振り返ったその顔は、恐ろしいほど剣呑な視線をしていた。その刺すような視線を浴びた麻奈は、数歩後ろに下がってしまった。

「……知りたいか」

ぞつとするような響きの低い声に気圧されて、麻奈は慌てて首を横に振った。

「やつこお前は、まだ変化無しか

「私はまだ来たばかりだから。そんなに早く変わらないんじゃないかな」

「いや、時間は関係無い。あの肉ゼリーは着た早々一気に変わった。名前も名乗らないいうちにな。そつかと思えば、ジュリアンみたくじわじわ変わる奴もいる」

「やつの？」

もしかすると、自分でも気が付かないうちに変化が始まっているかもしれない。麻奈は青褪めながら自分の体を見回した。服の中に手を入れてお腹や背中にも触つてみる。幸い、異常な感触は無かつたので安堵の息を吐く。

「手伝つてやるつか」

ユウが舌なめずりでもしそうな表情で麻奈を見ていた。

「要らない！ 結構です」

麻奈は首を振りながらユウから離れて歩いた。二人は麻奈の部屋の前まで来ると、ユウが優雅に扉を開け恭しく右手を胸に当てながら一礼をした。

「『』到着あそばしました。怖がりなお姫様」

それは洗練された美しい所作だつたが、明らかに馬鹿にした態度に麻奈はむつとした。しかしその目は主の意思とは裏腹に、流れるようなユウの動作に吸い寄せられていた。

麻奈はそれが堪らなく悔しくて、ユウに見とれた自分を『』まかすように、無言で部屋に入つていった。後ろ手に扉を閉めようとしたその手を、無骨なユウの手が遮つた。

耳に届く音 ③（後書き）

読んで下さりてありがとうございます。暑い日が続いていますが、皆さんはどうお過ごしでしょうか？

私は夏風邪を引いてしまい、更新が少しだけ遅れてしまいました。体調管理には気をつけたいと思います。それでは、また。

「何してるの？」

扉にかかる「じーじー」とした無骨な手を眺めながら、麻奈はユエに問いかけた。彼は笑みを深めるばかりで答えようとはしない。

麻奈が嫌そうに、しつしつと追い払う手をものともせずにかいぐぐると、ユエは躊躇いもなく部屋の奥へと入ってきた。それからゆつくりと振り返ると、しげしげと麻奈を見た。

「何？ 何か用なの？」

麻奈は無意識に鳥肌を立ててユエと距離を取る。

「ジユリアンに置いて行かれて悲しいか」

その言葉は麻奈の胸に刺さった。薄々気が付いてはいたが、はつきり言葉に出されると苦い気持ちがあふれてくる。そう、自分はジユリアンに置いていかれたのだ。それは足手まといと言われた事と変わらない。

「……そんな事、ないよ」

ユエの唇がきゅっと上がった。幼い子供が新しいおもちゃを手に入れたら、こんな笑い方をするかも知れなかつた。

「そりいえば、あつさり置いて行かれたよなあ。無理もないだろつな、完全に怯えて震えていたからな。あれじゃあ、ただの足手まといだ」

傷口にこじりてりと塩を塗られた気分になつて麻奈は下唇を噛み締めた。そんな事は言われなくても分かっている。

「何が言いたいの」

涙を辛うじて堪えてユエを睨む。

「アイツを信用するのは止めておけ。利用出来なくなつたら、あつさり切られるだけだ」

麻奈は返す言葉が見つかなかつた。きっとジュリアンは役に立たないと判断したら、何度も麻奈を置いて行くだろう。

「みんなそう言つんだね。リーズガルドにも似たような事を言われた……」

急に視界が滲んできて、麻奈は急いで俯いてそれを隠した。麻奈にとつて、この奇妙な場所ではジュリアンだけが心の拠り所のような存在なのだ。それを否定されたくない。

いつの間に移動して来たのか、ユエが麻奈のすぐ目の前に立つていた。麻奈は涙で霞む視界を晴らそうと、顔を背けながら瞬きを繰り返す。不意にユエの手が麻奈の頸を捉え、強い力で上を向かせた。瞳から零れて頬を伝う涙を、ユエの親指がそつと拭つた。

ユエに泣き顔を見られたことは麻奈にとつて屈辱だった。しかし、一度溢れた涙は後から後から零れてくる。顔を背けたいのに、じつと見下ろしてくる冷たい色の瞳が恐ろしいほど綺麗で、麻奈はそのまま動けずについた。

「アイツの事で泣くなんて、滑稽だな。見ていて不愉快だ」

いつそ優しいほどの声色で、ユウの言葉は麻奈の心に棘を刺す。麻奈はこの男の前で泣いている自分が堪らなく惨めになり、ぎゅっと目を閉じた。涙が更に溢れて、頬に新たな涙の筋を作る。

閉じた瞳からも、熱い雫が溢れてくるのを感じて、麻奈は手の甲でこじこじと擦つた。

不意に自分の手が退けられると、暖かく濡れた何かが麻奈の涙の跡を這うようになぞつていった。驚いて目を開けると、ユウの舌がゆっくりと離れていくところだった。

「何、するの」

「馬鹿だな。お前は」

ユウは掬い上げるようにして麻奈の背中と膝裏に手を入れてその体を横抱きにすると、そのまま優しく床に横たえた。麻奈はユウが何を言おうとしているのか分からぬ。彼の冷ややかな瞳を見ていると何も分からなくなってくる。

「ジュリアンを信用して、依存して。奴に利用されている事に気付
きもしない」

ユウの黒い服が目の前を塞いだと思ったら、ため息と共にたくましい体が覆い被さつて来た。甘い香の匂いが麻奈の体を包んでゆく。彼の長い銀の髪が肩口から流れて、麻奈の頬をくすぐつた。ユウは完全に麻奈の上にのしかかり、彼女の足に自分のそれを絡めていった。

麻奈は何が起きたのか分からず、瞬きを繰り返した。その度に

涙が零れ頬に落ちていった。ユウは、それを再び指で掬い取る。酷い言葉とは裏腹に、その手つきはとても優しいものだった。

麻奈は思い出したようにユウの胸を押し返した。しかし、ユウはそんな抵抗を笑いながら跳ね除けると、麻奈の耳に顔を寄せた。

「奴の優しさ全て嘘だ。奴がお前に優しくするのは、都合の良い道具にするための手段でしかないんだよ」

熱い息が耳にかかる。麻奈はユウの胸をなおも押し返そうとしたが、ユウの体はびくともしない。服越しに触ったユウの胸板は、硬くて厚い。麻奈の細い腕では、到底動かせるとは思えなかつた。それでも麻奈は必死に押した。これ以上、彼の口から何も聞きたくなかつた。

「お前は知らないんだ。奴がどんなに酷い人間なのかを」

耳元でユウは物憂げなため息を吐いた。それは耳から入り込み、麻奈の頭の中を甘くかき回していく。ユウは麻奈の耳をなぞるようには舐めると、耳の奥まで舌を差し入れた。グチャグチャという籠つた音と共に、熱い舌がぬるぬると動かされる。今までに無いほどのが快感に耐え切れず、麻奈は弓なりに仰け反つた。

「……何で、そんな事言つの。ジュリアンは何度も私を助けてくれたもん。此処で頼れるのは、ジュリアンだけ……」

ユウの唇がゅっくりと下りて、麻奈の頸に吸い付いた。

「んんっ」

ゆっくりと蛭が這うような舌の感触に鳥肌が立ち、麻奈はユウの

上着をきゅっと握り締めた。ユエはわざと甘い音を立てながら執拗に吸い付いてくる。思わず漏れそうになる声を何とか飲み込むが、麻奈はそれだけで息も絶え絶えになっていた。それは酷い拷問のような気がした。

「じゃあ、教えてやる。奴が何をしたのか

ユエは麻奈の頃から歯を離して、その顔を挟み込むように両手で掴む。鼻が触れそうなほどに近い距離で、怒りを灯したようなアイスブルーの瞳が揺れている。麻奈は目を逸らすことも出来ずに、挑むようにユエの瞳を見つめ返した。

「ジュリアンは、俺を囮に使ったんだ

「囮？」

ユエの歯が悔しさでギリリと鳴った。

「そうだ。あの肉、ゼリーが選ばれた時、変化する前のアイツが鏡に映った。その時、ジュリアンは俺に言つたんだ。これはチャンスだ、今この鏡は外と繋がつていて。これを使えばきっと外に出られると。俺は閉じ込められている事にうんざりしていたから、奴の提案を受け入れた。脱出できる事を願つて鏡を通つて外へと出た。出た先は全く知らない場所だつたが、とにかく遠くへ走つた。一度とこの訳の分からぬ場所に捕まらないようにな

ユエの眉間が険しくなつてくる。麻奈はジュリアンの言葉を思い出していた。鏡から出ようと色々試した。彼は以前そう言つていた。その時に何かがあつたのだろうか。

「走るうちに段々体が重くなり、思うように身動きが取れなくなってきた。やがて俺は走る事はあるか、立っている事さえも出来なくなっていた。それでも必死に、地べたを這いずりながら前に進もうとしたよ。だが、その時初めて分かったんだ。俺の体に目には見えない何かが巻きついている。俺はそれを振り払おうとしたが、それはますます俺の体を締め付けてきやがった。そして次の瞬間、巻きついた何かは、俺の体中の骨を一瞬で折りやがったんだ。これ以上俺が逃げられないようにな。激しい痛みに意識が遠くなつて、気が付いたらまた此処に戻されていた。その内ジユリアンがひょっこり姿を見せて、白々しくこう言つたんだ。こんな結果になつて非常に残念だつた、しかし脱出しようとするどつなるのかが分かつてとても良かつた。ところで、自分は違う場所で脱出を試みたが、それはあと少しの所で失敗してしまつた。今度鏡が光つたらまた試してみたいから、その時はまた囮になつて欲しいと……」

ユエは言葉を区切ると、また激しい歯軋りをした。すぐ目の前でバリッと鳴る歯に、麻奈は怯えていた。犬歯をむき出しにしたユエの顔が更に近付く。

「奴は、鏡から脱出しようとすればどうなるか知つていたんだ。そして、俺が目立つた行動を取つてゐる間に、自分だけ此処から逃げようとしたやがつたんだ。俺達を閉じ込めている奴の注意を、自分から逸らすためだけに俺を利用したんだ。その上、ぬけぬけとまた頬みたいなどと言いやがつて！」

「ジユリアンが本当にそんな事を　　？　きっと何か誤解が……」

麻奈の言葉を遮つて、許せねえ！と唸るように呴いたユエの瞳は、猛り狂わんばかりの怒りが渦巻いていた。自分の頬を挟む手に力があり、麻奈はびくりと震える。麻奈は剥き出しのユエの怒りに怯え

ていた。今のＧＨには何を言つても聞こえないのかもしない。そんな麻奈の様子に気が付いて、ＧＨの目が細まつた。とても甘く。

「怖がらせたか？ 可哀想に」

激しい怒りを引っ込んで、飛び切りの猫なで声で麻奈の頬を優しく撫でる。

「じゃあ、胸糞悪い奴の話はもつ止めだ。もつと楽しい事をしようぜ」

耳に届く音 4（後書き）

読んで下さりてありがとうございます。

気が付けば、お気に入り登録が50件を超えていました！本当に皆さんありがとうございます！こんな感じの話ですが、次回を待つていて下さっている方がいると思うと執筆にも熱が入ります。どうか今後ともお付き合い下さい。それでは、また。

「Hはからかうよ」笑って、麻奈の喉笛に噛みついた。その犬歯は鋭く痛い。麻奈はこのまま喉を噛み千切られてしまひような錯覚を起こした。

「んっ」

強い力で首筋を吸われ、麻奈はたまらず声を上げる。その反応を楽しむように、コエは麻奈の首筋をぬるりと舐め上げた。

「ふっ……」

背中に悪寒に似た快感が走り、麻奈の腰が跳ねた。

「ん……」

「Hはべりりと唇を舐めると、麻奈の首に指を這わせた。

「ん……」

麻奈は震えながらその手を振り払おうとした。しかし、コエは左手で麻奈の両手をさらうように掴んで頭上にまとめ上げると、赤く色づいた首筋に更に唇を寄せた。

「言えよ。ここがいいのか

「んん……」

じつてりと舌を這わされて、麻奈は眩しいくらいの快感に目を瞑つた。真っ赤になつて顔を背ける麻奈に気を良くしたコエは、目の前の白いシャツのボタンを器用に片手で一つ一つ外してゆく。

その間も、コエの舌は麻奈の首筋を蹂躪し続けた。麻奈は両手の自由も奪われ、嵐のような快感に耐えることしか出来ない。

「言えないのなら仕方ねえなあ。体に直接聞く事にしよう」

酷く楽しげに笑つて、コエは麻奈のシャツを開き、キャミソールを捲り上げた。激しく上↑下↓する水色の下着に包まれた胸元を目にして、コエの興奮はさらに高まつた。麻奈は首を振つて抵抗の意を示す。動かせるのは最早そこだけだつた。

コエは麻奈の形の良い胸に、濡れた唇を寄せて軽く歯を立てた。それは、長らく忘れていた女の香りと、瑞々しい弾力をもつて跳ね返してくれる。コエは徐々に体が熱くなつてくるのを感じた。

「本当に、もうやめ」

触れては離れ、また責め立てる様に吸い付くコエの唇に、麻奈は涙目で声を上げる。このままでは本当に最後まで流されてしまう。

抵抗の言葉も空しく、快樂に翻弄されていく自分に麻奈は戸惑つていた。それを知つてか知らずか、コエは麻奈の胸元に舌を這わせながら邪魔な下着に手をかける。その時、唐突にコンコンと扉を叩く音がした。

「お邪魔ですか？」

場違いなほどなんびりした声が降ってきた。見ると、扉にもたれたジユリアンが腕を組んで麻奈達を見下ろしている。コエは舌打ちしながら顔を上げ、視線で射殺せそうなほど鋭い目をジユリアンに

向けた。

「邪魔だ。失せろ」

「すみません。調べ終えたら報告すると、麻奈と約束していたものですから」

ジュリアンはひょいと肩を竦めながら部屋へと入つて来る。麻奈はジュリアンの顔を見て、安堵すると同時にとても恥ずかしくなつた。今のこんな状態を見て、ジュリアンは自分の事をどう思つだろうか。

麻奈はユエの下から逃れようと全力でもがいていた。本当なら、こんな恥ずかしい所をジュリアンに見られるのは、身もだえするほど耐え難いのだ。しかし、ユエの手は未だ麻奈の両手を掴んで離さず、両足も体重をかけて絡めたままになつている。麻奈は自由にならない手足を動かそうとするのだが、そのどちらも麻奈の力では振りほどく事は出来なかつた。

「おい、暴れるなよ。まだ始めたばかりだらう」

麻奈が突然暴れ出したのを見て、ユエは一層力を加えた。活きの良い魚のように身をよじる麻奈の耳に口を寄せて、とろりと熱い言葉を流し込んでくる。

「折角ジュリアンが来たんだ、どうせならアイツに見ていてもらひつか? 燃えるぜえ、観客がいた方が。おい、手出ししないのならそこで見ていてもいいぞ」

ユエは麻奈の耳から口を離し、ジュリアンに向かつてにやりと笑つた。麻奈は、ちぎれんばかりに顔を振つた。ジュリアンにそんな

所を見られるなんて、死んだほうがました。

忘れていた涙がまた込み上げてくる。ユウは至極楽しげに笑うと、麻奈の顎を捉えて真っ直ぐに見つめた。

「泣くなよ。そんな顔で泣くと、もつと虐めたくなるだろ?」。さつとアイツもそう思つてるぜ」

顎でしゃくるようにジュリアンの方を示す。つられて麻奈もジュリアンに目を向けると、彼の冷たい視線に出会い背筋が凍りついた。ジュリアンは底冷えする無表情な目で麻奈を見ていた。瞬きもせずに麻奈を穿つその視線受けると、なぜだか激しく責められているような気がする。

「『めんなさい』

麻奈は反射的に謝った。自分でも何を謝ったのか分からぬが、何かを許して欲しいと思った。

ジュリアンの眉間に僅かに皺が寄つた。ポケットに手を突つ込みながら、彼はつかつかと二人に近寄つてくる。

麻奈は固唾を飲んでジュリアンを見ていた。このとき、すぐ上に圧し掛かるユウが、微かに緊張して身構えるのが分かつた。麻奈の手を離して、いつでも動けるように腰を浮かせる。ジュリアンは二人の側まで来ると、しゃがみ込んでユウの頭をペシリと叩いた。

「何を馬鹿な冗談を言つているんですか。いいから麻奈を離しなさい

い

「つ痛てえな、俺は本気だ」

ユウは怒った様子も無く渋々麻奈の上から身を起こすと、大して

痛くもない後頭部を撫でながらソファーに収まった。

ジュリアンが麻奈に手を差し伸べる。その顔は、いつも微笑みを浮かべていた。

「大丈夫ですか」

「うん」

麻奈は空気が一瞬で変わった事に戸惑いながらその手を取った。身を起こしてもらしながら、涙をこぼしと拭う。助かったという気持ちよりも、消えてなくなりたいと思う羞恥心のほうが大きい。麻奈はジュリアンの視線を避けるように俯いた。そんな麻奈の様子を全く無視して、ジュリアンは顔を寄せて覗きこんでくる。

「首、痕になっていますね。他にも痛い所は無いですか？」

「え？」

首に手をやり、シャツの前が肌蹴たままになつていてる事に今更気が付いた。慌てて捲くられた服を直してボタンを留めようとしたが、手が震えてうまくいかない。ジュリアンがやんわりとその手を退け、代わりにボタンを留める。

「怖かつたんですね、可愛そうに」

麻奈はされるがままになりながら、ジュリアンのシルバーリングの光る長い指を見ていた。滑らかによく動く指をじっと見ていると、それは不意に動きを止めて麻奈の襟元を少し持ち上げた。

「さつきの放送」

「

「え？」

「どいで放送されていたのか、私なりに田ぼしい所を見て回っていましたが、どこにもそんな設備はありませんでした。まだこの学校の全てを調べたわけではないのでなんともいえませんが、リーズガルドに引き続き探すように頼んでおきました」

「やつ」「

麻奈は、心此処に在らずといった返事しか返せない。実際、やつきはあんなに気味が悪かった放送も今ではどうでもいい事のように思えた。

「一番上のボタンが取れていますね」

麻奈は襟元に目を落とした。この取れたボタンを見るたびに、口にされた事を思い出すのだろうか。麻奈は自分がジュリアンを裏切ってしまったような気持になつて、ただ彼から目を逸らし続けた。

「やつとHが戻りかけたんだじょ。見つけたら私が拾つておきます」

麻奈はお礼の言葉を口の中で呟いて、そのままジュリアンから身を引いた。麻奈が瞬きをする度に拭いきれなかつた涙が頬を滑り、そのままポタリと床に落ちてゆく。ジュリアンは小さくため息を吐いた。

「麻奈、廊下で顔を洗ってきて下さい。そんなに泣くと目が腫れて

しまこまよ

ジユリアンは相変わらず優しい。麻奈の胸に広がった訳の分らない罪悪感は、彼の温かい一言で驚くほど軽くなっていた。

「うふ

麻奈は赤くなつた両足に手を当てて少し微笑みながら、ふらりと少し頼りない足取りで部屋を出た。

「お前、せつしき何する氣だつた?」

麻奈が部屋を出て行くのを見届けると、黙つて様子を見ていたコエが口を開いた。

「何の事ですか」

「とほけるなよ。その服の中に何が入つてゐるのか、俺が知らないとも思うのか」

ジユリアンはふふふと笑うと、コエの向かいのソファーに座つた。コエは長い足を組み変えながら、それを気に食わない様子で眺めていた。

「そいつで、どひをどひとしたんだ

「だから、何の事ですか

「お前の殺氣は駄々漏れなんだよ。眞つておぐが、あの女に傷を付けるような真似はするなよ」

「おや、随分優しいんですね。情でも移りましたか」

「俺はお前と違つて女には優しいんだ。それに、あの俺を見る視線堪らねえな。やつぱり女は良いねえ。久しく忘れていた快感だ」

「ナルシストも大概にして下さー」

「ふん、いつになく立腹じやねえか。さては、お前まだ手を出してねえな」

「私はユウと違つて、それしか考えていらないわけじやありませんか」

「う

ユウは大輪の花が咲き誇るよつに笑つた。

「じゃあ、俺が先だな」

「どうぞ隨意に。麻奈がよいと言えばですが」

その口調には余裕が伺える。実際、ジユリアンは麻奈にそんな事を言わせるつもりはなかつた。彼女に触れていいのは自分だけだ。

「畜生、だつたらさつきは何で止めやがつた。今度邪魔したら許さねえからな」

分かりましたよ、ヒジュリアンは頷いておいた。

「それはそうと、アイツが付けていた下着。見たことも無い形だったが、アレはどう外せばいいんだ」

その問いに、ジュリアンは苦笑いするしかなかつた。

耳に届く音 5（後書き）

いつも読んでいただきましてありがとうございます。
この後、ジュリアンは下着のはずし方をゴムにレクチャーした事で
しうつ……。彼はそういう男です。

それでは、また次回お目にかかりたいと思います。山口でした。

鏡へ 1(アノ人の場合)

麻奈は扉をきちんと閉めてから、まだおぼつかない足取りで水飲み場へと向かつた。頭のどこかが麻痺しているようで、上手く自分の気持ちがコントロール出来ない。鼻を啜りながら、流れる涙を手の甲で拭いた。

自分でも、なぜこんなに涙が出るのか不思議だつた。何がそんなに怖かつたのだろう。ユエに襲われたからだろうか。違う、と麻奈は首を振つた。あの時のジュリアンが恐ろしかつたのだ。

囮に使つたんだ、というユエの言葉が耳に蘇つてくる。あの時は半信半疑で聞いていたが、もしかするとあれは本当の話かも知れない。

麻奈は一度大きく息を吸いこんだ。今の自分には、ジュリアンしか頼る相手がないのだ。だから、彼を信じて付いていこうと決めた。例えどんな事があつても……。

水飲み場の蛇口を捻り、勢い良く流れ出る冷たい水を、少々腫れぼつた目に当てる。化粧が落ちるかもしれないが、今更構わない。これだけ泣いたのだ、きっともう落ちてしまつているだろう。麻奈は数度顔を洗つてから、顔を拭くものが無い事に気が付いた。

仕方なく、頭を傾けて肩口に顔を擦りつけた。蛇口を閉めようとして、その手が止まつた。

此處には水が流れてる。それは、上下水道が通つているという事だ。もしかすると、下水管を追つていけば、外に通じている所が分るかもしれない。

蛇口から流れっぱなしになつてゐる水が、渦を作りながら排水溝へと吸い込まれていく。麻奈は水しぶきが掛かるのも気にならずに、水の流れをずっと見ていた。

「外に出られる　」

少し遅れて心臓がドキドキと脈打つた。このことをジュリアンに話してみよう、きっと喜んでくれるに違いない。麻奈はそう思つて、淡い期待に興奮しながら蛇口に手を伸ばした。

その時、背後に嫌な気配を感じて、突然全身が粟立つた。後ろから、濡れたモップを引きずるような音が聞こえてくる。振り向いたい、でも確認するのが怖い。麻奈は先ほどの興奮がさつと引いていくのが自分でも分つた。一気に氷水を頭からかけられたような気分だ。

麻奈が固まっていた時間はほんの数秒の間だったが、それが命取りになつた。気付いた時には、すぐ後ろでその音はぴたりと止まつていた。

麻奈はゆっくりと振り返る。アノ人は、まるで麻奈を見上げるようにして足元に薄く広がつていた。廊下にへばりつく、肉色の塊が蠢いている。カタツムリのように這つて来た跡がぬらぬらと光つているのを見て、麻奈は気分が悪くなつた。

アノ人は麻奈に覆いかぶさるように体を持ち上げ、更に左右に伸び始めた。それはまるで通せんぼをしているようだ。もしかしたら、本当にそなのかもしれなかつた。

声が出せない。喉がかさかさに渴いているせいだ。麻奈は浅い呼吸を繰り返しながら、後ろに一步下がつた。しかし、水飲み場があるせいでそれ以上は下がれない。どこにも逃げ道はなかつた。

アノ人の触手が麻奈を求めて伸びてくる。それは、麻奈が逃げられない事が分かつてゐるかのよつた、ゆっくりとした動きだつた。

今からジュリアンに助けを求めても間に合わない。

焦る麻奈の耳に、蛇口から出しつぱなしになつていい水の音が聞こえた。麻奈は考えるよりも早く蛇口に飛びついて、親指で流れ出る水に蓋をした。丁度ジェット噴射の様に水の勢いが増して、麻奈は自分が濡れるのも構わずに照準をアノ人に合わせた。

「ヴゥウ！」

急に冷たい水を浴びせられて、アノ人が耳を突き刺すような悲鳴を上げた。麻奈はその隙を付いて、アノ人の脇をすり抜けると、駆け出した。ジュリアン達のいる部屋に戻るうとしたのだが、廊下の先にアノ人の触手が蜘蛛の巣のように張り巡らされているのが見えた。

麻奈は仕方なく、踵を返して反対側の廊下へと駆け出した。

「麻奈、どうしました」

「いじや、やべえな」

騒ぎを聞きつけて、ジュリアンとユエが飛び出して來た。

「アアアアア！ オオオオ！」

最悪のタイミングでフリーーズ状態が解けたアノ人が、奇声を発しながら動き出した。獲物を探すように麻奈とジュリアンたちに頭を巡らせてから、一瞬迷った後に麻奈をめがけて猛然と触手を伸ばし始めた。

「ひい！ 何でえ」

自分を追つてくる触手を見て、麻奈は半狂乱になりながら全力で

走った。その背中をユエが追いかけようとしたその瞬間、ジュリアンがユエの腕を掴んだ。

「何だ」

ユエは苛々しながら振り返る。ジュリアンは遠ざかるアノ人から視線を外すことなく、掴んでいる腕に力を入れる。

「アノ人、いつもと様子が違うと思いませんか？ 今、明らかに麻奈を選んで追いかけて行きました」

「だから何だ」

「おかしいと思いませんか？ アノ人が誰かを識別して追いかけた事なんて今まで一度もありません。なぜ麻奈を追つたのか、興味があります。少しの間様子を見ましょう」

「馬鹿か！ そんなことをしたらあの女が絞め殺されるぞ」

ユエはジュリアンの手を振り払うと、廊下に溜まつた薄いピンク色の粘液を避けながら走り出した。

「やれやれ」

一人廊下に残されたジュリアンは、いつもと変わらないゆつたりした足取りでみんなの後を追い駆けた。

鏡へ 1（アノ人の場合）（後書き）

読んで下さつてありがとうございます。ここ数日でお気に入りの登録がぐつと増えた気がします。たくさんの方に読んでもらえて本当に嬉しいです。ありがとうございます。それでは、また。

鏡へ 2（アノ人の場合）

はあはあ。自分の荒い呼吸だけが響く廊下を、麻奈は何度も躊躇になりながら必死で走った。すぐ後ろには、アノ人の触手が粘ついた音をさせながら麻奈を追いかけてどこまでも伸びてくる。

体力の無い麻奈は、もう既に息が上がっていた。後ろを振り返る余裕は無いけれど、背後から聞こえるビチャリビチャリという濡れた音が、アノ人が離れずに自分を追つてくる事を告げている。

廊下の先には、麻奈が初めて此処に来た時に降り立つ螺旋階段が見えている。

階段を下りれば、アノ人の追い駆けてくる速度が少しでも遅くなるだろうか。それとも、上つたほうが良いのか。とにかく、この真っ直ぐな廊下をいつまでも走っているのはとても危険だと麻奈は考えていた。重たい足を懸命に動かして、麻奈は階段を上り下りようか迷っていた。

何となく上つた方が良いような気がして、階段を一段上がった途端、麻奈の足に粘々した生温かい物が巻きついた。

ぬるぬるとしたその感触が麻奈にさきほど恐怖を呼び起させた。たちまち両足に巻きついてきたそれは、強い力で麻奈の足を引っ張り始める。麻奈はそのまま廊下に引き倒されてしまい、危うく顔面を階段にぶつけそうになつた。

その時、早く起き上がらうつと焦る麻奈を田掛けて、触手の波がうねりながら押し寄せてきた。

「ひつ！」

避ける間も無く、淡い肉色の触手に足が絡め取られて、たちまち

身動きが取れなくなつた。それでも、麻奈は前だけを見て、触手から逃れようと必死にもがいた。

生暖かい感触が鳩尾まで上がつてくる。そのおぞましさにぎゅっと目を瞑つて、麻奈はひたすらばたばたと暴れた。床に爪を立て、引き込まれまいと抵抗するが、麻奈の体は徐々にあの人手繰り寄せられてゆく。

「グアアアア」

突然アノ人が突然悲鳴をあげて、麻奈に絡みつかせていた触手を一斉に引いた。

「立て」

驚いて後ろを振り返ると、ユエが長い箒を逆手に持ち、触手を薙ぎ払っているのが目に入ってきた。

「ユエ」

「早く行け」

なおも麻奈に巻き付こうとする触手を叩き落としながら、ユエは麻奈を背に庇つてアノ人と対峙した。

「でも、ユエは？」

「俺のほうが奴より強い。とつとと行けっ」

ユエは振り向きもせずにそれだけ言つと、あの人の触手をなぎ払う。麻奈は少し後ろ髪引かれたが、ありがたくユエにこの場を任せ

る事にした。ユエはいかにも戦い慣れている様子で、長い柄の箒を自在に操るその姿は華麗な舞を舞つているようにも見えた。

麻奈は駆け出した。上階に向かう階段の前には、既にあの人の触手が這い回っているので、螺旋階段を足早に下りて行く。

ユエに感謝しなくてはいけないと思いながら、麻奈は滑る足元に注意を払いながら階段を駆け下りた。

獲物が逃げた事に気が付いて、アノ人が麻奈を追うように前に出る。

「おっと、テメエは通せねえ」

ユエの不敵な顔に汗が一筋流れ落ちた。何しろ触手は際限なく押し寄せる。追い払つても追い払つても、まるで疲れを知らない機械のようにじつこく迫つてくるのだ。

しかしそんなアノ人も、どうやら痛みは感じているようだ。箒で打ち扱われるその度に、小刻みに震えながら動きを止める。だがそれも一瞬の事で、すぐにまた新たな触手を伸ばして前に前にと進んで来る。アノ人の歩みは止まらない。悲鳴を挙げながらも、狂ったように前進してくる。

そんな様子を見て、ユエも流石におかしいと思い始めた。アノ人とは今までに何度も遭遇していたが、その時は少し痛めつけられれば逃げて行つた。こんなにがむしゃらに向かつて来るのは初めての事だ。何がそこまでこの生物を駆り立てるのか。

「きやあ！」

その時、階段を下りていた麻奈が粘液に足を滑らせて転んだ。腰を打ち付けてしまい、顔を歪めながら痛む腰を擦つてている。

ユエはようやく合点がいった。アノ人の目当ては麻奈なのだ。

ジュリアンの言つていたように、アノ人はきちんと麻奈を識別して追いかけているのだ。何がこの生物の琴線に触れたのかは知らないが、此処に入ってきた唯一の女を求めているのだ。

そう考えて、ユエの中に沸々と怒りに似たものが沸き起こつてき

た。

ユエは大きく踏み込むと、触手の海を抜けてアノ人の本体を横殴りにした。しかし、それでもアノ人の前進は止まらない。すぐさま違う触手を伸ばして低く地を這うように前に出る。

彼はユエを邪魔者と判断したようで、触手を横薙ぎにして払いのけようとしている。気が付けば、押し負けるようにユエはじりじりと後退していた。

「くっ、きりが無い」

ユエが額の汗を拭う一瞬の隙を突いて、アノ人が吹き抜けの柵をするりと抜けた。自在に変化する体を長く伸ばして、アノ人は階段を下りる麻奈を目掛けて吹き抜けから飛び降りた。

麻奈はその時、ちょうど踊り場の大鏡の前を駆け下りるところだつたが、背後からボチヤンという音と共に、アノ人が突然降つてきたのを見て体が竦んでしまった。

アノ人は落ちた衝撃のために、プリンの様にゆらゆらと揺れてい

る。

「止まるな。走れっ」

上からユエの叫び声が聞こえてきた。麻奈は我に返り、慌てて踵を返す。走り出そうとしたその瞬間、目の前の大鏡から光が溢れ始めた。

鏡へ 2（アノ人の場合）（後書き）

読んで下さつてありがとうございます。お気に入りの登録が100件を超えた。ついこの間まで50件だったと記憶していましたが、この数日の間に2倍の数になつていきました……。驚くと同時にとても嬉しく思っています。登録して下さった皆様、本当にありがとうございました。それでは、また。山石でした。

鏡へ 3（アノ人の場合）

目に染み入るような、柔らかい光を放つ鏡。誰もが今はそれに目を奪われていた。麻奈は突然光りだした鏡の前で、逃げることも忘れて立ち尽くしてしまった。

しかし、アノ人だけは鏡など目に入らないかのように、ゆるゆると階段を下り続けている。すぐ後ろに迫る濡れた音を聞きながら、それでも麻奈は鏡に写し出された光景から目を逸らすことが出来ない。

そこには、目を丸くしている自分の他に、背の高い褐色の肌をした痩せた青年が映っていた。青年は目を瞑りながら、麻奈の後を追うようにのろのろと階段を下りてくる。その頬は痛々しいほどこけていて、目の下にはべつたりと隈が張り付いている。肩まで伸びる強い癖のある灰緑色の髪と、垂れ下がった目元が特徴的な青年だ。

麻奈は振り返らずにはいられなかつた。そこには肉色のゼリーのような塊が、ふるふると自分を追つて揺れているのが見える。麻奈は確信した。この鏡に映る青年はアノ人の本当の姿なのだと。

「何をしていろつ」

踊り場から動じつとしない麻奈に気が付いて、ユエが吹き抜けの柵から飛び降りようと身を乗り出した。しかしその跳躍を邪魔するように、再びジュリアンの手がユエの肩を掴んでそれを止めた。いつの間に現れていたのか、ジュリアンがユエの背後に立っていた。

「今度は何だ！」

「しつ、見て下さい。鏡の様子がおかしいです」

ジュリアンの指差した先では大鏡が点滅を繰り返していた。

その光を受けながら、麻奈は目の前に迫るアノ人を見つめていた。ゆっくりと近づいてくる醜悪な肉の塊。その姿に少し嫌悪感が沸いたが、麻奈は逃げるのを止めてぶよぶよとした塊に手を差し伸べた。

心は静かだつた。さつきまではあんなに怖がっていたのに、どうしてそんな気になったのか自分でも不思議なくらいだ。鏡に写った青年の姿が脳裏に焼きついて離れないからかもしれない。

麻奈の見間違いでなければ、青年は固く閉じた瞳から大粒の涙を流しながら階段を下りていた。それは幼い子供が親を求める様子に似ていて、麻奈の胸はぎゅっと締め付けられた。

麻奈は今初めて、アノ人を『人』としてみる事が出来た。麻奈が逃げない事を知ると、アノ人は麻奈に覆い被さる様にその身を預けてきた。手を広げてそれを受け止めるが、アノ人の重さに麻奈の体がぐらりと後ろに傾いた。

「馬鹿が。潰されるぞっ」

ユエが叫ぶのと、ジュリアンが手摺を乗り越えて宙に身を躍らせるのはほぼ同時だった。麻奈とアノ人は大鏡に向かつてゆっくりと後ろに倒れ込んでいく。

麻奈が頭から鏡に激突するその瞬間、大鏡は一際眩い光を放ち、その体内に一人をとぷりと飲み込んだ。鏡面を波立たせながら一人を吸い込んだ鏡は、すぐにまた元の冷たく景色を反射するだけの鏡に戻ってしまった。

「馬鹿なつ」

ジュリアンが軽い音を立てて階段に着地した時には、二人の姿は踊り場のどこにもなかつた。ジュリアンは直ぐに鏡に走り寄り、その表面に触れてみた。しかし、その手は固い表面を撫でるばかりで中に入る事は出来ない。

「どうなつてるんだ。あいつらは外へ出たのか」

ユエも階段を下りて来て、鏡に手を伸ばす。

「いいえ、そういう訳ではないようです」

ジュリアンが鏡のある一点を指差した。

「あそこに麻奈とアノ人が倒れているのが見えます」

そこには氣を失つて倒れている麻奈と、麻奈に折り重なる様につ伏せに倒れている青年が写っていた。

「嘘だろ　。あの姿、元に戻つていやがる」

そう呟くユエの唇が、僅かに震えている事をジュリアンは視界の端で捉えた。しかし、今はそんな事はどうでもいい。ジュリアンはそれを無視して、ジュリアンは鏡の中に倒れている一人に意識を戻した。二人共ぴくりとも動かない。こんな事態はジュリアンの想定外だった。

「麻奈、聞こえますか？　返事をして下さい」

ジュリアンは苛立ち紛れに鏡を叩いた。しかし、冷たい鏡面は何

の変化もない。その硬い鏡の感触は、まるで彼を拒んでいるようだ。ジュリアンは見ていくことしか出来ずに鏡を叩き続ける。

麻奈は目を開けた。呻きに似た声をあげながら、上半身をゆっくりと起こす。

頭が痛い。麻奈は後頭部を抑えながら、きょろきょろと忙しく視線を動かした。見覚えのない場所にいるのを確認して、麻奈は慌てた。此処は一体どこなのだろう。

辺りは薄暗くて、目ぼしい物は何も見当たらない。床に手が触れた。それは、学校特有の冷たいタイルの感触ではなく、ふわふわとしたあまり手ごたえのない物で、麻奈は余計に首を捻った。こんな感じの場所をいつか歩いた事があるような気がしたが、あれは一体どこだったろう。

辺りは薄暗いが、真っ暗ではないのは幸いだった。

少し離れたところに、緑色の光と青く輝く光の玉がぼんやりと浮かんで見える。その僅かな光が麻奈の辺りにまで仄かに届いているのだ。

その時、麻奈は自分の太ももに頭を乗せて、圧し掛かるよつに倒れている青年を見つけて驚いた。

この人は誰だろう。一体いつからこの体制だったのかと考えたが、自分の太ももに触れる青年の髪の感触がくすぐつたくて、その頭を

そつと持ち上げて床に下ろした。

「どこかで見たことがあるような気がするが、何か大事な事が頭から抜け落ちてしまつたかのよつて思い出せない。」

此処がどこのかはよく分らないが、何れにせよ、おかしなところには違ひないようだ。麻奈はふう、とため息を吐いていた。

鏡の外では、ジュリアンが鏡を叩きながら麻奈へ声をかけ続けていた。しかし、その声は虚しく鏡の表面を滑るだけで、それが中へと届く」とはない。

「くわい」

珍しく苛々したジュリアンの声と共に、彼の拳が一際大きい音が立てる。

「荒れるな。見苦しい」

ユーハが鏡から視線を逸らさず、「、冷ややかな声で囁めた。

「見ていろしかないうことだ。俺も、お前も」

ジュリアンは悔しそうに唇を歪めて、鏡を食い入るように見つめた。それしか出来ないことが、彼にはやけにもどかしく感じられた。

一人の男に凝視されているとも知らずに、麻奈は何度目かのため息を吐いた。

こんなにため息ばかり吐いていては、幸せが根こそぎなくなってしまいそうな気がする。この先不幸続きの人生など、考えただけでも憂鬱になってきた。最も、こんな奇妙な場所に連れてこられた事 자체、十分に不幸なことだと思い至つて、またため息を吐いてしまつた。

麻奈は痛む後頭部を摩りながら、とりあえず何が起きたのかを整理することにした。

確かに、階段を下りたところでアノ人に追いつかれた事までは覚えている。問題はその後だ。

「えっと、アノ人と一緒に鏡に倒れこんで。それから

麻奈はようやく、ぼんやりとだが事態が飲み込めてきた。
此処は恐らく鏡の中なのだ。アノ人の体重に負けて、二人でもつれるようにして鏡に倒れこんでしまった事を思い出す。この後頭部は、恐らくその時にぶつけたのだろう。

そう考えて、麻奈はほつと胸を撫で下ろした。鏡が一人を飲み込んでくれなかつたら、麻奈はアノ人に押しつぶされて、割れた鏡で今頃血だらけになつているはずだ。

鏡の中なのだと認めてしまつと、以前通つたものと何となく雰囲気が同じような気がしてくる。あの時よりは足場の不安定さは無いものの、暗闇の中にはぽつりと浮かぶ星のような光は確かに鏡の中にそつくりだつた。ただ、あの時は無数に輝く光があつたのに対し、今はそれが二つだけになつているのはどういうわけだらう。

光が弱いために、闇の色が濃くなつたよう気がして、麻奈は急に

不安になつた。

鏡へ 3（アノ人の場合）（後書き）

いつも読んでいただきましてありがとうございます。
やつと本来のアノ人の姿が出てきました。次回、彼の名前が出てきます。

それでは、また次回お会いしましょう。山石でした。

鏡へ 4（アノ人の場合）

遠くに見える光を呆然と見ながら、麻奈はしばらくその場に立ち尽くしていた。一体どうしたら、廃校に戻る事が出来るのだろうか。そう考えて、麻奈は少し奇妙な気分になつた。さつきまでは、その廃校から出ることばかりを考えていたといふのに。

此處にジュリアンがいてくれたら、と思わずにはいられない。アノ人と一人きりでこんな所に閉じ込められているのは心細くて不安になる。それに、アノ人がまた襲つてこないとも限らないのだ。今のうちに一人で出口を探すべきか迷つたが、この青年を一人で置いていくのも嫌だつた。

その時、床に倒れているアノ人が僅かに身じろぎをした気がして、麻奈は一瞬ぎくりと身を引いた。しかし、苦しそうな声が聞こえてきて、麻奈は彼を刺激しないようにそっと側にしゃがみ込んだ。

床に散らばる灰緑色の髪を避けながら、彼の側に膝を付いて青年の顔を覗き込んだ。顔の半分を覆つている癖のある髪をそつと退けてみると、褐色の神経質そうな細い顔見えた。長い睫と、とがった額。少し垂れた目元には小さな泣きぼくろが一つ並んでいる。

目鼻立ちは整つてているので美青年と言えなくもないのだが、こけた頬と目の下に張り付く隈が、彼を異様なまでに不健康に見せてくる。クリーム色の布を肩から巻きつけたような服を着ていて、額には宝石をあしらつた装飾品を付けている。その服装と褐色の肌を見ると、アノ人は暑い国の出身なのかもしねり。

今彼はどう見ても、ただの優男にしか見えない。本当に彼が恐ろしかつたアノ人なのかと疑いたくなるほどだつた。しかし、その目元に薄つすらと残る涙の跡を見つけて、やはり鏡で見た彼の姿は

見間違いではないのだと麻奈は確信した。

彼は安らかとは言いがたいが、規則正しい呼吸を繰り返している。気を失っているだけのようで、麻奈は少しほっとした。彼は一体、何処の誰なのだろうか。

「う……

突然、ぐぐもつた声が足元から上がり、アノ人が緩慢な動きで起き上がった。麻奈は慌てて、彼の額に当てていた手を素早く引いた。その時、麻奈はあの人覚醒に気を取られていて、遙か遠くで揺れている緑色の光がじわりと近づいて来た事に気が付かなかつた。

あの人は朦朧としながら額に手を置いて、瞬きを何度も繰り返していた。目の焦点が合っていないのか、アノ人は麻奈が側にいることにも気付かずに、だるそうに首を振つている。

「大丈夫ですか」

何度目かの瞬きの後、麻奈は少しだけ距離を置いてアノ人に声をかけた。

突然かけられた声に、アノ人は怯えてびくっと体を引いたが、麻奈と視線が合うや否や、逆に身を乗り出してきた。

「見える。見えるぞ！」

「あ、あの。大丈夫ですか」

彼があまりに顔を近づけて來たので、今度は麻奈が怯えて身を引いた。その手をアノ人が素早く掴み、渾身の力を込めるように強く握りしめた。

「ああ！ 耳も聞こえる。ついに我が身の呪いが解けた」

アノ人は興奮しているのか、麻奈を掴む手に更に力を入れる。両手がきりきりと握り潰される痛みに、麻奈はたまらず悲鳴を上げた。慌てて男の手を振り払おうとしたが、アノ人は麻奈の手を離そうとはせずに、逆にぐいと引き寄せて麻奈の瞳を覗き込むように顔を近づけた。

鼻と鼻が触れそうなほどの距離で、少し垂れ目のターコイズブルーの瞳が瞬いている。彼の恐ろしく長い睫が伏せられるのを見て、麻奈は焦つて顔を引いた。こんな体勢で目を閉じるなんて、思い当たる事は一つしかない。

アノ人は目を閉じたまま、麻奈の後を追うように更に顔を近づけてくる。これ以上顔が近付くのは非常にまずい。

麻奈は咄嗟に顔を背けた。しかし、アノ人は麻奈の唇を通り過ぎると、その肩にぽてつと頭を預けてきた。そのまま彼は大きく息を吸い込むと、満足そうにため息を吐いた。それは、麻奈の香りを確かめるような深呼吸だった。

彼の息が首筋にかかり、麻奈はくすぐったさに身を竦めたくなつたが、今はじつとそれを我慢した。彼の出方が分らない以上、下手に刺激したくはない。

アノ人は目を開くと、麻奈を真っ直ぐに正面から見つめた。

痛いほど強く握られていた手がそつと解かれて、麻奈は慌てて手を引つめる。一体何だったのかと非難を込めた目でアノ人を睨むと、彼の真摯な視線にぶつかった。

「この香り……やつと見付けた。余の体を優しく叩き、撫で擦つてくれたのはそなただつたのか」

「え」

あの人は感極まつたように麻奈をぎゅっと抱きしめると、その背中をとんとんと軽く叩いた。

「ありがとう。そなたのお陰で余がどれだけ救われたか。目も見えず、耳も聞こえない世界を一人で漂うのは、言葉に出来ぬほど孤独であった。そんな中、そなたが劳わりを込めて触ってくれたことが、どんなに余の心を慰めてくれたか！ あれからずっとそなたを探していた。どれほど礼を言つても言い足りぬ」

「まさか　目と耳が、不自由だつたんですか」

「ああ。しかし、今はようやくその呪いも解けた。そなたの顔も声も良く分るぞ」

麻奈の背中に回された手に、ぐつと力が込められた。

「そなたの香りだけを頼りに、ずっと探していたのだ。余はどうしても、もう一度そなたに会いたかった」

熱を含んだようなその言葉を、麻奈はどこか呆然と聞いていた。やはりこの青年がアノ人だつたのだと確信する。それと同時に、麻奈は氣まずい思いを味わっていた。

あの時、麻奈がアノ人を撫でたりしたのは決して優しさからではない。彼に捕まり、そのまま食べられてしまうような気がしたので、必死に気を逸らしたいが為の行動だつたのだ。そんな自分本位の行動を、こんなに喜んでくれていたと知つて、麻奈は心中で彼に謝った。

「お礼なんて」「

麻奈はそんなことを言われるようなことをした覚えはないのだ。麻奈は抱きしめられたまま頑垂れた。この不幸な青年の身の上など、考えたこともなかつた自分がとても恥ずかしい。せめて、今は彼の好きなように、安心できるように支えてあげよう。そう考えて、麻奈も彼の背中にそつと手を回した。彼が落ち着くまで、抱きしめてあげよう。それが、今の麻奈に出来る贖罪だった。

しかし、待てど暮らせば、あの人の抱擁から解放される気配がない。

「あの、そろそろいいでしようか」

「人恋しいのだ。もうじぱらく良いだろ。　そつだ、まだ名前を聞いていなかつたな」

「水上麻奈です」

「ミナカミ？　聞きなれぬ名前だな。余はムスリム国4代田国王、ビシャード・アル・ムスリムだ」

「え、王様ですか」

麻奈は驚きのあまり、両手を突つ張つてビシャードから離れた。ビシャードは不満げな顔で腕を伸ばすと、麻奈を再び抱えなおした。

「やうだ

麻奈は驚きの余り固まつてしまつた。さつきから何か一人称がおかしいと思つていたが、まさか王様だったとは。

あまりに驚きすぎて、ビシャードの為すがままになつてゐる事に麻奈は気が付いていない。これ幸いと、ビシャードは麻奈の首筋に顔を埋めて深く息を吸う。

「ミナカミは良い香りがするな。他の奴等とは違つ。余を打ち据え、水をかけた奴等とは」

正に同じ事を、自分もしようとしたとは言はず、麻奈の氣持ちは罪悪感で更に重たくなつた。

「ところで、此處は何処だ。余は、突然現れた奇妙な姿の男と共に鏡の中に入つたはずだが、此處がそつなのか」

「此處は、多分違うと思ひます」

ビシャードの手を何とか振り払い、麻奈は立ち上がる。

「さつきまでは違つ所に居たんです。でも気が付いたら此處に一人で倒れていて。私も上手く説明できんんですけど」

そう言つて首を傾げたその時、麻奈は自分の影が一つの間にか足元に長く伸びている事に気が付いた。さつきまでほとんど真っ暗で、影など全くなかったはずだ。それなのに、今は薄ぼんやりとした緑色の光に包まれている。

「あれは何だ。いつちへ近づいてくるぞ」

ビシャードの指差す先には、ぎらぎらした緑色の光を撒き散らす

巨大な光があった。それはゆらゆらと揺れながら、一人に向かって近付いて来る。

「何、これ……」

それは熱も無く、音も立てずに一人の回りをゆっくりと浮遊している。光の球は、まるで意思でもあるかのように、じりじりとにじり寄つてくる。麻奈が息を飲んで後ずさると、心なしか光の球のスピードが速まつた気がした。

「走るぞ」

ビシャードが麻奈に耳打ちすると、すぐさま走り出した。麻奈も続いて走り出す。後ろを振り向かなくても、音も無く近寄っていたそれが自分達を追つて加速したのが分かつた。

「早いつ」

麻奈のすぐ前に伸びる影が次第に色濃く短くなつてくる。気が付くと、それは手を伸ばせば触れられる距離まで近づいていた。

「駄目、追いつかれるつ」

「くっ。一体何なのだ此処は」

麻奈は走りながら、巨大な発光体がビシャードの背に引き寄せられるように近づくのを見ていた。そして、彼の背に光の球がすっと触れた次の瞬間、一層眩い光が溢れて目の前が突然真っ白になった。

鏡へ 4（アノ人の場合）（後書き）

読んで下さつてありがとうございます。

アノ人についての反響を頂いて、驚くと同時にとても嬉しかったです！ありがとうございました。

彼はこんな感じですが、どうでしょうか？ご期待に添えたでしょうか？

それでは、また次回お会いしたいと思います。山石でした。

その光のあまりの眩しさに、閉じた目の奥ですら白く光つて見える。麻奈は今、自分が目を開けているのか閉じているのかさえも分からなくなってしまった。

ようやく光が弱まってきたのを感じて、恐る恐る目を開けてみた。目も開けられないような眩しさは収まったが、その代わりに黄色い太陽の光を感じて麻奈は再び目を細めた。

外に居ることに戸惑いを感じながらも、麻奈はどこかでこの奇妙な出来事を受け流していた。此処では奇妙な事が起ることが普通なのだ。いちいち騒ぎ立てるのは疲れるだけだと、今は身を持つて学習したのだ。そう思つて、麻奈は複雑な心地になつた。隣のビシャードを見てみると、彼は眩しそうに目を細めながら、絶句していた。それが正しい反応だ。

目の前には、大きな葉の生い茂る木々が一列規則正しく並べられている。その中央には白い石を切り出して作られた、馬鹿みたいに広い道が続いている。道の両脇には柔らかな芝生が広がっていて、花壇には原色の花が咲き誇つている。そこは恐ろしく広い庭園だった。

城壁でぐるりと囲われているその美しい庭に、麻奈とビシャードはまるで降つて湧いたかのように突然現れてしまったのだった。

白く輝く道の先には、巨大な銀色の宮殿が建つている。横に広がる低い造りになつていて、屋根の形が丸みを帯びている。

太陽の光を跳ね返して輝くそれは、まさにおどぎ話に出でてくるような白亜の城だ。どこかエキゾチックな風貌だったが、幻の様に美しい宮殿をして、麻奈は白昼夢を見ているような錯覚を起こし

ていた。

もしかして夢なのかもしれない。しかし、強い日差しがじりじりと肌を焼く感覚や、むつとする草いきれ。湿度の高い粘つく空気。その全てが妙にリアルに感じられる。

感嘆のため息を吐いてうつとりと富殿を眺める麻奈を尻田ヒロ、ビシャードは暗い瞳で富殿を一瞥する。

「一体、此處はどこなんでしょう」

どうしてこんな事になつたのか、無駄だと思つても考えずにはいられない。半ば投げやりな麻奈の咳きに、ビシャードが静かに答えるくれた。

「此處は　余の富殿だ」

「え」

隣にいるビシャードを仰ぎ見ると、彼は固い表情で富殿を見つめていた。その表情は暗く、何かを必死に耐えているように顔を震わせている。

「やうなんですか？　じゃあ、陛下は帰つて来れたんですね」

喜んでいる様子も見せず、ただ立ちぬくビシャードを不思議に思いながらも、麻奈は弾んだ声をあげた。しかし、ビシャードはいつまでもこの場から動こうとしない。

「あの、帰らないんですか？」

ビシャードはちらりと麻奈を見ると、神経質そうな眉を動かして

頷いた。帰らない、彼はそう言っているのだ。

「どうしてですか！ 折角戻つて来れたのに」

麻奈は声を荒げた。こんなチャンスはもうないかもしないのだ。麻奈やジュリアンが必死に探しても、出口を未だに見つけることが出来ないのに、せつかくの脱出の機会を彼は不意にじょりとしている。麻奈にはそれが我慢できなかつた。

「陛下は知らないかも知れないんですけど、わざわざで私達はある所に閉じ込められていたんです。今帰らなかつたら、もう一度と帰れないかも知れないと」

ビシャードはそれには答えずに、冷えた視線を道の先に注ぐと、踵を返して歩き出した。麻奈は少し迷つたが、結局付いていく事にした。

足早に歩くビシャードを追いかける。少し歩いただけでキャミンールがみるみる湿つてゆくのが分かつた。気温だけではなく、湿度も高いせいでも妙に肌がべたつく。噴き出る汗も気持ち悪かつた。強すぎる口差しが麻奈の肌を焼いているのが分る。その刺激は痛いくらいに強くて、暑さのせいでも麻奈の顔はたちまち真つ赤になつてしまつた。最早、吸い込む空氣まで熱く感じて、かなり息苦しい。

「熱い所なんですね。陛下の国は

「ああ」

浮かない顔をしながら歩くビシャードを、麻奈は不思議に思った。彼の国に帰ってきたのに、嬉しそうな様子は微塵もない。むしろ鬱々とした様子の彼は、酷く焦りながら宮殿から遠ざかれていく

る。

富殿を背にして、黄色い日差しを反射する真っ白な道を進むと、静かな水面を湛えた池が見えてきた。

水蓮に似た白い花が浮ぶ大きな池を見ていると、少し涼しくなつたようを感じられる。

ビシャードは、それさえも目に入らないといつよつに白い道を逸れて、短く刈られた芝生の絨毯を横切り始めた。綺麗に手入れされている植え込みに足を踏み入れ、がさがさと搔き分け進む。

「ど、どこに行くんですか」

綺麗にカットされている植え込みを荒らしているようで、麻奈はつい咎めるような口調になつていた。

「此処から出るんだ。じつちに抜け道がある」

「でも、帰らないと心配している人達がいるんじゃないですか」

「心配など……。しつ！ 誰か来る」

ビシャードは麻奈に向かつて手招きをすると、素早く植え込みの影に身を潜めた。それに習つて麻奈も彼の隣に隠れたが、何故ビシャードがこそそするのかが分らずに首を捻る。

彼はこの富殿の王なのだ。城の主が人目を避けるのは、どう考へても変だつた。恐らく、それは彼が帰りたがらない理由が関係しているのだろう。

そのとき、道の向こうから蹄の音が聞こえてきた。一人は息を潜めて様子を窺う。

植え込みの隙間から覗いてみると、ゆつたりと馬を歩かせる親子を先頭に、馬に乗る一団がやって来るのが見えた。

鹿毛の大きな馬に毅然と乗る父親の後ろを、まだ頼りない手綱捌きで栗毛色の馬を操る少年がついて行く。遠目に、親子は少し下がり氣味の目元や、うねるような癖の強い髪がとてもよく似ていた。少年はまだほんの子供で、あどけない顔に真剣な表情を浮かべて、馬を操る手に力を込めている。

「父上、待つてください」

少年の馬は落ち着かない様子で頭を忙しなく廻らせては、ふらふらと道草をしながら進んでいる。

「まだ体が固い、力を抜きなさい。お前の緊張が馬に伝わってしまつや」

父親は息子を振り返って鋭く指摘した。しかし、田じりには皺が寄っていて、その表情は穏やかで血運に満ちている。

「はい。父上」

少年は深く息を吸うと、肩の力を抜いて姿勢を正した。

「そうだ、初めてにしては上出来だ。もっと上手くなったら、今度は狩りに連れて行つてやろう」

「本当にですかー！ もうとですよ」

ふつくらとした頬を上気させて、少年は嬉しそうに顔を綻ばす。

「ああ。余も時間を作つて、またお前の練習を見てやるわ」

「ありがとうございます！一生懸命頑張ります」

父親は満足そうに口ひげを撫でながら少年を見ていた。

「お前はいずれ、この国を継がねばならぬ身だ。何事にも力を入れ、良く学びなさい」

「はい。父上！」

父親は一層笑みを強くすると、少年の馬が自分の横まで来るのを待っていた。そして、二人並んで麻奈達の前を通り過ぎて行つた。その後ろを、少し離れて数人の兵士達が頬を緩めながら通り過ぎて行く。みんな一様に、あの親子の様子を見るのが嬉しくて堪らないとこうのような表情をしていた。

彼らの様子を草の陰で見ていた麻奈は、仲の良い親子の様子を微笑ましく思つていた。馬を一生懸命制御しようとする、少年の真剣な顔が可愛らしかつた。それを見る父親の顔も緩んでいたのがまた一層微笑ましい。

しかし気になるのは、あの親子の姿だ。灰緑色のうねるような癖毛、それに目じりの下がり具合。それは、隣に座り込んでいるビシヤードに良く似ているような気がする。おまけに、あの父親は「國を継がなければならない身」だと少年に言つていた。それはつまり、あの父親が今の王様ということになる。

この国の王はビシヤードのはずだ。どちらかが嘘を吐いているといふことだらうか。

麻奈はビシャードに声をかけようとして、目を丸くしてしまった。ビシャードは顔を苦しそうに歪めながら、親子が去つていった先を見て、ギリギリと爪を噛んでいた。その指先から、じわりと赤いものが滲んで見える。

「陛下、血が……」

暗い瞳で爪を噛むビシャードの指先からは、たらたらと血が滴っている。かなり深くまで噛んでいるのだろう。しかし、それでも彼は爪を噛むのを止めなかつた。もしかしたら、痛みを感じていないのかもしない。それほど、彼は暗い瞳をしながら親子の後ろ姿を追つていた。

「駄目ですよ」

麻奈は思わずビシャードの手を口元から引き剥がした。その指先を見ると、半分以上も爪が噛み切られていて、爪が剥がされた所から、ピンク色の肉が見えていた。

「ああ、痛そう」

麻奈は何か血を拭うものが無いかとポケットを探つた。その間にも、ビシャードの指からは血が流れ出し、白い石畳に赤い小さな斑点を作つた。

どうしてこんなに、と言いかけて麻奈は顔を上げたが、ビシャードの顔を見て言葉に詰まつてしまつた。

顔をくしゃりと歪めて、ビシャードの視線は未だ親子の背中を追つている。その口元は、小刻みに震えていて、彼が今にも泣き出しちまうのではないかと麻奈は不安になつた。

「……とつあえず、止血をしましょ！」

麻奈はパンツに入っていたポケットティッシュをビシャードの指に押し当てる。上から握り込んで強く圧迫した。

そこまでされて、ビシャードはようやく麻奈の存在を思い出したらしく。何とも屈心地悪そうに手当でされる自分の手元を眺めた。

「 もう、いい

「じつとこしてやれ。もう少し圧迫してないと血が止まりませんよ」

「いい

「でも

「余のことなど放つて置けばいい！」

ビシャードは先程までの泣き出しそうな顔を引っ込めて、厳しい顔で麻奈の手を振り払った。

麻奈は氣を悪くして、抗議の目を向けた。ビシャードは手を庇いながらふいと横を向いてしまった。そんな彼の行動は、まるで子供のようだ。さっきまでは人恋しいと言つて麻奈を離さなかつたのに、どんな心境の変化なのか、今度は途端に邪険にする。麻奈は仕方なく、彼の手当を諦めた。

この気性の浮き沈みは、もしかしなくてもさつきの親子が関係しているのだろう。しかし、今は麻奈もそれを聞く氣にはなれなかつた。これ以上ビシャードの機嫌が悪くなつては困るのだ。

「これから、どうするんですか？ 何処か行く当てでもあるんです

か

「並では無い。無いが、此処から直ぐにでも離れたい」

ビシヤードは植え込みから立ち上ると、足早に歩き始めた。何かに急きたてられるように歩く姿に麻奈は奇妙な思いを抱いたが、置いて行かれるのはまずいと彼を追いかけた。

「待つてください、陛下。どうしてそんなに此処から出たいんですか？　陛下の宮殿なんでしょう？」

ビシヤードは振り向かない。

麻奈がため息を吐きながらビシヤードを追い駆けていると、田の前の景色が奇妙に歪んで見えたような気がした。氣のせいかと思って田を擦つてみても、それは依然変わらない。むしろ、薄い紗膜がかかつたように田の前の景色が霞みがかつてきて、どんどん現実味が薄れていいくように見える。

麻奈は田を見開いて回りを見回す。自分を中心にして、辺りの景色がどんどん希薄になっていく。麻奈は焦った。また奇妙な事が起きたのだろうか。

いつも読んでくださりありがとうございます！

爪を噛む原因は、精神的に不安定なストレスから来ることが多いようです。色々癖のあるビショードですが、こんな悪癖も持ち合っていたとは……。

それでは、また次回。山口でした。

辺りの景色が、まるで砂が崩れ落ちるよつとサラサラと音を立て流れてゆく。その光景はとても幻想的だ。現実とは思えないほどに。

麻奈はもう何が何だか分らずに、ただ目を丸くしてこの奇妙な光景を見守っていた。よく見ると崩れ落ちる景色の後ろから、新しい風景が顔を出している。それは、世界の薄皮が一枚剥がれ落ち、そこから全く違う世界が覗いているようになに見えた。

麻奈の少し前を歩いていたビショードも、足を止めて警戒するようになりを見ていた。

綺麗に手入れされた庭園は、瞬く間にその姿を変えてしまい、気が付くと二人は丸い形の大きな広場に立っていた。

何百人、もしかしたら何千人という人々が広場いっぱいに集まり、静かにそこに座っている。大勢の人々がすし詰め状態になっているせいか、かなり広い空間にも拘らず、この場所には広々とした印象がまるで感じられない。おまけに、全員微動だにせずに膝を付いて前を向いている。その姿はとても不気味なもののように麻奈には見えた。

辺りは水を打った様に静かだった。これだけ沢山の人々が集まっているのに、この場所を支配しているのはある種の静寂だけだ。

麻奈は慌ててその場にしゃがみ込む。皆が正座している所で、ぽつりと立つたままでは非常に目立つていいような気がしたのだ。幸い誰にも咎められる事も無く、人々は前を見たまま動かない。

麻奈はビショードを見た。彼は人々と同じように前を向いたままその場に立ち尽くしている。その背中は途方も無く目立つ、同じぐらいい孤独に見えた。

声を掛けようとしたが、この静かな寂寥を破る雰囲気は麻奈には無い。

その代わりに、麻奈はそろそろと顔を上げて辺りを観察してみた。この場にいる人々は、同じように白い服を着て悲しそうな顔をしている。その姿は、まるで祈りを捧げているかのようだ。

この特殊な空気は、何かに似ている気がした。それはもしかして

「お葬式」

作法は違えど、その独特的雰囲気は少なからず覚えのあるものだつた。

麻奈は子供の頃に参列した祖父の式を思い出した。とても悲しくて、静けさの中に皆のすり泣く声が良く響いたように記憶している。そういうば、つい何年か前にも葬式に参列したような気がする。あれはいつの事だったか。

「これは、死者を送る儀式だ」

麻奈のぽつりと漏らした呟きに、ビシャードがぼそぼそと呟いた。やつぱりと思いながら、首を捻る。ただの葬式にしては、どうも参列者が多すぎる。

「誰のですか」

抑えた声で聞く。それでも、この静かな空間では麻奈の声は響いてしまった。

彼はそれには答えず、「ここに深い皺を寄せながら顔と同じ場所へと視線を送る。

そこには白い花で飾られた御輿のような物があり、それが静かに

進み始めた。広場の人々が、一斉に立ち上がった。誰もがそれに親愛と悲しみの視線を送り、嗚咽を押し殺している。

あれが恐らく棺なのだろう。

棺の隣には、さつき馬に乗っていた親子が並んで歩いているのが見えた。馬上で幸せそうに笑っていた親子は見る影も無く、特に父親の憔悴しきつた顔には目も当てられない有様だ。彼らの後ろを追いかけるように、一人の幼い男の子たちが歩いていた。二人とも癖のある髪をしているので、一日で少年の兄弟だと分かる。

棺が人々を搔き分けて進み、麻奈のすぐ傍を通り過ぎる。その時、目元を赤く腫らしたさつきの少年の小さな咳き声が聞こえた。

「母上……」

麻奈は胸が痛くなつた。亡くなつたのは少年の母親なのだ。

彼の後を、まだ年端も行かない幼い子供達がちょこちょこと歩く。彼らは何が起こったのか分からぬのだろう。不思議そうな顔をしながら父親と兄に置いていかれないよう一生懸命付いて行く。こんなに小さな子供達を残して逝くなんて、母親もさぞかし心残りだつただろう。

なんて悲しい光景だらうと麻奈は思った。鼻の奥がつんと痛んで、麻奈は急いで鼻を啜つた。

その時、麻奈は涙で滲む視界の端で、再び辺りの景色が流れ落ちていくのを捉えた。たちまち景色が移り変わってゆく。

このおかしな現象は一体何なのだろうか。麻奈は目じりの涙を拭つてから、この奇妙な光景を見極めようと目を凝らした。

気がつくと、二人は静かな部屋の中にいた。

石造りの薄暗い部屋で、机の上には小さなランプが置かれている。

ランプの中には、油を染み込ませた芯が立ててあり、それが橙色の炎を上げて静かに燃えていた。

風通しも悪く蒸し暑い所だ。

「何、これ」

麻奈が見ている先には、内側から木を打ちつけて開かなくしてある窓があった。

唯一窓として機能しているのは、一段高い所にある明り取りの小さな窓だけで、その他の窓は全て木の板が打ち付けてある。この部屋を見て、ビショードが静かに息を呑んだ。麻奈はそれには気づかず、部屋の中を歩き回っていた。

「なんだか、殺風景だけど誰かの部屋みたいですね」

麻奈は寝台の上に積み重ねてある衣服を手に取った。肩から巻き付けるだけのこの国の服は、男物なのか女物なのか全く判断出来ない。

そのとき、突然扉が勢い良く開いて、中学生ぐらいの少年がふらつく足取りで部屋に入つて來た。俯いたその顔は影になつていて麻奈からはよく見えなかつたが、うねるような灰緑色の髪をしたその少年を、どこかで見たことがあるような気がした。

「あ、えっと 勝手に入つてすみません」

麻奈がしどろもどろで頭を下げた。しかし、少年は一人には田もくれずに部屋を横切ると、明り取りの小さな窓を閉めた。部屋はさらに暗くなり、対流しなくなつた生暖かい空気が急に激んでくるような気がした。

「あの、何で無視?」

麻奈は不思議そうな顔で少年の目の前にひらひらと手をかざした。

「我々が見えていないかもしねない」

ビシャードは少年を瞬きもせずに見つめている。その声は何故か緊張しているように感じられた。

少年は懐に手を突っ込むと、蠅燭と鞘に納まつたナイフを取り出した。机の上のランプの炎で蠅燭に明かりを灯すと、ドサリと床に足を投げ出して座った。

寝台にもたれかかって苦しげに長い息を吐き出すと、蠅を床に垂らして蠅燭をそこに固定した。さつき取り出した小ぶりのナイフを鞘から出して、蠅燭の隣に添える。

ゆらゆらと揺れる頼りない明かりに照らし出された少年の頬に、汗が一粒光っている。

彼は恐る恐る左腕を持ち上げて肩口から袖部分を掴むと、それを一気に引き裂いた。

「あ」

麻奈が驚きの声を上げる。

ゆつたりとした服の影に隠れて見えなかつた少年の腕には、柄の短い矢が刺さっていた。毒でも塗つてあつたのか、傷の周りが紫色に変色している。

「酷い」

麻奈は無意識に口元に手を当てて呟いた。

少年は破り取つた服の袖を細く食いちぎり、矢傷よりも少し上の

部分を片手と口を使って器用に縛つた。残りの布は丸めて口の中に押し込み、矢羽を掴んで一度鼻から大きく息を吐き出した。彼はしばらく目を閉じていたが、決心したように息を吸い込むと、矢羽を掴んで引っ張った。

「ぐうっ！」

苦しげな声が少年の口から漏れた。

麻奈は堪らず、ギュッと目を瞑つた。とても見ていられない。

少年は目に涙を浮かべながら矢を引き抜いてゆく。少年の力では、矢尻を一気に引き抜くことは出来ないようで、矢尻がゆっくりと姿を現してくる。その間も、少年の呻き声は途切れることなく続いている。麻奈は耳も塞ぎたくなった。

少しの間を置いて、床に何かが落ちる硬い音を聞いて、麻奈はそろそろと目を開いた。

少年は自分の傷口に口を付けて、何度も何度もその血を吐き出していた。やはり毒が塗つてあつたらしい。

まだ幼さを残した顔に苦痛の色をにじませている様子は、とても苦しそうだ。麻奈はまた目を閉じて、横に居るビシャードに縋り付いた。

少年は口元を一度拭うと、今度はナイフを蠅燭の火にかざした。ジジジ……というナイフが熱せられる音だけが聞こえる。

刺さった矢は、矢尻が小さかつたおかげで傷自体は深くないようだ。しかし、少年の腕からはとめどなく血が流れてくる。

少年は肩を大きく上下させながら荒い息を繰り返した。今度は、震える手で熱したナイフを傷口に宛がい、肉を焼いて止血をした。幾分荒い方法だが、少年の行動に迷いは無かった。

少年は声にならない悲鳴を上げる。

その間、麻奈はひたすら目をきつく瞑っていた。耳に届いてくるのは、少年の荒い息遣いと時折漏れるすすり泣き、そして肉の焼ける臭いが鼻の奥を刺激していた。麻奈にはそれが恐ろしくて、ビシヤードの服に必死に顔を埋めていた。

いつも読んでいたおかげであります。

毒を口で吸い出すという行為は、いろいろな説がありますが感染を誘発する可能性があるそうです。

患部を縛り、すぐに病院に行くのが一番良いのです。

それでは、また。山口でした。

それからどの位経つただろうか。だんだん少年の呻き声が小さくなり、やがてそれも聞こえなくなつた頃、麻奈はそつと目を開けた。少年はぐつたりした様子で床に横たわつていた。

麻奈は痛ましい気持ちで少年を見つめる。まだあどけない少年の顔には明らかに憔悴の色が浮かんでいる。こんなに苦しい処置をこんな所で一人でするなんて、保護者は一体何をしているのか。

麻奈の胸には怒りに似た感情が湧いてきた。

矢が刺さつたということは、それを射た人間がいるということだ。この少年は誰かに狙われたという事になるのだろうか。

そう考えるだけで、麻奈の怒りはまた頂点に達しそうになる。しかし、横にいるビシャードが相変わらず瞬き一つせずに少年を見ているのが気にかかつた。

その眼差しは厳しく、辛い表情を浮かべている。何故そんなにも険しい顔をしているのだろう。麻奈はビシャードにそれを聞く事も出来ず、ただこの二人を交互に見ていた。

少年はいつの間にか眠つていた。まだ腕が痛むのか、時折眉間に皺を寄せるものの、大分穏やかな寝息を立てている。少年の長い前髪がはらりと落ちて、垂れた目元と目尻に二つ並んだほくろが現れた。少年の顔には少し幼さが残つているが、それはビシャードにそつくりだった。

「陛下、貴方はこの子を知つてゐるんじゃないですか」

麻奈の質問に、ビシャードはゆっくり一度瞬きをして、観念したようにため息を吐き出した。

「ああ。よく知っている。これは 昔の余だ」

そういうビシャードが左の袖を捲くつて見せると、そこには少年と同じ箇所に古いケロイド状の傷があった。

「ミナカミには言えずにいたが、今まで見た光景は全て余の幼い頃のものだ」

「まさか。あ でも、それならこの少年が陛下に似ているのも頷けます」

麻奈はようやく合点がいった。似ているはずだ、彼らは全員ビシャード本人だつたのだから。

麻奈が妙に納得していると、辺りの景色がじんわりと滲み出した。またか、と思う間もなく、まるで演劇の場面転換のように、あつという間に場所が変わってしまった。今度は何を見せられるのだろうか。

次に顔を出したのは、乳白色の巨大な柱が立ち並ぶ、静かな廊下だつた。

胴回りが一抱えほどもある、大きな柱の陰に身を寄せる三人の男たちが見える。その顔は麻奈たちからは見えないが、彼らはひそひそと額をつき合わせて、何事か話しこんでいた。

本人たちは内緒話をしているつもりだろうが、人通りのない廊下に男たちの声は朗々と響いていた。

彼らが何を話しているのか、全て筒抜けだ。

「ビシャード殿下がまたお倒れになつたそうだ」

「まさか　また殿下を狙う者が

「今度は毒矢だそうだ。幸いにも命に別状はないらしいが」

「幸いにも、か？」

「しつゝ、滅多なことを言つものではない」

「だが、ビシャード殿下は病弱過ぎる。月の半分を床で過ごすなどと諸国に知れたらどうなる事か。殿下が次の王になつたら、隣国はこそつて攻めて来るかも知れない」

「まさか」

「いや、あり得るまい。やはりビシャード殿下は王の器ではないのだ」

「確かに、アナン殿下の方が王に相応しいと私は常々思つていたよ
「誰もが思つていたわ。だからビシャード殿下の命が狙われているのだろう。彼がいては、アナン殿下に王位は決して回つてこないんだ」

「全く、どこの誰が暗殺を企てているのかは分からんが、やるのならばもつと確実に事を成して欲しいものだ」

「ははは、違ひない」

男たちの軽快な笑い声を聞いて、麻奈は拳を握り締めた。ビシャードの命を何だと思っているのだ。

怒りのあまり、男たちに石でも投げてやろうと思つたその時、す

つビシャードが麻奈の前を横切った。彼はそのまま、つかつかと先を歩いていく。

「 」 じつはミナカミには聞かせたくなかつたのだが 「

とても悲しい顔だつた。

麻奈が首を横に振るのを見て、ビシャードは僅かに表情を緩めた。まだ腹の立つ話を響かせている男たちの側を、二人は無言で通り過ぎる。一人の足音がコツコツと鳴つているにもかかわらず、男たちは全くこちらに注意を払うことはない。やはり彼らにも麻奈とビシャードは見えていないようだつた。

男たちとすれ違うその一瞬、ビシャードが刺すよつた冷たい視線を彼らに送つたことに麻奈は気が付いていた。

「 余は体が弱かつたのだ。見ての通り体つきも貧弱で、剣術も弟のアナンに大分劣つていた。それでも、第一王子にふさわしくなれるように、必死に努力はしたのだがな 」

ビシャードは自分の薄い胸板に手を置いた。横から見ると、彼は氣の毒になるほど薄く見える。ゆとりのある服を着ていてこうなつだから、実際はもっと瘦せているのかも知れない。

「 彼らは陛下の矢傷の話をしていましたね。それって、さつき見た事件の事ですか？ あれは暗殺されかけたつていう事なんですか？」

「 そうだ 」

「 どうしてそんな酷い事 」

ビシャードは麻奈から視線を外すと、未だ柱の陰で団子になつて

話し込んでいる男たちに目を向けた。

「奴らの話を聞いていただろう。ミナカリの国ではどうか知らぬが、この国では第一王子が必ず國を継ぐ。例外はない。歴代の王は絶対に男子を後継者として生ませなければならないのだ。皮肉なことだ……。血筋を優先したために、皆が王に相応しいと思つてゐる安娜は、王位に付く事が出来ないのだ」

ビシヤードは自嘲する。王様であるはずなのに、自分を卑下する彼は、見ていてとても痛々しい。

「余が即位すれば、次の第一王位繼承者は余の子供に移る。貧弱な余の血を受け継ぐ子供にな。さて、ここで問題だ。余ではなく、アナを王にするにはどうすればよこと思ひつへ?」

少し考えてから、はつとした。ビシヤードはその通りばかりに頷く。

「やつ、とても簡単なことだ。お荷物の第一王子を殺してしまえば、皆が期待を寄せる第一王子に目が当たる」

「そんな

「だが、余は大人しく殺されてやるつもりは毛頭なかつたよ。この時、余は誓つたのだ。どんな事をしても王座に就き、余を排除しようとした者には然るべき報復をしようとしたとえ、それが誰であつても」

そう呟いてビシヤードが足を止めた。男たちから少し離れた柱の陰に、膝を抱えてうずくまる少年がいた。癖の強い灰緑色の髪、垂

れた目元。それは、さきほどの若きビシャードだった。その頬はげつそりと痩せこけ、目の下には既に隈が出来てている。しかし、怒りに瞳を輝かせて静かに涙を流している姿は、鬼気迫るものを感じさせた。

頬を流れる涙は、触れば肌を焼く憎悪の涙だ。

「今の話、全部聞いていたんですね」

「ああ。だが、今ではあの者達には感謝している。それまでは襲撃に怯え、逃げることしかしなかつた余が、反撃する氣になつたのだからな」

ぞつとするほど冷たい声を聞いて、麻奈は彼の心の中の暗い闇を覗き込んだ気がした。

彼は今、王座に就いている。宣言どおり、手段を選ばずに玉座を勝ち取り、彼を排除しようとした者達に片っ端から報復していくたのだろうか。

田の前の青年は、見た目通りの優男ではないのかもしれない。

麻奈は握り締めていた拳に、嫌な汗が滲んでくるのを感じていた。ビシャードと此処で一人きりでいることが途端に恐ろしくなつてくる。

「陛下、もう行きましょう。此処から出る道を探して、一度廃校に戻りましょう」「

自分でも驚くほど擦れた声だった。なにしろ、彼の過去が目の前で再現されているのだ。もしかしたら、ビシャードが柱の影で笑いあつていた男達に報復する場面が今にも始まるかもしない。

せわしなく視線をさ迷わせる麻奈を見て、ビシャードは一瞬全ての感情を押し殺したような冷えた眼差しをした後、そうだな。と頷

いた。

いつも読んでくださいてありがとうございます。
相変わらず場面転換の多い話ですが、どうぞこれからもお付き合いください。

それでは、また次回。

一人は乳白色の柱の列を横切つて、巨大で陰鬱な廊下を歩いていた。その途中、何人かの人たちとすれ違つたが、誰も麻奈とビショードに注意を払う者はいなかつた。

「とりあえず、外へ出るにはどっちに行けば良いですか」

「そうだな、右の廊下へ。その方が正面から出るよりも近道だ」

一人が歩きかけたその途端、周りの存在がまたしてもあいまいに輪郭を溶かしていく。ゆらゆらと揺らいで見える景色がどこかへと流れ去り、麻奈たちはその渦の中にただただ立ち尽くしていた。

また場面が変わると、と半ば諦めのような気持ちで麻奈は辺りの様子を見つめていた。

まるで風に吹き飛ばされる砂のように、少しずつ移ろう風景。その後ろから新しい景色が顔を出す様子は、何度見ても幻想的だと麻奈は思う。

しかし、この不可思議で美しい景色とは裏腹に、麻奈はなぜか胸騒ぎがしていた。だんだんとビショードの過去に何が起きたのか、核心へ迫ってきている気がするのだ。

どうしてビショードの過去を見せられているのかは分からぬが、この現象には何者かの悪意すら感じじる。ビショードの触れられたくない過去をわざわざ選んでこるより思えるのだ。

すっかり景色が入れ替わると、そこは夕闇が忍び寄る茜色の小さな部屋になっていた。どこからか、据えた様な臭いが漂ってきて、麻奈は顔をしかめて小さく鼻を鳴らした。

大きな人の背丈ほどもある窓は開け放たれていて、見覚えのある男がその前に立っているのが見えた。少し影になっていたが、窓の前に立つのは、ビシャードの父親の姿だった。

しかし、これがあの堂々としていた彼の父だろうか。薄くなつた髪は白くなり、顔の皮膚はたるんでくすんだ色をしている。刻まれた深い皺と落ち窪んだ目は、彼に十分な老いを感じさせた。何より、肩を丸めて佇む様子は、ただの寂しい老人のようだ。

彼はじっと動かさず、足元に置かれている巨大な白木で出来た箱を見つめていた。ふと、何気ない動きで腰から下げる湾曲した刀に手をかける。剣と鞘のこすれるザラザラという音がして、彼はそれをゆっくりと引き抜いた。

麻奈は息をのんだ。夕日を受けて鈍く光るそれは、禍々しい茜色に染まつて見えた。

ビシャードの父は足元に置かれている箱に顔を寄せると、そつと手を置いた。まるで慈しむように表面を軽く撫でている。しかし、その顔は強張つたままだった。

それは奇妙な箱だつた。大きくて細長く、蓋には小さな覗き穴のような物がある。麻奈の位置からは中を覗くことは叶わなかつたが、隣にいるビシャードが緊張したように震えたのを見て、楽しい物が入つてゐるわけではないのだと察した。

中身は気になるが、それよりもびりびりと痛いほどに張り詰めているビシャードの方が気にかかる。

今の彼は、声をかけるのさえも躊躇つてしまつ。

そこへ、バタンと大きな音を立てて、一人の青年が飛び込んできた。

「父上、叔父上がご帰還されたところのは本当ですか？」

廊下を駆けてきたのだろう。息を弾ませて、嬉しそうに頬を上気させているのは過去のビシヤードだった。部屋に飛び込んできた彼は、顔色が悪く不健康そうではあるけれど、背の高い青年に成長していた。

今のビシヤードとあまり変わりのないその姿は、恐らくこれがごく最近の出来事であるのだと推測出来る。

「このたびの勝ち戦のお祝いに向つたのですが 叔父上はビリ^{レバー}」

部屋に父親しかいないことビシヤードが戸惑つた様子を見せていると、王は剣を握つたまま、駆け込んできた息子をちらりと振り返つて立ち上がつた。そして、無言で足元の箱の蓋をスライドさせて顎で示した。覗いてみる、といつゝことらしい。

箱の蓋が僅かに開いた途端、中からザアッという音がして、大量の白い粉が床に零れ落ちた。麻奈はその隙間から、白い粉に埋もれている何かがちらりと見えた気がした。目を凝らしてそれが何なのが確かめようとしたその時、隣にいるビシヤードの手が伸びてきて麻奈の目を片手で覆つた。それは酷く冷たい手だった。

「陛下？」

据えた臭いが強くなつた気がした。

「見ないほうがいい

その言葉で、麻奈は箱の中に何が入つているのかがやつと分つた。

話の流れからして、それは恐らく

「叔父上の亡骸だ」

麻奈の視界を柔らかく塞ぎながら話すビシャードの声は、少し震えていた。

箱の中に大量に入っていた白い粉末は、遺体の腐敗を防ぐ為の塩だつたのだ。

麻奈は、自分の目に張り付いている優しい手に、自らの手を重ねた。ひんやりと冷たい彼の手を目元から外して、そのまま指先をちよんと握る。ビシャードは一瞬驚いたような顔をして麻奈を見下ろしている。麻奈はその瞳に軽く頷いて、目の前の出来事を一緒に見守ろうと思つた。

過去のビシャードは、目を見開いて叔父の亡骸を見つめていた。驚いた顔で固まるその顔は、人形のように生気が感じられない。

王は、とても緩慢な動きで剣先を棺に向けていった。

「理解したがビシャード。ジョミールは、そこだ」

棺を覗く過去のビシャードの脣が震えた。隈に縁取られたその瞳から、涙が盛り上がり溢れ出す。

「今度の戦は、死傷者はほとんど出なかつたと報告がありました。それなのに、なぜ叔父上が」

叔父が亡くなつた事を否定して欲しくて、ビシャードは縋るような視線を王に向けたが、彼は手にしている剣を弄んで視線を逸らすばかりだった。

悲しみに濡れたビシャードの瞳が、急に大きく見開かれた。はつ

としたその表情は、何かに気づいたように見える。

「父上、貴方は此処で何をしていましたか？ 死者に労いの言葉をかけるのに、そのような剣は必要ないはず」

「 労うだと？」

「」の時初めて王の顔に表情が浮かんだ。

「余に奴を労えといつのか！ 」の裏切り者の弟につ

今まで能面のように無表情な顔をしていた王の頬に赤みが差した。

「！」の男が死んだのは当然の報いだ。余が労う必要など全くないつ

興奮して口から泡を飛ばしながら怒鳴る王の目が、爛々と薄闇に輝いた。

「できるものならば、余のこの手で殺してやりたかった

恥々しそうに塙の中で眠る男を見下す。

「首だけにして帰還せんはずが、手違いで五体満足で帰つてくるとは

ぞつとする声色で、王は棺桶の中の遺体の首元を凝視している。

麻奈は体に震えが走った。彼が手にした剣で何をしようとしていたのか想像できてしまったのだ。そんなことがまかり通る国。これがビシヤードの世界なのだと、麻奈はこの時呆然と理解した。

「父上、まさか 戦に紛れて叔父上を打つよう命を出したのですかつ」

王は動かない。無言は肯定だった。
ビシヤードの顔色が変わる。

「なぜ」

ビシヤードは震えていた。怒りと悲しみが混ざり合って、内側から抑えきれない感情が噴出していくようだった。

「なぜ？ それは余が聞きたいものだ。ビシして一人は余を裏切ったのか？」

「二人？」

「そう。お前の母と、ジョンミールだ。ちょうど良い機会だ。お前にも関係のある話なのだから、聞かせてやる」

いつもと様子の違う父親を睨みながら、ビシヤードは話の先を待つた。怒りを何とか体の中へと押し止め、血走った王の目をまっすぐに見つめる。

なぜかは分らないが、この話は聞かねばならないと彼は思った。叔父の死を追及するのはその後だ、と。

「17年前、スジヤナは病で死ぬ直前に、余に一つの秘密を告白した。今にしてみると、聞かなければ良かつたといつも想つ」

ゴクリ。鳴ったのは誰の喉だったのだろう。

「お前の母は病に倒れ、自分にはもう僅かな時間さえも残されていないと知っていた。そして床に臥せながら、余に話さなければならぬ事があると言つたのだ。掠れた声で、もつと動かぬはずの体を起こし、額を床に付けるほど深く頭を下げる」

父親は軽く息を吐いた。

「スジヤナは言つたよ。私は許されない罪を犯しました。ビシャードの父親は貴方ではありません。と……」

誰も動けなかつた。王の声だけが紅い夕日の差し込む中、静かに響いていた。

「余は初めは信じなかつた。お前は余によく似ていた。その姿も、才も。しかし、スジヤナは首を振つた」

王はその時のことを見出していくのか、遠い目をしていく。

「彼女は易を立てた。その結果、お前は余の子供ではないと出たといふ。もう察しあは付くだろ？　お前の父親は、ジョミールだ」

王は足元の弟をじっと見つめた。その顔は、いつそ穏やかとも言える表情だったが、剣を握る彼の手は小刻みに震えていた。

「なぜスジヤナはこの事を余に告げたのだろうな。自分の子供ではなくても、今までと変わりなくビシャードを育ててくれるはずだと、余に期待したのだろうか　それとも、罪を負いきれなくなつて、許しが欲しかつただけなのか」

王は両手を片手で覆つた。

「だが、余はそのような心の広い男ではないのだ。許さない。許せない。17年経った今でさえもつ」

「父上」

「この世をあえなければ、お前が余の子供ではない事は永遠に気づかなかつただろう。お前は余に生き写しだつた。あのときまで、優秀だつたお前は余の血縁の息子だつた。しかし、血が繋がつていないと分つた瞬間、お前を酷く憎らしく思った」

王はビシャードを睨みつけるように見つめると、剣先を突きつけた。

「二人の罪の象徴であるお前も許すことは出来ない。あの時、余は愛しい妻と最愛の息子、最も信頼する弟を同時に失つたのだ」

涙を流す王の瞳は、もうビシャードを見てはいなかつた。ビシャードに突きつけられた剣先がぶるぶると震える。

「それからは、お前も知つていろだらう。余はジヨミールを遠ざけた。不義理を理由に処刑する事は出来なかつたのだ。それをしてしまえば、余は妻を寝取られた王という烙印を押されるのだからな。奴を国の果ての警備にあて、顔を見ることも無ければこの怒りもいつかは収まるだらうと思つていた。しかし、心の奥ではやり場のない怒りはいつまで経つても燃り続けた」

「それで、それで叔父上を殺したのですか」

王は口角を片方だけ持ち上げた。

「そうだ」

「どうして。17年間耐えたではありませんか。なぜ今になつてこんな事を」

王はふん、と鼻を鳴らした。

「IJの男が、今度の戦を終えたら何をしようとしていたか知つてゐるか？妻を娶ろうとしていたのだ。余から妻を奪つておいて、自分だけ幸せになろうだなんて。許せぬ。余と同じように、この男は孤独に打ちひしがれていなければならないのに。だから余は、密かにジョミニールを打つよう勅命を出したのだ」

王は突然ふつと力を抜いて笑い出した。

「長かつた。あと一つ、事を終えればそれで全ての憂いが片付く」

ゴクリ。今度は自分の喉が大きく鳴ったのを、麻奈ははつきりと聞いた。それと同時に、隣に立つビシャードの息遣いが、途端に早くなるのを感じた。

ビショードの母が立てる易ですが、実は非常に曖昧なものですが、
かじく当たるも八卦当たらぬも八卦……。しかし、この国では易を
盲目的に信じています。真相は闇の中です。
DNA鑑定でもすれば分りそうですが、そういう技術はこの国で
はありません。少しだけ補足でした。
それでは、また次回。

王はよりじと体を傾けて、床を滑るより移動した。その姿はまるで酒に酔っているようだ。その充血した瞳は、もしかしたら本当に酔っているかもしない。

彼は、実に無造作にビショードへ近づいていった。

「余の血を継がない第一王子を、こつまでもまほまほおけない。なあ、ビショード。お前でもやう思ひださない？」

ビショード王が近づいてきた分だけ下がって、お互いの距離を開ける。

「なあ、分るださう。余の本当の子供に王位を継がせるためには、お前を殺さねばならないのだ」

王はそろそろ距離を詰めてくる。その手には抜き身の剣が禍々しく光っていた。

「そのためニ、余は今まで色々と手を呪へしたところ……」

王はため息を吐いて肩を竦めた。

まるで、駄々をこねる子供に手を焼いているような何気ないその仕草に、麻奈は鳥肌がたつた。一体この父親は何に手を呪へしたといつか。

「まさか、私を狙っていたのは 父上だったのですか？」

王は本数の少なくなった歯を見せて笑う。

「ビシャード、お前は本当に運が強い。余がどんなに暗殺者を差し向けても、持ち前の用心深さと悪運で全て切り抜けてしまった。知つていたか？　お前の私室の扉に毒を塗つていた事を。お前は鼻が利く。食事には気を遣つても、そこならば警戒することはないだろ？　お前は爪を噛む癖があるだろ？　そこに仕込めば、確実に殺せると思つたのだが」

棺を挟んでじりじりと回り続けるふたり。

「一つだけ誤算だった。お前は体が弱いのではない、強すぎるのだよ。毒を盛られても死なないほどにな。お前の体は、ほとんどの毒に耐久性があるらしいな。まったく、厄介なことだ。だから、余は考えた。辛いが、やはり自分で手を下さねばならないようだ」

棺桶越しに迫る王の剣先を警戒しながら、ビシャードの額に汗が浮かぶ。

ビシャードは明らかに動搖していた。無理もない、父親に殺されかけているのだ。目の前に写る光景は全て嘘なのではないかと疑つているのだろう。

ビシャードは、かさかさに乾いた唇から浅い呼吸を繰り返していた。小刻みに揺れている瞳はこう叫んでいた。　信じられない、信じたくない。

息子の戸惑いを見抜いて、王が大きく一步踏み出した。一足飛びに距離を詰めて、ビシャードに切りかかる。

横薙ぎにされた剣先はビシャードの脇腹をかすめて、彼の服を僅かに破いた。返す刀で王は剣を斜め上に振り上げた。ビシャードは後ろに飛んでそれを避ける。

腹と喉。傷を受ければどちらも致命傷だ。

一切迷いのない剣に、王の本気が伺える。彼の殺意は本物だった。いくら老いたとはいえ、王の剣筋はまだまだ鋭い。いつまでも避けきれないだろう。

ビシャードは護身用に持つていた短剣を懐から取り出した。

しかし、剣を向けるの一瞬躊躇つてしまつ。心の底では、今まで敬愛してきた父に刃を向けたくないと思っているようだ。しかし、状況はそれを許してくれない。

ビシャードの僅かな隙を付いて、王の剣が容赦なく襲つてくる。迷つた分だけ自分の首を絞めることになるのだ。

ビシャードは短剣を素早く構えて剣を防いだ。しかし、捌き切れなかつた一太刀が、首筋から鎖骨にかけて走り抜けていった。

「くつ」

傷の確認をする暇もなく、重心の乗つた剣が繰り出される。ビシャードは必死にそれを短剣で受け流した。しかし、この短剣では王の剣を何度も受け止める事は出来ない。刀身に差がありすぎるせいで、軌道を削らすだけで彼には精一杯だった。

王は自分の優位を確信して、歪んだ笑みを浮かべている。
ビシャードが一瞬目を伏せた。こんな父親を直視できる息子などいないだろつ。

麻奈は幼い頃のビシャードを思い出した。あの時のビシャードの瞳からは、父親を尊敬する気持ちが溢れていた。きっと自分の父親がこんな事をするはずがない。そう叫びたいに違いない。

ゆっくりと目を開いたビシャードの瞳には、何か強い決意が込められているように麻奈には感じられた。

王はすぐに構えを変えて、強烈な突きを放つた。短剣によつて軌道が反らされても、確實にビシャードの体に当たるよう。

その意図を読んだビシャードは、素早く身を屈めてそれを避けた。ヒュツという空を斬る音が彼の頭上に響く。ビシャードはそのまま床を転がり、しつぞりと叔父の棺に左手を突っ込んだ。

「ビシャード、もう終りにさせてくれ。お前は誰からも望まれていないんだ」

その言葉にビシャードは顔色を変えた。確かに、彼は民にも父親にも望まれていらない存在だ。青ざめた顔をしながらも、ビシャードは氣丈に父親を見据えていた。

「私は 確かに間違いで産まってきたのかもしれません。ですが、今は生きているのです。誰も私という存在を望んでいなくとも、私は 私だけは自分を否定したくない」

「お前は存在してはいけない人間なんだ」

王は剣を大きく振りかぶると、渾身の力を込めてビシャードの額を叩きつけた。それが届く寸前、ビシャードは左手に握りしめていた塙を王の顔に投げつけた。

「ひっ」

王が怯んだ隙を逃さず、ビシャードは彼の剣をかいぐると、そのまま頭を低くして体当たりしていった。肩にぶつかる衝撃を感じながら、ビシャードは目を閉じて呟いた。

「これで、いい」

みぞおちに体当たりを喰らい、王が息を詰まらせる。

ビシャードは足を踏ん張り、つきすぎた勢いを殺して何とかその場に留まつた。彼まで落ちるわけにはいかない。

王を突き飛ばした先。それは、大きく開け放たれた窓だった。彼は計算して王をこの窓に突き落としたのだった。

長い悲鳴が尾を引いた。ここは一階、下は石畳。落ちれば無事ではすまい。

「父上、これからは私が王になります」

ビシャードは粗い息を吐きながら、窓の下を覗いて呟いた。

いつもおっしゃるがとうござります。

いよいよビショード編、佳境に入つてきました。

それにも、主人公見てるだけって……。

それでは、また次回お会いしたいと思ひます。

全てを見ていた麻奈は、瞬きもせずに震えていた。目の前で何が起こったのか理解出来ずに、ただ呆然としていることしか出来ない。王が落ちた。ビシャードが、突き落としたのだ。

その場面ばかりが頭の中で繰り返し繰り返し再現され、その度に麻奈の胸はぎゅっと掴まれたように苦しくなった。

恐る恐る隣に立つビシャードを見上げると、彼はじつと麻奈を見ていた。何かを期待するような、それでいて突き放すような視線。それを見て、麻奈は繋いでいた手を離してしまいたい衝動に駆られた。彼の手を握っていたくない、そう思ったのだ。

麻奈はその感情のままに、ビシャードの手を離そうとした。しかし、その前にビシャードが逆に強く麻奈の手を握りしめた。

汗でじつと湿つた一人の掌は、べたべたとした感触をしていた。

「わざと突き落としたんですか」

麻奈の口は勝手に動いていた。

「正当防衛だ」

麻奈はビシャードのこわばつた顔を見つめた。彼の答えには素直に頷けない。確かに先に仕掛けたのは王だった。ビシャードは彼から自分の命を守らなければならなかつたのは認める。しかし、ここまでする必要があつたのだろうか。

ビシャードは自分の意思で、自分が王になるために一番大きな障害を排除したのだ。それが、父親と呼んで慕つていた人だったとし

ても。

麻奈は、窓の外を見下ろしている過去のビシヤードに目を向けた。激しく息を乱しているその横顔は、夕陽の陰になつていて見えない。彼がどんな顔をしているのか、見えなくて良かつたと麻奈は思った。

「確かに、正当防衛でした。でも」

「嘘つかなつ！」

鋭い叱咤を受けて、麻奈は震え上がつた。その剣幕に押されて、無意識に一步後ろへ下がる。

「余はいつしなければならなかつたんだ。いつしなければ、余は父上に殺されていた」

繋いでいる手が痛いほど握られる。

「余は王になりたかつた。力を得て、皆に認められたかつた。誰かに必要だと言つて欲しかつたんだつ」

ビシヤードはすがるよつた田で麻奈を見つめる。

「余が生きる道は、いつあるよつたは無かつた」

「陸」「……」

頃垂れながらビシヤードは何度も咳く。まるで自分にいい聞かせるようだ。そして、彼はきっと誰かにそれを肯定してもらいたかつたのだね。たとえ、それがこの国に全く関係のない麻奈の言葉で

も良いほど、彼は追い詰められているのだ。

しかしそれが分かつていても、今の麻奈にはそれを言つてあげられる余裕は無かつた。目の前で人が殺された衝撃に囚われて、まだ震えが收まらなかつた。

ビシャードの身の上は氣の毒だと思つ。彼が言つようじて、生き残る道はこれしかなかつたのかもしれない。しかし、それと今湧き上がつてくる感情とは別物なのだ。

ビシャードは人を殺した。どうしてもその事実だけが際立つてしまう。

麻奈は今、ビシャードをとても恐ろしいと思つた。

ふたりの間に長い沈黙が横たわつた。ビシャードの手からだんだんと力が抜けていき、ずるりと麻奈の手がそこから滑り落ちた。

まるでそれが合図だつたかのように、ビシャードがゆるゆると顔を上げる。怯える麻奈を見つめて、彼の口の端が僅かに歪む。

「ミナカミ……そなたも、余を受け入れてはくれないのか」

そう言つが早いか、骨ばつたビシャードの手が麻奈の胸ぐらを掴んで、ぐいと強く引き寄せた。

「余が恐ろしいのか」

ビシャードは長身な体を折り畳むように麻奈に顔を近付けた。吐息がかかるほどに近い彼の顔に、悔しそうな色が滲む。あまりに突然の出来事に、麻奈は声も出ない。

何も答え無い麻奈に苛立つたのか、ビシャードが奥歯を噛み締める音が間近で聞こえた。

「見ずしらずの者だつたが、そなたなら心を許しても良いかと思つていた。孤独だつた余を、損得関係なく救つてくれたお前なら……。だが、結局お前も城の奴らと同じだ。余を受け入れない。認めてはくれないのだろう」

「そんな

」

麻奈の視界がみるみるぼやけていった。

「泣くほど怖いか？　はは……嫌われたものだ」

麻奈は言葉に詰まつた。ビシヤードが怖いのは事実だつたが、彼を傷つけたいわけではないのだ。何かを言わなくてはと焦るけれど、今はしゃべつあげる声しか出でこない。

ビシヤードが乾いた笑いを浮かべる。

「やはり、誰かに心を許す事が間違つていたのだ」

麻奈を見つめるター・コイズ色の瞳には、最早何の感情も浮かんでいない。

「誰も余を必要としないのなら、余はもう誰も必要としない」

ビシヤードは麻奈の胸ぐらを掴んでいた手を離すと、ゆっくりと歪な笑みを浮かべる。その左目から、すっと涙が一筋溢れて目元のホクロを濡らしていった。

「お前も、もう　要らない」

ビシャードは麻奈の胸をドンと突き飛ばした。麻奈は後ろに数歩、たらを踏んで床に倒れ込んだ。

涙でぼやける視界の中で、ビシャードが裾を翻して部屋を出て行く様子を、麻奈はただぼんやりと見送っていた。

バタンと扉が閉まる音が響く。それはビシャードの拒絶の音のように聞こえた。扉を見つめながら、自分の肩を力任せに抱き締めた。こんな所、もう嫌だ。

麻奈はそのまま身を縮めて目を閉じる。懐かしい顔を脳裏に浮かべながら、かたかたと震える体を鎮めようと両腕に力を込める。

「酷いよ。あんなのただのハツカたりじゃない。怖いよ、ジュリアン。早く此処から出たいよ」

ジュリアンがこの場にいたら、きっと優しく微笑んで麻奈を甘やかしてくれるに違いない。麻奈はきつつきつと目を瞑った。夕日も目の前に置かれている棺も、過去のビシャードさえも見たくないと思った。

ビシャードは、一体自分に何を望んでいたのだろうか。貴方の行動は仕方なかつたのだと認めてあげればよかつたのか。そもそも、お互いの事を良く知りもしないで、勝手に理想を押し付けるなんて迷惑でしかない。

しかし、瞼の裏に浮かんでくるのは、ビシャードの傷付いた顔だった。

「陛下、泣いてた」

誰も必要無い、その言葉が麻奈の胸にざらついて残る。廃校で出

会ったピンク色の肉塊を思い出し、麻奈は突然理解した。だからビシャードはあのような姿になつたのだと。

誰も見えず、誰の声も聞こえない。みんなから避けられ、一人きりの世界で生きる。それは『誰も要らない』と言つた彼が望んだものそのものだつた。それと同時に、彼が一番恐れていたもの。

「ジュリアンが言つてたのは、こいつ事だつたのね」

その時、今まで窓辺に呆然と佇んでいた過去のビシャードが振り向いた。そして、そのまま真っ直ぐ麻奈の方に向かつて歩いて来る。麻奈は緊張しながら息を潜めた。彼に自分が見えるはずはないと分ついても、自然と鼓動が早くなる。

ビシャードの首から鎖骨にかけて赤い筋が走つてゐる。そこからじんわりと血が滲んでいるのが見えたが、大した出血もなく傷も深くないようだ。さつき王に斬られた傷だろう、見る限り命に別状はないようなので、麻奈はほっと胸をなでおろした。

過去のビシャードは麻奈の横をすり抜けると、ドアを開けて廊下へ顔を出した。

「誰か。誰かいなかつ」

その声を聞き付けて、数人の足音がバタバタと近付いて來た。

「どうかなさいましたか」

駆け付けてきたのは、簡素だが甲冑を付けた衛士のような男たちだつた。彼らは、ビシャードの傷を見るなり驚き、一瞬にして緊張を走らせた。

「ビシャード殿下、その傷は

「かすり傷だ。それよりもたつた今、王がご乱心なされてここから階下に飛び下りた」

衛士たちは一瞬言葉に詰まり、互いに顔を見合わせた。そして、すぐさまバルニーに駆け寄り、たちまち絶句してしまった。固まつたままの彼らにビシャードは鋭く指示をだす。

「早く行け！ まだ息があるかもしれない」

一同がはつと我に返り、足音荒く部屋を出でていった。彼らのその青い顔を見ると、王の怪我が致命傷に達しているのだと想像出来る。

麻奈は立ち上がり、ふらふらと吸い寄せられるように窓辺に歩み寄っていった。深い意味などなく、みんなと同じよひにておき込んでみようと思つたのだ。

石畳の上に王が倒れていた。それを見てから、麻奈はたちまち後悔した。喉の奥に苦いものが競りあがつくるのを、口元に手を当てて何とか堪える。

王の右足は本来曲がらない方向に曲がり、石畳にはじず黒い血だまりが広がっている。麻奈は鼻まで両手で覆つて、えぐくのだけは何とか我慢した。大量の血の匂いが此処まで臭つてくるようだ。

麻奈が何とか呼吸を整えていたその時、後ろからビシャードの弱々しい声が聞こえてきた。

頭だけを残した夕日の頼りない明かりの中、過去のビシャードはひつそりと置かれている棺の前に膝まずいていた。

「叔父上……。いや、貴方が私の父上でしたね」

彼は、棺の半分ほどずり落ちてている蓋をそつとずらして、震える指でそつと遺体の頬に触れた。麻奈はこの時、初めて棺の中の遺体の顔を見た。

亡くなつてから、かなりの日にちが経つてゐるのだろう。その顔はかなり黒く変色していたが、ビシャードに良く似た垂れた目と、一つ並ぶホクロが見て取れた。

「貴方は知つていたのですか？ 私が息子だと」

ビシャードの瞳から涙が溢れ出る。

「どうして……どうしてこんな事に」

ぎつぎつと唇を噛み締める。

「どうして母を愛したのですか。貴方が道を外れなければ、こんな事にはならなかつたのに」

ビシャードは必死に嗚咽を噛み殺す。その度に彼の肩は小刻に震えた。やりきれない悲しみは、彼の中には到底納まりきれないのだろ。

麻奈は、彼の後ろでそつと涙を拭いた。

ビシャードはそれからしばらく経つた後、服の端で涙を拭つてから、今度はしつかりした足取りで部屋の外へと歩いて行つた。部屋を後にする際に、彼は棺へ一瞬だけ視線を送つたが、すぐに前を向いてそのまま出て行つた。

読んでくださってありがとうございます。
アルファポリス様で開催されております「ファンタジー小説大賞」
にエントリーしてみました。よければ、応援してください。
それでは、また次回。

現在と過去、一人のビショードが部屋を出て行ってしまった。一人で部屋に残されてしまった麻奈は、途方に暮れていた。これから自分は一体どうしたらいいのだろう。帰るために何をしたらいいのかさっぱり解らない。

麻奈はひつそりと横たわっている棺を見つめた。全ての間違いは、彼とビショードの母親がしでかしたことから始まったのだ。そう思うと、そのふたりにとても腹が立つた。彼らに翻弄されてしまったビショードも王も、氣の毒で可哀想でならなかつた。

「やつぱり一人で帰るわけにはいかない。陛下も一緒に連れて行かない？」

麻奈は棺をちらりと見た。手をあわせる氣にもなれなくて、そのまま部屋を飛び出してビショードを追いかけていった。

ビショードは石造りの廊下をふらふらと歩いていた。麻奈と別れた後、彼は足が赴くままに歩き続けていた。

辺りには誰の姿もない。此処は司祭と王族しか立ち入ることが出来ない、神殿と宮殿とを繋ぐ道だつた。日が翳つた今の時間、祈りを捧げる者は誰もいない。太陽の神を祭るこの神殿には、暗くなつてから入るのはタブーとされているのだ。

ビシャードは大きくふらついて壁に手をついた。ガタリと大きな音がして、足もとについた置物が倒れる。神獣を象つたそれは、大きな鼻をした毛の長い聖なる動物の形をした置物だった。神殿への道を守護する門番として、それらはこの廊下に点々と置かれている。ビシャードはそれの一体を台座ごと蹴とばしてしまったらしい。置物と言えども、聖なる獣。本来ならば、それは神をも恐れぬ所業だつた。

しかしビシャードはそれに一蔑もする事なく、足を引きずりながら歩いて行く。なぜか足が重たくてたまらなくなつっていた。しかし、ビシャードはそんなことも気にならないようにひたすら歩き続ける。今の彼は、何も構つ気になれないのだった。

ビシャードは、先程まで見ていた、懐かしくも心がえぐられるような場面のことを思い返していた。一番辛い思い出を客観的に眺めるのは、思つたよりも苦痛だった。何より、当時はかなり動搖していたせいで聞き逃していった父の言葉を、もう一度一言一句はっきりと聞かされたのだ。

麻奈の手前、ビシャードは取り乱したりはしなかつたが、自分の心のどこかがズタズタになつていくような気がした。

「ああ、何で重たい足だ」

ビシャードは足にまとわり付く裾を払いながら進んだ。いつのこと、この重たい体を捨ててしまおうかとも考える。そうすれば、もう何もかも感じなくてすむのだ。

「あの時と同じか」

ビシャードは、奇妙な男が迎えに来た時のことをふと思いついた。

そのときも、紅い夕日が地平線に隠れる寸前の、薄暗い夕暮れ時だつた。

段々と重くなる足を引きずつながら、ビシャードは過去に思いを馳せていた。

王を窓から突き飛ばした後、ビシャードは王の生死を確認させた。流石に、それを自分の目で確認する余裕は彼にはなかつた。

結果、一階から突き落とされても王は死んではいなかつた。大怪我を負つたが、辛うじて一命だけは取り留めていたのだ。その報告を聞いて、ビシャードは密かにその後の方針を練つた。どうすれば自分に疑いがかかることなく、王位を引き継げるか。王が執務を取れない以上、いくらでもやりようがあるはずだ。彼は密かにそう思つた。

まず、ビシャードは王を宮殿の中央から遠ざけさせ、宮殿の奥深くの離れに閉じ込めた。療養と言つ名の監禁だ。王の意識が戻ることは難しいことじつだったが、念には念をいれて、今ビシャードが動かせる兵を離れに配置させた。警備と称して、完全に王を閉じ込めるつもりだつた。

それからビシャードは、今回の騒動は王が乱心したために起きた事だと噂を流した。

王が中央から離れている間に、その噂はアツという間に広まり、翌日には宮殿の下働きのものにさえ知れ渡つていた。

全てはビシャードの思惑通りに進んだ。後は王が乱心したという証拠を搔き集め、それを臣下の前に示す事で、自分が先王を突き落とした疑いを晴らす事が出来るだろつ。

ビシャードは、あのとき錯乱した王が自分に斬りかかり、その事を悔いて自ら身を投げたのだと繰り返し訴えた。しかし証人がいない。ビシャードの発言に、ほとんどの臣たちは懐疑的だった。

その後、ビシャードの言葉を信じざるを得ない証拠が出てきた。先王が出したジョミール暗殺の勅命を受けた将を、ビシャードが探し出してきたのだ。勅命の書を出す事によって、だんだんとビシャードを支持する者が増えていった。

これで王を退陣させ、ビシャードが戴冠する準備が整つた。ビシャードは、華やかで時間のかかる戴冠式を、ジョミールの喪に伏すべきであると主張して省いた。彼は少しでも早く王位に就きたかったのだ。王の意識が戻らないうちに。

幸いその申し出はすんなりと通り、ビシャードは望んだとおり、玉座に収まる事が出来た。それは王が宮殿を離れてから、僅か七日の出来事だった。

ビシャードは予定通り玉座に座ると、長く息を吐き出していた。ここまできつけるのに、とても長かったように感じていた。父が座つていた椅子に座る。たつたそれだけのことなのに。

しかし、まだ気を抜く事は出来ない。とても危険な綱渡りは無事成功したが、まだ気がかりが一つだけ残つているのだ。

今回の出来事で、ビシャードには明確に説明出来ない事がある。それは、先王がなぜジョミールを暗殺しようとしたのかだった。それを話せば、王の血を引かない自分が王位に就くことが出来なくなつてしまつ。何があつても、絶対にそれを公にする事はできないのだ。

理由の解りない物事は疑われ易いものだと、彼は良く心得ていた。ビシャードは、そこを突かれた時の返答を考えていたのだが、彼の予想に反してジョニール暗殺の理由は深く追求されることはない。先王とその弟の不仲はほとんどの者が承知していた事で、今更ビウジウシのでは無かつたらしい。

「ビシャードは、穩便にそして速やかに王位を得る事が出来た。

自分の本当の人生は、ここから始まるのだとビシャードは信じた。未来をこんなに楽しみに思つたのは、幼い頃以来のことだった。

その時のビシャードはとても満足していた。自分の力で望んでいた全てを手に入れたのだ。今まで疎ましく思われているだけの存在だつた自分に、全ての者が頭を下げる。それは一種の快感でさえあつた。

しかし、そんな生活は長くは続かなかつた。万全を期したつもりでも、ビシャードを疑う声は静かに、そして小波のように広がつていつた。

「先の事件は、やはりビンガがおかしい」

「ビシャード陛下が先王を「きものこじよつとしたのではないか」

「誰も現場を叩撃していないんだ、いくらでもビシャード陛下の良いようにでつむ上げられるわ」

「しかし、先王が出した勅命があるぞ。印が押されているのだから、確かに先王御自身が出された物に違いない。先王が御乱心なされた立派な証拠ではないか?」

「いや、御乱心なされて勅命を出したのではないのかもしれぬ。例えば ジュミール様が謀反を企てていたとか」

「それならば、何故密かに勅命を出す必要がある? 堂々と出せばよいではないか?」

「戦中に味方を処罰すれば、それだけで士気が下がる事もある。ましてや、前線で戦つておられたジュミール様ならば尚更だらう」

「真相がどちらにせよ、ビシャード陛下の戴冠には府に落ちない点が他にも色々ある」

「確かに、本来ならば吉日を選んで舞台を整えるのが普通だが、ビシャード陛下はやたら焦っていたように感じられたな」

「まさか、ビシャード陛下が全て仕組んだ事だと? ジュミール様暗殺の勅命を出すよつて、先王に進言したとでも言つたいのか」

「先王の御乱心よりは、有り得る話ではないか」

「 やはりこの国の王にふさわしこのはアナン殿下しかいない」

噂はいつしか、ビシャードを中心に激しい渦を巻き始め、水面下でビシャードを非難し始めた。だが、誰も直接ビシャードに疑問を問う事はしなかつた。表面上は何事もないかのように振舞いながら、誰もが執務以外の時にはいつも遠巻きに疑いの眼差しを彼に注いでいた。そして、目が合つとそそくさと逃げていくのだ。ビシャードは一人、玉座に座りながら頃垂れる口が続いた。

こつしか、ビシャードは食事も喉を通らなくなり、またやせ細つ

ていった。王位を継承してからたつた一ヶ月でこの有り様。詰めが甘かったのかと、後悔する毎日が続いていた。

水面下で噂されるだけでは、逆らう者を片つ端から処分することも出来ない。過去の暴君のようにそれをしても良かつたが、人心が離れていくだけだということを彼は良く分かっていた。

結局、憧れて止まなかつた椅子に座つても、彼は一人きりだつた。いつしか、彼の周囲にはまた物騒な空気が忍び寄つていた。

外を歩けば矢が飛んで来る事など茶飯事に戻つていた。ビシャードは今までの経験から、命を守る術は嫌といつほど知つている。毒にも耐久性がある。

しかし、ビシャードの精神は徐々に病んでいった。誰が敵か味方かも解らない中で命を狙われ、臣達は彼を認めずに顔を背ける。もう限界だつた。

ビシャードはフランフラと玉座から降りると、頼りない足取りで歩き出していた。眠れない日々を過ごしていた彼の目の下には更に濃くなつた隈が張り付いていた。彼はもう、正常な判断すら出来なくなつていたとは、自分でも気がついていなかつた。

「まず余の噂をする者に処罰を下え、出所を調べよう。それから、以後この話をする者が出来ないよう、そ奴を見せしめに処刑しなければならない。そして次は」

歩きながら今後の事を考える。それは酷く面倒で頭が痛くなる事だつた。彼は知らずため息が癖になつていた。

「疲れたな」

その時のビシャードに行く宛などはなかつた。ただこの息苦しさ

から逃れる為に、此処から逃げ出したいと考えていた。

「陛下」

廊下に差し掛かった所で、弟のアンがビシャードに声をかけてきた。いつもなら、ビシャードの声がかかるまで話しかけることのない控えめな弟だったが、その時はアンの方から声をかけていた。いつもよりも体調が悪いように見えたせいだろうか。ビシャードはつまらないものでも見るかのように、出来の良い弟にちらりと目を向けた。

「陛下、如何致しました？ 兄上？」

ビシャードは返事をすることもなく、アンから視線をそらしてそのまま通り過ぎようとした。鬱陶しい。ビシャードは弟と比べられる度に、劣等感を募らせ、いつも彼を疎ましく思っていた。だが、ビシャードも馬鹿ではない。表立つてその感情を表したのは初めてのことだった。今は無性にこの弟が憎いと思つた。

こいつの兄らしからぬ様子に、アンは不振そうに首を傾げた。彼はこの一歳違いの兄をとても慕っていた。アンにとつてビシャードは、細い体を真っ直ぐに伸ばして、常に高みを見つめている人だった。たつた独りで、いかなる障害にも立ち向かう姿にアンはいつも憧れの瞳を向けていたのだった。

「兄上、如何なさいました」

アンは通り過ぎようとするビシャードの正面に回り込むと、彼と正面から対峙した。無礼を承知でその細い肩を掴んで顔を覗き込むと、ビシャードの線がゆるゆると上がった。彼は充血した瞳で、

弟の顔を見ていた。

「兄上。 一体どうなれたんですか」

ビシャードは、自分よりも精悍な弟の顔に、突然拳を叩き込んだ。ゴツという鈍い音がしてアナンはその場に膝を付いた。床に赤い霧がポタポタと落ちる。

「ああ、アナン……。アナンっ」

痛みに顔を歪めて、アナンが鼻を押さえながら顔をあげると、ビシャードが口許を引きつらせながら見下りしていた。生睡を飲み下すのもぎこちなく、アナンの喉がゴクリと鳴った。

「余の弟

ビシャードの骨ばった指には血が付いていた。それがアナンの首に回される。優しく、ゆっくりと。

「余の代わりに、出来の良いお前が王になれば良かつたのになあ。この国の者はみんなそういう望んでいる」

アナンの太い首に指を這わせたビシャードは、その硬くたくましい感触にすら嫉妬していた。自分の欲しい物を全て持っている弟。

「何を仰ります、今は兄上が王なのです。下らない噂など捨ておけば良いのです」

アナンの真っ直ぐな視線を受けて、ビシャードの指に力が入った。

「流石だ。やはりお前は言つ事が違うな。余よりずっと王の器ではないか」

「兄上」

「余はお前が羨ましいぞ。誰からも王にと望まれるお前が」

ビシャードの手にグッと力が加わった。

「つ兄上……」

きりきりと絞まる氣道にアナンの声が掠れた。その声にはっとしたビシャードは、彼の首から手を離した。一体、自分は今何をしてしまったのだろうか。

ビシャードは、咳き込んでいたアナンの鼻血を自分の服の袖でそつと拭つた。その顔には後悔の色がありありと滲んでいる。

「すまないアナン。余は、少し疲れたかもしだぬ」

別人のように穏やかな顔付きになつたビシャードに、アナンは安堵よりも胸騒ぎがした。

「悪かつたな、許せ」

「いえ 大した事ではありません」

ビシャードはアナンに手を貸して彼を立たせてから、その筋肉に覆われた肩をポンと叩くと、そのまま歩きだした。

「陛下、私は陛下こそが王に相応しいと思つています

弟の声をビシャードは背中で受けた。

アンは、兄の細い背中を見ると、殴られた怒りよりも悲しさが沸き上がっていた。きっと彼は誰も信じてはいないのだ。心を許していいのだ。

続く刺客のせいだらうか、その背中はまた一段と痩せて見えた。ビシャードの後ろ姿を見送るアンの胸騒ぎはこいつまでも止まる事は無かった。

（後編）マリナードのヤーナシバ

いつも読んでいただきまして、ありがとうございます。
「ファンタジー小説大賞」に投票していくさつた皆様、本当にあり
がとうございました。応援を励みに、これからも頑張ります！！

「ビシャードは歩く。ビルに向かっているのかは自分でも分からない。

アンに会えた事は幸運だった。ビシャードは彼の首を絞めてしまった瞬間、心に決めた事があった。

「これ以上醜態をさらす前に、自分の始末は自分でつけよ!」

生まれを選ぶ事は出来なかつたが、終りだけは自分で選ぶ事ができる。ビシャードは死に場所を求めてふらふらと歩き続ける。

ビシャードは、以前先王に言い放った言葉を思い出した。自分だけは自分を諦めない。そう言つたのは僅か一ヶ月前のことだった。今もその気持ちに変わりは無い。ただ、もう疲れたのだ。

「余は自分に出来る事をした。それで駄目なら……悔いはない」

ビシャードはいつの間にか、神殿の建てられている庭に出ていた。背の低い草が生い茂る庭の一角に、煉瓦造りの赤い建物が一際目立つ。彼は誘われるようそこに近付いて、戸口の前に立つていた。

「神殿か」

中には誰もいない。しんと静まり返つた空氣と祭壇。御神体として奉られている人の背丈ほどもある鏡が、夕日を浴びてキラキラと光っていた。

「最後に懺悔か らしくもないな」

自らの命を絶つには、この場所は神聖すぎる。ビシャードは踵を返して神殿を出て行つた。しかし、数歩も歩かないうちにビシャードは歩みを止める事になる。

「な、何だっ」

突然後ろの神殿の中から光が溢れ出て、ビシャードは振り向いた。

「これは、一体」

彼は吸い寄せられるように祭壇へと近付いた。御神体の鏡が、点滅しながら強い光を放つてゐる。こんな御神体を見るのは初めてのことだった。

ビシャードが手を触れようとした瞬間、御神体から光が消え失せてしまい、辺りはまた紅い影が支配する静かな神殿に戻つていた。

「夢を見ていたのか」

今の光の名残も無く、冷ややかに佇む御神体を見ながら、ビシャードは夢を見たのではないかと不安になつた。立つたまま夢を見るようでは自分もずいぶん焼きが回つたものだと頭の片隅で考えていた。

その時、酷く場違いなんのんびりした声がかけられた。

「あの、ちょっと伺いますが」

声のした方を振り向いてみると、男が一人御神体の影から顔を出した。

「貴方、酷く絶望していますね」

奇妙な男はつかつかと歩いて、ビシャードの前に立つた。ぴたりと体に張り付くような奇妙な服を着た男は、ビシャードに軽く会釈をした。その拍子に、男の首に巻かれた見事な銀細工のネックレスが澄んだ音を響かせる。

「貴方を迎えに来ましたよ」

整った顔にふわりと笑顔を浮かべる。

「そなたは……一体いつの間に?」

さつきまでは誰もいなかつた筈だ。まさか、死を考えていた自分に差し向けられた死神だろうか。今の自分に迎えが来るならば、それしか考えられない。しかし、柔らかな印象のこの男はあまり死神にふさわしくないような気がする。寧ろ。

ビシャードは祭壇の巨大な鏡を見た。そこには、気の毒な程に瘦せて陰のある男が、暗い瞳を向けているのが見える。自分のほうがよほど死神のようではないかと思い、つい笑つてしまつた。

そんなビシャードの様子に構つ事無く、男は微笑みながらビシャードに恭しく手を差し出した。

「突然で不躾ですが、私と一緒に来てもらえますか。貴方の助けが必要なのです」

「余の?」

ビシャードの喉の奥から低い笑い声が漏れた。そんなビシャード

を不思議そうに見ていた男の手を彼は猛然と払いのけた。

「余の事を知らないらしいな、奇妙な男よ。今はそなたを咎めはない。だが、今後は言動に気を付けろつ」

ビシャードは高飛車に、しかし自嘲氣味に男に言い放った。

「余はこの國の王だ。そなたは一体何者だ」

男は一瞬目を見開いたが、直ぐに柔軟な笑みを浮かべた。

「それは失礼を致しました。私はジュリアン田中と申します」

慇懃に受け答えるが、ジュリアンの頭はピクリとも動かない。頭を下げる事もなく、目線を合わせたままのジュリアンを見て、ビシャードは不快な気持ちが沸き上がる。気に入らない。この男の洗練されたしじぐさに隠された本心は、恐らく他人を馬鹿にしている。

「さて、陛下。わきほどお願い申し上げた通り、私は貴方を迎えて参りました」

丁寧な言葉とは裏腹に、ジュリアンはビシャードの手首を掴むとそのままつかむように祭壇へと歩き出した。

「貴様、無禮であるづ」

ビシャードは手を振り払おうとするが、ジュリアンの手はビシャードの手首に食い込んで全くびくともしない。ビシャードは自分の非力を浮き彫りにされたようで、ジュリアンに更に嫌悪感を募らせた。

ジュリアンは男を一人引きずつているとは思えない歩みで、祭壇へと歩いて行く。

「離れたぬかつ」

情けなく引きずられたまま、ビシャードは懷に入れた護身用の小刀をすらりと抜いた。ジュリアンの喉元にそれをぴたりと当てる。彼の歩みがようやく止まつた。ジュリアンは振り返つて眉間に皺を寄せる。しかし、掘んでいる手首はそのままだつた。

「危ない物はしまつて下下さい。私は貴方を此処から救つてあげたいだけです」

ビシャードは小刀を構えたまま動かない。

「絶望しているのでしょうか？　何もかも捨てて、逃げ出してしまいたいのでしょうか？」

ジュリアンは声を落として、囁くようにビシャードの耳に顔を寄せた。

「私なら、貴方を此処から連れだしてあげられます。自殺するよりも、その方がずっと良いと思いますよ」

ビシャードの瞳が僅に揺らいだのを、ジュリアンは見逃さなかつた。一瞬のうちにビシャードの小刀をかいくぐると、单身祭壇を駆け上がつた。

そして、目の前の巨大な鏡に躊躇う事なく片手を伸ばすと、指先が鏡の中に沈んでいった。固いはずのその表面にはゆらゆらと水波が広がっている。ジュリアンはどんどん腕を入れてゆき、遂には

肘まで鏡の中にとぶりと沈んだ。

「わあ、行きましょ！」

ジュリアンはビショードを振り返り、手を伸ばす。

「そなたは……本当に死神か」

「まさか、違いますよ」

ビショードには、彼がまるで獲物を捕えた悪魔のよつこいマリと笑ったように見えた。しかし、瞬き一つする間に彼の表情は真剣なものへと変わっていた。

「選んで下さい。私と共に行くか、此処に残るのか

「無理矢理にでも引きずつていくのではないのか

「いいえ。貴方はきっと、私と共に行く事を選んでくれます

そう言つて、ジュリアンはよう一層手を差し出した。ビショードはその手に誘われるよつこ、ふらりと一步踏み出しあしまつた。そして、はっとしてその足を慌てて元に戻した。

ジュリアンの言葉は、ビショードにとってとても魅力的に響く。危うく、この胡散臭い男の手を取つてしまいそうになつてしまつた。ビショードはジュリアンを睨みつけたまま、思案した。この男について行くのが危険な事だと、もちろん分かっている。しかし、自分の命すら絶とうとしていたところだ。もう失う物は何も無いよう思える。

『ビシャードは急に晴れやかな気持ちになつた。

「全てを捨てて、一からやり直すのも悪くないかもしれないな」

ビシャードは、今度は自分の意思でしっかりと歩みを進めた。
目の前に差し出された手を強く握る。

「ビニに行くのか知らぬが、宜しく頼むぞ死神」

ジュリアンは笑つた。

「だから、私は死神ではありません。もっとも、疫病神かもしだま
せんけどね」

そう言つて白い歯を見せるジュリアンの顔は、ビシャードの脳裏
にいつまでも鮮やかに焼き付いていた。

（後編） 8 ハリマのアーチャー

いつも読んでくださりありがとうございました。
今回で、ビジャードの回想も終わりです。
それでは、また。

耳が痛くなるほど静かな廊下。

ビシャードはそこで、いつの間にか立ち止まっていたらしい。足元には、相変わらず愛らしい姿の聖獣を象った置物が転がっていた。暫しの白昼夢から醒めた後、彼の胸には苦い思いだけが広がっていた。過去の出来事を思い出すたびに、愚かな自分が浮彫りになるようだ。

「あの男に付いて行つた結果が、この有り様か」

自分の人生から逃げた先でビシャードを待つていたのは、本当の孤独だった。

鏡をくぐり抜けた途端、ビシャードは視力と聴力、そして言葉を失つた。自分がどこにいるのか、どんな状態なのかも分からず、助けを求めてただ彷徨ついていた日々を思い出す。

並外れた嗅覚を頼りに、人の気配を探つて近付いてみたが、そのたびに冷水を浴びせられる始末。

惨めで孤独だった。いつ終わるとも無いそんな生活は、もう何も失うものは無いと思つていたビシャードから、たつた一つだけ残つていた人としての誇りを根刮ぎ奪つていったのだった。

そんな中で出会つた甘い香りのする少女。手を伸ばしてすがり付いたその体は、柔らかな弾力でビシャードを癒してくれた。震えながらも優しく撫でてくれたあの手の感触は彼にとつてただ一つの光だった。

その柔らかな手に出会つてから、ビシャードは必ず彼女を探していた。

「ミナカニ。やつと見付けた余の光。そなたには、ただ側に居て欲しかつた」

ビシャードは徐々に重たくなつてくる足を引きずりながら、また歩き始めた。まるで見えない砂袋を足に括りつけているよつた重さだ。

ビシャードは視界にも違和感を感じて、目を細めて廊下の前方を見据えた。廊下の先がまるで見えなかつた。虫に食われたかのように、黒い斑点模様が幾つも出来ていた、だんだんとそれが広がつてゐる。

「ああ、遂に目も使い物にならなくなつたか」

ビシャードは目を閉じる。やがてまた目が見えなくなるのだろうか。そんな恐怖にも似た思いが頭をよぎつたが、それでも彼は歩みだけは止めなかつた。

まだ耳は聞こえている。まだ若干の猶予は残されているのだと思つて、ビシャードは手探りで歩みを進めた。

「せめて、最後は自分の意思で終わりたい」

いつしか、彼の足元にはドロリと粘ついた液体が滴り落ちていた。それが、ビシャードが歩く度にナメクジが這つた後のよつとぬらぬらと光る道を作つていた。

「此処は、一体何処なの」

麻奈は肩で息をしながら、周りを見渡した。ビシャードを追つてはみたものの、彼がどっちに行つたか検討も付かなかつた。

誰かに聞いてみようにも、誰も麻奈の事が見えていないので話しかけてもみんな素通りしてしまつ。困り果てて、直感お頬りに走り回つてはみたものの、そんなに都合良く麻奈の勘は働かないらしい。その結果、麻奈はただ迷子になつただけだつた。

どこまで行つても代わり映えのしない光景に疲れ果て、ついついその場へたり込んだ。

「誰か、過去じやない今のビシャード陛下見ませんでしたか？」

返事など初めから期待しない、完全な独り言だつた。しかし

「見たよ」

実にあつさりした返事が後ろから聞こえてきて、麻奈は飛びあがるほど驚いた。振り向くと、少女が一人立つてゐる。

柔らかな栗色の巻き毛に、鼻に散つたそばかす。くるくると曳く動く薔薇色の瞳が可愛らしく少女だつた。きっと小学校高学年ぐらいといった年頃だらう。

「あたし見たよ」

少女は何でもないとのよつて、麻奈を見上げているが、麻奈は口を開けたまま返事を返す事が出来なかつた。この場所で、麻奈のことが見える人がいるなどとは思つてもいなかつたのだ。

よく見る少女はこの国の服とは異なる服装をしていた。白いグラウスのような前合わせの上着に、膝上丈のふんわりとしたスカート。どちらかと言えば麻奈の世界の服に近いよつて思つ。

しかし、麻奈は眉を寄せた。彼女の服がとても汚れているのだ。あちこち破れたり、乾いた泥のような汚れがたくさんこびり付いている。さつきまで泥遊びでもしていたような格好の少女は小さく後ろで手を組んで、真っ直ぐに麻奈を見つめている。麻奈の頭にもしかして、といふ言葉が閃いた。

「あ、あなたも此處に迷い込んだやつたの」

「はあ？ 迷子はあなたの方でしょ？」

少女は可愛らじい鼻をつんと上向きに反らせながら、小馬鹿にじたような眼差しを麻奈に向けた。

可愛くない。一瞬喉まで出かかったその言葉を、麻奈は何とか飲み込んだ。この生意気な感じは誰かを思い起こさせる。

「ねえ、そんなアホみたいな顔しないでよ。それより、人を探してるんでしょ？ 私見たよ」

「本当つ。それどこで見たの？ どっちに行つたの？ 本当に陛下だつた？」

「頭悪い質問しないでよ、鬱陶しいなあ。灰緑色の癖毛で痩せた人でしょ？ やつきあそこに向かつて行くのを見たわ」

少女のほつそりした指が窓を示した。その先には赤いドーム状の建物が見える。

丘のような小高い緑の庭に、突如そびえる巨大な建物。それは夕

日を背負つて、暗く物悲しい陰をべつとりと張り付かせていた。

麻奈は窓から身を乗り出して、外を眺めた。もしかしたら、まだ

ビシヤードがその辺りにいるかもしない。

「急いだ方がいいよ。彼、また戻りかけてる」

「どうこう事」

麻奈の質問を全く無視して、少女は廊下を指差した。

「うちに廊下を行くと、その突き当たりに階段があるわ。そこから下の階に行ける。外に出たら、後はあの巨大な建物を指して行けばいいよ。すぐ簡単だわ、馬鹿でも行ける」

いちいち釈に触る言い方に麻奈は少しムツとする。

少女はそんな事は気にも止めずに、麻奈に示した道とは別の方向へすたすたと歩き出していた。別れの言葉も何もない。その素っ気無い小さな背中に、麻奈は慌てて声をかけた。

「ちょっと待つてよ、あなたどこ行くの」

少女は面倒くさそうな顔をして振り返えった。小さくため息を吐いている様子が、何とも生意氣で可愛らしい。

「早く行って。彼、もう殆んど変わってしまったんだから」

それだけ言うと、少女はまた背を向けて歩き出した。

麻奈は何となく、それ以上彼女を呼び止め辛くなってしまい、仕方なく少女の背中を見送っていた。すると少女の輪郭がうつすらと

白くなり、まるで辺りに溶けるように消えてしまった。

その光景を見ていた麻奈は、再びあんぐりと口を開いたまま、驚きのあまり幾度も瞬きを繰り返した。しかし、いくら田を凝らしてもそこには少女の影すら見付からない。

「今のつて」

時間差で這上がつて来た悪寒に、麻奈はぶるぶると震えた。まさかと思つけれど、それしか思い当たらぬ。

「幽靈」

口に出してしまつてから麻奈は非常に後悔した。これではまるで幽靈の存在を認めてしまつたかのようだ。麻奈は靈現象断固否定派だった。

更に背中を駆け巡る悪寒を払い除けるため、少女に教えられた道へと走りだす。

後回し、先送り、良く分らないことはそれに限る。廃校に来てから、麻奈は受け流すのがずいぶんと上手くなつたような気がしていた。

「見てない、見てない！　私何にも見てないもん！」

(後編) 9 マリナのアーティザン

いつも読んでくださいありがとうございます。
活動報告に小話を上げさせてもらいました。お時間があれば、ぜひ
ぞ寄つていってください。それでは、また。

この話には残酷な表現が含まれています。ご注意ください。

麻奈は教えられた階段を一旦散に駆け降りて、天井の高い廊下を見つけた。これが赤いドームがある庭へと続く廊下だらう。

廊下の両端には、なぜか可愛らしい動物の置物が一定の間隔で並べられているのが目についた。 麻奈はつい好奇心から、その小さな置物を手に取つてみる。

「コアラ？ 何でこんな所にこんなにたくさん？」

大きな鼻につぶらな瞳。陶器で出来ているような硬い感触の置物だがそれはコアラそっくりに見えた。置物をそつと元に戻して、麻奈はコアラもどきが居並ぶ可愛らしい廊下を進んだ。ふと、一匹のコアラもどきがうつ伏せに倒れているのを見付けて側にしゃがみ込む。

「可愛そうに。誰がやつたんだろう」

苦しそうに倒れている置物を台座に立たせてやり、麻奈はコアラもどきの頭をよしよしと撫でた。麻奈は知らない。この国では、この置物は手を触れることも躊躇つてしまつほどの神聖な獣なのだと。

「これで良し。それにしても可愛いなあこれ、一匹もらつて帰りたいな」

麻奈は両脇に並ぶ置物を眺めながら歩く。一匹一匹、表情や仕草が違うよつて見ていいだけでも面白い。此処をビシャードも通つたのだろうかと考えながら、麻奈は廊下の突き当たりの扉の前まで歩いた。

ビシャードを傷つけるつもりはなかったのだと、彼にきちんと謝罪ができたら、この可愛らしい置物の事について聞いてみたいと思った。しかし、全身で麻奈を拒絶したビシャードを思つと、麻奈はまた涙が出てきそうになる。

暗い気持ちを追い払つように、麻奈は目の前の巨大な扉に手をかけようとして、はっと息を飲んだ。

扉が濡れている。扉の取つ手には粘着性の雫が滴つていて、良く見ると床にも水溜りが出来ていた。まるで何か濡れた物を引きずつていったような跡が扉の外へと続いているのを見て、麻奈の気持ちはざわついた。とても嫌な予感がする。

あの名前も知らぬ少女は何と言つていただろ。戻りかけている。確かそう言つていたのではない。

粘つく床の汚れを見ながら、嫌な予感はほぼ確信に変わっていた。

麻奈はほとんど体当たりするように扉を抜けると、ドーム状の建物目がけて全力で走りだした。あの粘つく水溜りには覚えがある。ほんのりピンク色をしたそれは。 麻奈はこれ以上考えたくないなかつた。

黄昏の中をひたすら走った。すぐに息切れてしまい、スピードは見る間に落ちていったが、出せる力の全てで走り続けた。

麻奈が建物の入り口に辿り着いた頃には、太陽はとっくに沈んでいて、ひんやりとした風が辺りの草花を揺らしていた。

渴いて張り付いてしまった喉で何とか唾液を飲み下し、少しだけ息を整えてからドームの扉を開けて中を覗いた。中は暗い。熱も光も、太陽と共に地平線の向こうへ去ってしまったようだ。

「陛下！ 中にいますか？」

恐る恐る中へと足を踏み入れる。頼りなく響く足音を聞きながら、麻奈はビシャードを探した。だんだんと暗闇に目が慣れてくると、中の様子が見えてくる。

だだつぴろい部屋の奥に低い階段があり、その上に鎮座するように巨大な丸い形の鏡が置かれている。麻奈には、祭壇に大きな鏡を祀っているように見えた。その背後の壁にはステンドグラスのような色とりどりの窓ガラスがはめ込まれていて、光が当たつたらさぞかし綺麗なのだろうと思つた。

綺麗で厳かな空間だが、麻奈の目は祭壇の鏡に向けられていた。それを見た瞬間、麻奈は神社を思い出した。神社に祀られている御神体は大抵鏡が多い。故郷との以外な共通点を見つけて、麻奈は不思議な心地でそれを眺めた。

その時、静かな部屋に微かな息遣いのような音が響いた。

「陛下ですか」

麻奈は中央に描かれた道のよつな線をゆっくりと歩いた。祭壇以外にはほとんど何もない部屋だ。隠れているとしたら、場所は一つしかない。

「陛下」

思つたとおり、祭壇の陰に隠れるよつにしてうずくまる人影を見付けた。否、それはもはや人影とは言えなかつた。

「そんな、また戻つてる……」

麻奈の咳きは、高い天井に吸い込まれていつた。祭壇の裏側で、

ふるふると冗談のよつに揺れているのは、ピンク色の巨大な塊だった。一步間違えば美味しそうにすら見えるそれは、間違いなくあのビシャードなのだ。麻奈は驚きと緊張のあまり、止めてしまった呼吸を意識して繰り返した。

前にビシャードが言つた言葉を思い出す。耳も聞こえず、目も見えない。声をかけても返事がないのは当然だった。

それにしても、先ほどからビシャードは小刻にフルブルと揺れているのが麻奈には気にかかる。

「陸、どうかしましたか」

何となく彼が背中を向けているよつな気がして、小さく震える肩越しにそつと覗き込んでみた。

「うひ

喉の奥から引き攣れたよつな息が漏れた。

ビシャードの触手のよつになつてしまつた腕には、小ぶりのナイフが握りられていて、彼はそれを自分の腹の辺りに突き刺していた。何度も何度も。その度にビシャードの体は小刻に震え、ふるふるとゼリー状の体も揺れるのだった。突き刺した腹からナイフを抜くと、ドロッとした粘液がどつと溢れ出す。

「だ、駄目……やめて。やめて下をこ…」

麻奈は夢中でビシャードのナイフを取り上げよつと飛び付いた。しかし、彼の手はあるみると滑つてなかなかナイフを取り上げられない。

「陸、離して！ 手を離して下をこつてば

ビシャードと揉合ついでに、麻奈はまた頭から足元まで粘液にまみれてしまった。

こいつが、廃校でビシャードに抱えられた時よりも粘液の量が多いような気がする。もしかすると、これはビシャードの血液なのかもしないと思い、麻奈は心臓が痛いほど激しく跳ね上がった。

「駄目、陛下！ 畏くそれを離してください！」

ビシャードはナイフを握り絞めたまま、麻奈を引きずりながら尚も血の腹にそれを押し込もうとする。麻奈は夢中でビシャードのぬめる腕に噛みついた。グツとこづ呻き声を漏らしつゝ、やつとナイフが床に落ちる。

「何で！ 何でこんな酷い事するんですかっ！」

麻奈は泣きながらビシャードにじがみつこうとした。ビシャードの腹部の傷を手で押さえるが、ピンク色の粘液はとめどなく溢れてくる。

「じつしよう。じつしたらここのはまじゅうや」

麻奈はビシャードにじがみつく事しか出来ない。涙が溢れてもう前が見えなかつた。ビシャードの体液で上着が温かく濡れていくのを感じながら、麻奈は無力な自分に歯噛みしていた。

「陛下、死んじゃ駄目ですよ。私……私、貴方に謝りに来たんですよ。怖がつてごめんなさいつて。もつ、平気だから一緒に帰りましょうつて」

後はもつ声にならなかつた。麻奈はビシャードのぶよぶよした体に手を回して、ゆっくりと撫でた。ビシャードの腕がそれに答えるよひ、震えながら麻奈に巻き付く。背中をのろのろと擦るビシャードの腕が嬉しかつた。

「許してくれるんですか」

「この拙く背中を撫でぐる手を失うのかと想つて、麻奈はやつぎれな氣持ちになる。

「陛下。陛下あ……。もつと貴方と話をしておけば良かつた。そうしたら、貴方の事を少しでも分かる事が出来たかもしれないのに」

ビシャードには届いていないかもしれないが、麻奈は話し続ける。そして、なるべく彼の体を優しく撫で続けた。自分のせいだ。麻奈の心中はその思いで溢れていた。きっと自分が彼を突き放したせいで最後の一歩を踏み出させたのだ。

「死なないで下さい。貴方ともつと友達みたくなりたいんです」

麻奈は粘つくビシャードの胸に頬を寄せた。

トクトクトク……。

早いリズムで彼の心臓の鼓動が聞こえる。まだ動いているのに。そう思つてから、麻奈は勢い良く顔を上げた。

「まだ助かるかもしねり」

素早くビシャードの腕の中から抜け出すと、彼の手を掴んで力一杯引っ張つた。

「陛下来て下さい。廃校に戻れば、肉体の時間が戻るんです。この傷も無かつた事になるかもしない」

麻奈はビシャードの腕をなおも引っ張るが、彼のぬるぬるした手は直ぐにすっぽ抜けてしまつ。

「立つて。出口はきつと鏡なんです。あの大きな鏡まで行けば助かるかもしれない」

引いて駄目ならと、麻奈はビシャードの後ろに回つてその体を押してみた。柔らかいビシャードの体に手がめり込んでいく。そして、その重たい体がゆっくりと動き始めた。

「陛下も歩いて下さい。私一人じゃ、階段は無理です」

ビシャードは押されるまま動こうとしない。彼には麻奈の言葉は届かないのだろう。それでも、麻奈は必死に話しかけながらビシャードを押した。耳が聞こえなくても、何かが届くかもしれない。

「陛下お願いします。貴方を死なせたくないの」

ビシャードは動かない。

「お願ひだから動いてよー！」

麻奈の必死の叫びが聞こえたのかいないのか、ビシャードは自ら階段を昇り始めた。どうやら、麻奈の意思だけは伝わったようだ。麻奈はほっと息を吐いて、その背中を押し続けた。少しでも彼の歩みを助けたいと思った。

階段をたつた数段昇るだけの道のりが、今の一人には果てしなく遠く感じられる。

やつと鏡の前に辿り着いた頃には、麻奈はゼイゼイと肩で息をしていた。巨大な丸い鏡には、桃色の粘液でどろどろになつた麻奈と、小刻みに震えている巨大なゼリーが映つている。

「行きましょう」

麻奈はビシャードの手を取つた。

この鏡が出口だという確信は無い。宛てが外れてしまえばビシャードはこのまま死ぬだろつ。麻奈は祈るような気持ちで鏡に向かつて手をつきだした。

麻奈は勢い良く鏡に向かって手を突き出した。冷たい鏡面の感触が指先に伝わり、それが一気に肘まで登つてきた。やうやくと波立つ鏡面に右腕が抵抗なく入つていく。

「やつた」

麻奈はビシャードの手を引いて、ゆっくりと冷たい鏡の中へと入つていった。恐らく傷が痛むのだろう、ビシャードの歩みはとても遅く、時々立ち止まつてしまつ。麻奈は彼を支えながら、その歩調に合わせて慎重に鏡を潜り抜けた。

「此処を通れば大丈夫ですよ」

願つよつてそつぱいてみたが、その願いは簡単には叶つよつになかつた。

鏡の中は薄暗く、どちらに進めばいいのかまるで分らない。早く廃校に戻りたいのに、進む道を完全に見失つてしまつたのだ。

麻奈は焦つた。ビシャードは、あとどのくらいもつのだろうか。もしかしたら、もう。そんな不吉な想像ばかりが頭をよぎる。

薄闇の中をゆるゆると一人は進んでいく。以前追いかけられた巨 大な発光体は今は見当たらない。その代わりのように、遙か遠くの方に青っぽい光が遠慮がちに揺れているのが見えた。

麻奈は不思議な思いでそれを眺めた。なぜだろう、それを見てみると懐かしい色のような気がしてくる。

麻奈が一瞬足を止めたそのとき、ビシャードと繋いでいた手がぐ

つと引かれた。振り返ると、いつの間にかビシャードは人の形を取り戻していた。 麻奈は喜んだのも束の間、彼の様子を見て唇を噛み締めた。

ビシャードの顔は精氣のない土氣色をしていた。おまけに服は血塗れで真っ赤に染まり、特に腹の辺りは血を吸つて重たそうに垂れ下がっていた。ビシャードが歩くたびに、ポタリポタリと血が滴る音が聞こえてくる。

麻奈は辛くなつてそこから田を剃らした。彼には、もう僅かな時間しか残されていないように見える。 こうして歩いていることがほとんど奇跡なのだと感じた。

さつきまでのビシャードは、人間離れしていただけで溢れ出る体液にもあまり実感が無かつた。しかし赤い血を見てしまった途端、麻奈は生理的に込みあげてくるものがある。死は彼のほんの鼻先まで近付いているのだ。ビシャードは膝に力が入らないらしく、崩れ落ちそうになるのを懸命に我慢していた。

この人を死なせたくない。 そう思つて、 麻奈は竦む足を賢明に奮い起たせ、ビシャードの脇の下に頭を滑り込ませて彼を支えた。

「大丈夫ですか。 私に抱まつて下さい」

「なぜ止めた」

自殺の事を言つているのだろうかと思い、 麻奈はじつとビシャードを見上げた。彼は今にも泣き出しそうな顔をしている。 そういう表情をすると、更に目尻が下がつてますます頼りない印象になる。 そんなビシャードを見ると、 麻奈も泣いてしまいそうだ。

「『』めんなさい」

「ビッシュで樂にさせてくれない」

「いじめんなセー」

ビシヤードの口から空氣が漏れるよつた音がした。

「……もひ、余に触れても平氣なのか」

涙が麻奈の頬を伝つていた。あのとき、密かにビシヤードの手を離そうとしていたことを彼は知っていたのだ。ビシヤードに触れていたくなこという麻奈の気持ちまで、彼はちゃんと見透かしていたのだった。

「平氣です」

麻奈はビシヤードの赤く濡れた脇腹に頬を寄せた。冷たい感触が頬に伝わる。ビシヤードは長いため息を一つ吐くと、目を閉じた。

「わづか」

ビシヤードの顎が二つと麻奈の頭に触れる。彼の声はほんの小さな呟きだったが、麻奈はその答えだけで胸が熱くなった。麻奈はこのとや、本当にビシヤードと向き合えた気がしていた。

「もし嫌じやなれば、今度陛下の國の話をもつと聞かせてください」

麻奈が顔を上げると、ビシヤードの体がぐらりと斜めに傾いた。

麻奈は咄嗟に彼を支えるが、その重さに耐えかねて一緒に地面に倒

れこんでしまひ。

「陸トツ」

ビシャードは口を閉じたまま動かない。浅い呼吸を繰り返していたはずの口から、じぼりと血が溢れてビシャードの細い顎を伝つていった。

「駄目 駄目です陸トツ」

ビシャードの腕を取つて、麻奈は必死に彼を立たせようとした。そのまま此処にいたら死んでしまつ。歩かなければ。麻奈の頭の中にはそれしか浮かばなかつた。

「戻らなきや。絶対、戻らなくちやいけないのに……」

麻奈はビシャードの瘦せこけた頬に触れてみた。柔らかいのに、とても冷たい。

涙が堰を切つたように溢れ出してくる。まるで良くできた人形のよつなビシャードの姿が、たちまち滲んで見えなくなつた。

まだ諦めでは駄目だと思う反面、麻奈は虚脱感に囚われてしまい、その場にしゃがみ込んで動けなくなつていた。もう、立ち上がる気力すら残つてはいない。

涙で何も見えなくなつた麻奈の目に、眩しい光が一筋差し込んできた。ゆるゆると顔を上げると、その光は四角い形になつて目の前をふんわりと漂つている。

「なんだろう」

近付いてみると、巨大な四角い光の中に見知った人影が見える。
麻奈の顔が輝いた。

「ジュリアン、ユエ」

四角く切り取られた光の中で、二人は口を動かしながら鏡を叩いている。声は聞こえないが、麻奈は懐かしい顔を見て涙を拭つた。麻奈はビシャードの両腕を持ち上げると、強い光を放つ鏡まで引きずつて行つた。さっきまでの無力感はどこかに消えうせていた。麻奈は自分を叱りたくなつた。なぜ諦めようとしてしまつたのだろうか。彼の命を救えるのは、この場では自分しかいなかつたのに。麻奈は重たいビシャードの体を引きずりながら、懸命に歩いた。思うように進まないのがとてももどかしい。

痩せていてもビシャードは長身な成人男性だ。麻奈は渾身の力でビシャードを引っ張りながら、鏡に背中から身を浸した。すっかり馴染みになつた冷たい感触を背中に感じて、麻奈は達成感のため息と共に目を閉じた。

ビシャードの命が間に合えばいい。ただそれだけが心配だった。

鏡を潜り抜ける冷たい感触が、麻奈の体を通り過ぎていく。田を開けると、麻奈は寂れた色合いの踊場に降り立つていた。

やつと戻ってきた。麻奈はジュリアンとコニの顔を見た途端、膝から床に崩れ落ちていた。安堵と不安で震える手をジュリアンへと伸ばしたが、その手にはビシャードの血がべつたりと付いているのが見えた。麻奈の心臓はまたぎゅっと苦しくなった。

「ジュリアン……」

「分かっています」

麻奈の言葉を手で制して、ジュリアンが頷いた。彼の田は、コニによつて床に下ろされたビシャードに注がれている。

「何があつたのか私たちにも分かっています。この鏡に全て映つていました。恐らくビシャードの傷は内蔵まで達しているのでしょうか。応急手当をしようにも、此処には絆創膏程度の物しかありません」

「そんな。じゃあ、せめて痛み止めを」

「焼け石に水です」

「まだ息はあるだ」

コニはビシャードの傷の具合を確かめていた。幾重にも重なる衣服を捲くり上げて、赤く染まつた腹を露にする。その途端、コニの顔が急に強張った。そしてゆっくりと首を横に振る。

「駄目だ。この傷じやあ、まず助からない」

麻奈は唇を噛み締めた。

「それでも、薬があれば少し楽になるかもしれない。私取つて来る」

そう言つなり、麻奈は階段を駆け上がって行つた。

「私の寝室の、ローテーブルの上にあります」

ジュリアンの声が背中に当たる。麻奈は真っ直ぐジュリアンの部屋へと向かつた。

以前、彼の部屋で塗つてもらつた痛み止めの薬を思い出した。あれは塗るタイプの物だったが、今のビシヤードにも使える痛み止めがあるだろうかと、ふと思つ。

麻奈は三階のジュリアンの部屋に入ると、真っ直ぐに隣の部屋の扉を開けた。

「見たこと無いけど、確か二つが寝室のは……」

部屋の中を見て、麻奈は絶句してしまつた。確にそこは寝室だつた。大きなベッドも、ジュリアンの言つていたローテーブルもある。ただし、それらは全て焼け焦げて真つ黒い煤色をしていた。

「これつて、火事」

部屋の真ん中にある大きなベッドも、炎に巻かれたまま放つて置かれたのだろう。ベッドマットのスプリングがむき出しになつてい

て、ベッドのフレームも溶けてしまっている。歪んで傾いているベッドは、真っ黒い部屋の中で一際不気味な存在感を放っていた。

そんな部屋の中で、新品同様に白く光る救急箱はあるで異質な物のようだ。麻奈は恐る恐る部屋の中を歩いていく。

火災の熱のせいで割れてしまっている窓からは、針山のような電信柱の大群が見える。いつもは不吉に見える黄緑の風景も、ここよりはいくらかましなような気がした。

「ジュリアンって、こんな所で寝てるの」

麻奈は気味が悪くなつて、救急箱を掴むと一目散に部屋を飛び出した。気になることは色々あるが、今はビシャードの方が先だつた。麻奈は、来た道を戻りながら、ジュリアンの部屋について詮索するのではなくじよつと思つた。

麻奈は自分にしては素晴らしく早いスピードで、みんなの待つ螺旋階段へと急いだ。

麻奈が階段を降りていくと、何やら階下が騒がしい。怒鳴るような激しい声が聞こえてきて、麻奈は踊り場を覗き込んでみた。ビシヤードが立ち上がって、ジュリアンと揉み合つている様子が見える。さつきまでその場にいたはずのユエの姿は既に消えていた。

良く見ると、揉み合つてていると言つよりは、ビシャードが一方的にジュリアンに詰め寄つてこるように見える。

「大変つ」

麻奈は青ざめた。瀕死の状態のビシャードが立ち上がつたりしては、本当に死んでしまう。

「ジュリアン、一体どうしたの」

麻奈が慌てて声を掛けると、ジュリアンは困り顔で僅かに肩を上げた。

「ああ、おかえりなわ。ビハッたも何も」

「黙れ、お前のせいで余がどんな思いをしたか？」

ビシャードが血まみれの手でジュリアンの胸ぐらを掴んだ。長身なビシャードがジュリアンを威圧するように見下ろしている。それを見て麻奈は今度こそ真っ青になつた。

「陛下、そんなに動いたら傷に障ります」

「止めるな」

「いいえ。陛下は酷い怪我をしてるんですよ」

麻奈はジュリアンとビシャードの間に無理矢理割って入った。

「安静にしていいないと、本当に死んじゃいます」

涙目になりながら、麻奈は必死にビシャードの袖に縋り付いた。ビシャードはそんな麻奈を見て、ジュリアンの胸ぐらをしぶしぶ離した。

「彼の傷は今しがた治りましたよ」

ジュリアンは苦笑しながら、自由になつた襟元を正した。血が付いてしまったのが気になるのだろう。しきりに擦つてはため息を吐

いている。

「本当? 本当に治ったんですか」

麻奈はビシヤードをまじまじと見つめる。彼の服は相変わらず真っ赤に染まっていたが、良く見ると痩せこけた頬にいくらか赤みが戻っていた。少しだけ顔色が良くなつたようだ。

目に涙を一杯貯めている麻奈に見上げられて、ビシヤードは表情を弛めて頷いた。

「もう大事無い。ミナカミには心配をかけたな」

ビシヤードは安心むせむよひこ、麻奈の肩にぽんと手を乗せた。その途端、麻奈の肩の力がすっと抜けていった。今まで不安と緊張で張り詰めていた気持ちが、やつと全てほぐれていくようだ。

「良かつた」

麻奈はビシヤードの袖を握り締めたまま、彼の薄い胸に額を寄せた。ビシヤードが小さく身じろぎするのが分った。

ビシヤードが動いて、しゃべっている。麻奈はそれだけで嬉しかった。

「ミナカミ……」

ビシヤードは、自分にぴたりとくつついている麻奈に手を伸ばした。どうするつもりもない、彼はただ麻奈に触れたいと思つたのだ。そのまま両手で引き寄せようとしたが、ビシヤードが触れるよりも早く、ジュリアンが麻奈を自分の元へと引っ張つた。

突然後ろに引かれて怪訝そうな顔をしながらも、麻奈はおとなし

くジュリアンの腕に従つた。どこからともなく小さな舌打ちの音が上がつた。

麻奈はだんだんと間隔の狭くなつていいくビシャードの不機嫌な眉間を見ていた。そこには幾筋もの皺が寄つていて、このままではいつか眉毛が繋がつてしまふのではないかと心配になるほどだった。そんな顔でじつと見られていると、麻奈は訳も分らずに不安な気持ちになつてしまつ。一体どうして彼はこんなに不機嫌になつてしまつたのだろう。喧嘩を仲裁したことがまずかったのかと、麻奈は心の中でこいつを考へた。

「ところで、一人には聞いておきたい事があるんですが」

「死神に話す事などない」

ビシャードはジュリアンに噛み付くよつた勢いで、ぴしゃりと言ひ放つ。

怒りを露にしたビシャードの恫喝に、麻奈は体を震わせた。怒気を含んだ男性の声は、自分に向けられていなくとも恐ろしく感じてしまう。

ジュリアンは小さく息を吐いた。

「ビシャード、もう少し冷静になつて下さい。貴方は勘違いをしているんですよ。貴方を此処に連れて來たのは確かに私ですが、あんな姿にしたのは私ではありません。それに、大きな声を出すのはやめてください。麻奈が怖がっています」

ジュリアンはやれやれと大仰に肩をすくめでみせると、麻奈の肩を抱くよつにして自分の元へ引き寄せた。そして怯える子供をあやすように、縮こまつてこる麻奈の肩をトントンと叩いた。

それを見て、ビシャードの顔色が日に見えて変わった。彼にとつてその仕草は、とてもとても特別なものだった。

「彼女に触れるな

ビシャードは、ジュリアンからもぎ取るよつにして麻奈の手を引くと、その細い体で包むよつて後ろに隠した。誰にも見せない、触れさせたくない。ビシャードの瞳はそう告げていた。

そんな彼の行動は、お氣に入りのぬいぐるみを取られまいとする幼い子供のようだ。

過剰な反応を示すビシャードに驚いて、麻奈は彼の顔を下からのぞき見た。ビシャードの泣き出しそうな顔に気が付いた麻奈は、慌てて「じー」と彼の田元を擦つた。王様がこんなに容易く涙を零すのはまずいのではないかと思つ反面、そんなビシャードを見ると放つておけなくなつてしまつ。

「どうしたんですか、陛下」

「ミナカミは余を厭わしく思つのか

ビシャードはほとんど消え入りそうな声でやつまつと、堪えられなくなつたよつて目を向けてしまつた。長い睫毛が伏せられて、そこから小さな雫が押し出される。麻奈はそつと彼の頬に伝つ涙を拭つた。彼はあるで、とても壊れやすいガラス細工のようだ。

「貴方を嫌つたりしませんよ。まつたじやあつませんか、私は陛下と友達になりたいんです」

「 そつか

良かつたと呟いて、ビシヤードは胸に手を当てそのまま目を閉じた。何かを噛み締めるようなその表情は、さつきよりも穏やかになっていた。

「そろそろいいですか」

わざとらしい咳払いをひとつして、ジュリアンが一人の注意を集めた。

「先ず聞きたいのは、一人が鏡の中に入る直前のことです。麻奈には以前話したと思いますが、この鏡は常時中に入る事は出来ません。それが出来るのは、新しい住人を迎える時にだけでした」

麻奈とビシヤードは顔を見合わせる。

「しかし、さつき貴方たちは鏡に入る事が出来た。それはなぜなのかを知りたいのです。鏡に入る時に、何か気が付いた事はありましたか」

どんな小さな事でもいいです、ヒジュリアンは付け加える。

ビシヤードは沈黙のまま首を振った。それは当然だと誰もが思う。彼はその時、視覚も聴覚も失っていたのだ。

「そう言えば」

少し遠慮がちに口を開いたのは麻奈だった。麻奈には、一つ不思議に思う事があった。

「あの時、突然大鏡が緑色に点滅した時、鏡に映った陛下が人の姿

をして泣いているように見えたの。その時、目の前にいた陛下はその……違う姿形をしていたのに。それを見て、この人は悪意を持つて私を追い掛けてたんじやないんだ、って気付いたの」

ジュリアンはふむ、と頷いて大鏡の表面に指を這わせた。彼の指輪が鏡にぶつかり、カチリと固い音を立てる。ジュリアンは鏡面をゆっくりと撫でたが、彼の指が鏡の中に沈む事はなかつた。

「それは不思議ですね。私には普通の鏡に見えていました。では、鏡が光る前に何か気が付いた事はありませんか」

鏡越しにジュリアンは問掛けるが、一人はふるふると首を振つた。ジュリアンはそうですか、とため息をついてから、名残惜しそうに鏡面を撫でてから手を離した。結局なぜ鏡に入ることが出来たのかは謎のままだ。

ジュリアンは残念そうに大きく息を吐き出した。

「仕方ない、これ以上此処にいても調べようがないですね。今はほら、この通りただの鏡に戻つてしましました。今は一度解散しますか。みんな少々汚れていますし」

ジュリアンは上着の襟元を掴みながら肩をすくめる。 麻奈もビシャードも顔を合わせて頷いた。二人とも、もちろんその意見に異論はない。麻奈とビシャードは汚れているどころではないのだ。

実は、麻奈はさつきからシャワーを浴びたいのを必至に我慢していた。むせかえる血の臭いには慣れてしまつたが、ベタベタと粘つく粘液が、顔と言わず髪と言わず全身に付いているのを我慢するのは相当辛いものがある。おまけに、ビシャードの返り血のお陰で麻奈の服も真っ赤に染まっていた。

それにしても、と麻奈は思つ。ビシャードはこんなに出血していったのかと改めて確認して、麻奈はそつと身體こした。ビシャードがあのまま返りぬ人になつてゐたかも知れないと思つとゾッとする。

「それでは、詳しい話はまた後で。ビシャードはそつですねえ、とりあえず私の部屋の浴室を貸しましょ」

「断る」

ジュリアンがビシャードに投げ掛けた言葉は、瞬時に彼に突き返された。

「死神の招待など受けぬ。余は//ナカミ//と共に行動す//」

「う

ジュリアンは困つたな、といつ顔で顎を撫でる。

「うーん……でも女性が風呂を使つてゐる間、部屋で待つてゐるだなんてハレンチだと思いませんか」

ぐつと言葉に詰まるビシャード。麻奈としても、それはあまり歓迎出来ないなと密かに思つた。その意を表すためにこくこくと頷くと、ビシャードは肩を落として残念そうにため息を吐いた。

「では、お前の部屋で世話をなさい」

ジュリアンは、歓迎しまくる。と笑つたが、ビシャードはとても嫌そうな顔をしていた。

「それじゃあ、また後でね」

麻奈は手を降つて一人と別れた。その足取りは、心なしか嬉しそうに跳ねているよう見える。

「いつの時代も、女性は風呂が好きですね」

麻奈の後姿を見送つて、 ジュリアンは呆れたように咳く。

「さて、 麻奈も行つてしまつた事ですし 私に言いたい事があるのでしょ? 今なら遠慮無くどうぞ」

ジュリアンはビシャードに向き直ると、彼を正面から見据えて両腕を組んだ。対するビシャードは前屈みにジュリアンを見下ろして苦い顔をしている。

「聞きたい事がある」

ジュリアンは少しだけ身を反らせて、威圧するように顔を近づけてくるビシャードから距離を取つた。血だらけの男に迫られるのはそつとしないな、と心中で密かに毒づいたが、そんなことは顔には出さず、ジュリアンはにこやかに身振りだけで先を促した。

「此処は一体何だ」

「残念ながら、私にも良く分かりません」

困った顔で首を傾けてみせた。このとき、ジュリアンは決して顔には出さなかつたが、内心ビシャードにとてもイラついていた。こうやつて見下ろされているのは正直かなり気に入らなかつた。

はぐらかされたような答えが返ってきたために、ビシャードの眉が不機嫌に寄つた。納得いかないと顔に描いてある。分かりやすい男だ、とジュリアンは人好きする仮面の下でせせら笑つた。

「本当に詳しい事は解らないんです。私はかなり長い間此処に居ますが、この場所について詳しい事はほとんど知りません。私も貴方と同じように、此処に連れて来られた身なんです」

ふんとビシャードは鼻を鳴らす。彼の鋭い眼差しは、明らかにジュリアンの言葉を信用してはいないうだ。

「そんな事よりも、なぜ元の姿に戻れたのかと聞かないんですか」

ジュリアンの頭一つ分高い位置から、ビシャードの剣呑な視線が降つてくる。

「お前に答えられるのか」

「私の推測で良ければ、ですが。そもそも、此処に呼ばれる人間にはどんな共通点があると思しますか」

さあな、とビシャードはそつけなく答える。内容がどうでもいいところよりも、ジュリアンと話をするのが嫌で堪らないらしい。

「私が知る限りでは、共通点は負の感情なんです。挫折感や後悔や絶望。そういうマイナスの感情を持っている者がこの場所に強く呼ばれる傾向があります」

「ネガティブな者ほど選ばれるのか。成程、余は適任だな」

再び鼻を鳴らして、ビシャードは血に染まつてしまつた服に手を当てた。

「そつ、貴方は誰よりも強い負の感情を持つていた。だから此処に降り立つた直後、いきなり姿が変わったのだと思います。体が変化していくスピードは感情に比例すると私は考えています」

「成程。お前も少なからず絶望や後悔をしているというわけか」

ビシャードはジュリアンの足を指差した。完全に消えた足先を見て彼は唇の端を持ち上げる。

「いい氣味だ。余の苦しみの何分の一かでも味わうが良い」

そんなビシャードの様子を見ながら、ジュリアンは肩をすくめた。随分嫌われたものだ。しかし、ビシャードに嫌われようが好かれようが、別にどちらでも構わないと思い直した。

「此処にいる限り、体が変形する事は免れません。遅いか早いかの差異はありますが、例外は今までありませんでした。ただ一人を除いて」

ジュリアンは、意味ありげにそつと辺りの景色を映し出している大鏡に目をやつた。この鏡を自在に使いこなすことが出来れば、此処から出ることも夢ではないはずだ。

ビシャードは睨みつけるように厳しい目を向けてくる。そんな視線を笑つて受けながら、ジュリアンは自分の考えを目の前の男に話

す。

「や、 麻奈です。彼女は我われどど」かが違ひ

「個人差があると、ちときお前が言つたではないか」

「それは進行度合いの話です。此処に少しでも留まれば、誰でも多少の影響を受けてしまいます。麻奈は此処に着いてからもう随分時間が経ちました。それは、体が既に変化し初めてもいいくらいの時間です」

「変化していても、お前に話すとは限らないだ」

「いいえ。彼女なら必ず私に相談するはずです」

ビシャードはその言葉にもうとした顔をする。

「ミナカミ」と、余が元の姿に戻れた原因と何の関係があるのだ

「麻奈には、もしかすると特別な何かがあるのかもしません。あの時貴方の中にある負の感情を、彼女が取り除いてくれたおかげで、貴方は元の姿に戻ることが出来た そうは思いませんか」

ジュリアンは、トンビビシャードの胸に人指し指をつき立てた。

「今でも、死にたいと思つていますか」

ビシャードは眉を寄せた。彼は難しい問題を突きつけられたように口元をへの字に曲げている。そして視線を少しさ迷わせた後、ゆるゆると首を振った。

「いや、今はそれも思わない。余はミナカミともうと話をしたい。
彼女ともうと一緒に時を過ごしたい」

ビシヤードはまつべつと、血しづか出した答えを租借するように口に出了た。

「今はもう、死にたいとは思っていない」

ジュリアンは、そうでしょう。と笑う。

「私の仮説が正しいのならば、麻奈はきっと……特別なんです」

ジュリアンの口元は自然と綻んでいた。脱出の糸口がはつきりと見えてきた。

ジュリアンは氣の遠くなるような長い間、この場所でずっと過ごしていた。もう此処から出る事は叶わないかも知れないと半諦めかけていたところに、麻奈という一陣の光が差し込んできたのだ。ジュリアンは、感慨深そうに胸に手を当てているビシヤードをちらりと見た。そして思う。もしも、この男を元の姿に戻したのが麻奈だったなら……。その時は、決して誰にも渡さない。彼女は自分のものだ。このいかれた場所から脱出する為の、俺だけのモノ……。

「さて、私達も体を洗いに行きましょうか」

返事を待たずにジュリアンが歩き始めると、後ろからビシヤードが大人しく付いてくる足音が聞こえてくる。

ジュリアンはビシヤードに見えないよつこ、そつと拳を握りしめる。その胸の内には激しい独占欲がぐるぐると渦巻いていた。

リーズガルドは木工室の札がかけられている部屋の中で、薄く瞳を開けた。何も見えない。自らカーテンを締めきつているせいで、彼の部屋には暗い闇が沈殿している。しかし、彼はこの闇の中で一つの光景を見ていたのだった。ジュリアンとビシャードの二人の姿を。

今や彼の目は無数に存在している。薦植物という新しい目を使う時には、本来の彼の目を封じていた方が、より鮮明に見る事が出来ると気が付いたのは、いつの頃だったか。

外の騒ぎを聞き付けたリーズガルドは、新しい目と耳を使って螺旋階段で何が起きたのかを全て把握していた。

「元の姿に戻った」

ジュリアンの後に付いて階段を上るビシャードの姿を見ても、彼にはとてもそのことが信じられなかつた。

「元の姿に戻つた奴なんて、初めてだ」

リーズガルドは、自分が震えている事に気が付いた。

「元に戻れる……オレも戻りたい。もうこんな体は嫌だ！　出来るなら今すぐにでも！」

もう随分前に諦めていたはずの思いが、もう一度沸き上がる。鏡に映る自分の姿を見るたびに、彼は目を逸らしてきた。こんな化け物じみた姿は耐えられないと、何度も涙を流しただろう。

「でも、まだ駄目だ」

両手で顔を覆うと、いつの間にか流れていた涙でリーズガルドの掌は暖かく濡れた。

「アーツを此処から見付けだすまでは、今ままの方が都合がいい」

この姿を嫌悪しながらも、その恩恵にあやからなければ自分の望みは叶わないのだと彼は知っていた。それがリーズガルドを苦しめる。此処から早く出たいのに、今はまだ出たくない。リーズガルドはまた目を閉じた。部屋には、カサカサという彼の葉の音だけがいつまでも響いていた。

心地好いまじりながら目を覚ましてみると、『ひつやうこつもと様子が違うことに気が付いた。一体何が違うのだらう。彼は目を閉じたまま、寝起きのどろどろした思考で考える。ゆっくりと、飴玉を転がすように……。

彼は違和感の正体に気が付いた。そつ、飴玉だ。一番のお気に入りの味が無くなっている。いや、正確には飴玉自体はなくなってはいなかつた。ただ、一番お気に入りの飴玉の味だけがすっかり抜け落ちてしまったのだ。

彼はがっかりして飴玉の数を数えた。一、二、三、四、五……。数はきちんと揃っている。これはどうした事だらう。彼はまだはつきりとしない頭で考える。自分が少しつとつととしている間に、一休何が起こったのだろうか。

彼はため息を吐きたいのを必死に我慢した。今口を開くのは非常にまずい。

こつちは飴玉が劣化しないように細心の注意を払い、色々な要望に応えて苦労しているところに。

新しい飴玉を手に入れてから、何だか様子がおかしいことに彼は気がついた。初めてそれを見つけたときには、とても美味しそうな良い匂いだつたのに、口に入れてみると何の味も無くて酷くがっかりしたこと覚えている。

彼はゆっくりと目を開けた。まあ、一つ失つたって別に構わない。お気に入りはたくさんあるのだから。まだまだ色々な味が楽しめる。

やう考えてから、彼はまざりみと覚醒の中間地帯を、またやうやく持つて良くなじ始めた。

その異変に初めに気が付いたのは、サルーンだった。彼は口頃、ほとんど自室から出て来ることはない。他人にも、この場所にも、彼は一切興味が湧かないのだ。

サルーンは天井にぽっかりと開いている、穴という名の天窓から空を眺める事を日課にしていた。

そして彼はいつも思う。どうでもいい。

此処で起こる全ての事や、自分自身の状態さえ今の彼にはどうでもいい事だった。何を見ても何を聞いても、自分の過去を忘れる事は出来ないのだ。それならば、いつそ何もせずにどっぷりとこの罪悪感に浸つていよう。後悔の沼に敢えてはまらない。それが自分に出来る唯一の罪滅ぼしなのだと彼は考えていた。

サルーンの腹がきゅうと鳴った。そう言えば随分腹が空いていた。此処では何も食べなくても生きながらえることが出来るのに、生理的欲求からは解放されない。

サルーンは、前にスープの話をした少女の事を考えた。此処から絶対に脱出してみせる。と公言した黒い髪の少女。かなり一方的ではあったが、自分と交した約束を守るために今も彼女は出口を探しているのだろうか。

あの少女には、この夕日がどう見えているのだろう。サルーンはじっと紅い光を浴び続けた。あの日もこんな燃えるような紅い夕焼けだったことを思い出す。だからサルーンは、今日も空を見上げるのだ。

しかし、今日の空は何かがおかしい。サルーンは天窓を仰ぎ続けて、やっと違和感の正体を突き止めた。

「月が、出でる……」

鮮やかな茜色の空に、小さく丸い月がぽつかりと浮かんでいた。

麻奈が鼻歌を歌いながら浴室の扉を開けると、白い湯煙が立ち上ってきた。入浴剤を片手に持つて、弾む気持ちを抑えながらバスタブにさりとて白い粉末を入れる。甘い花の香りと共に、たちまち乳白色に濁った湯が出来上がる。麻奈は、お湯を軽く搔き混ぜてから、湯船に体を滑り込ませた。

「ふう、最高

興奮して張りつめていた気持ちは、心地よい湯にほぐされて弛緩していく。

風呂に入っている時間だけは、この奇妙な現実を忘れさせてくれる。とろけるようなため息を吐いて、麻奈は手足を一杯に伸ばして窓いだ。

円形をした浴槽は、麻奈が足を伸ばしたぐらいでは淵に届かないほど広い。初めて入った時には、一人で使うには些か広すぎるのでないかと思つたくらいだ。

「まあ、誰かと入る予定もないけどねえ」

まさかこの時、もう一人この浴室に入つてこようとしている者がいることなど、麻奈は夢にも思つていなかつた。鼻唄を歌いながらのんびり寛ぐ麻奈の背後で、浴室の扉がカチャリと小さく音を立て開いた。

麻奈が僅かに流れてくる冷氣を感じて振り返る。そこに、湯煙を纏わり付かせたユエが立つていた。

「え、ちょっと……何でっ」

本当に焦つていると、まともな言葉が出てこないのだと、麻奈はこの時初めて知つた。自分が何を言つてゐるのかよく分からぬがとにかく出来るだけユエの耳に触れないよう湯船の中で後ずさりした。

ユエは靴が濡れるのも気にせずに、どんどん湯船に近付いてくる。無意識に胸元を手で隠しながら、麻奈は顎まで湯につかつた。そして、白濁していることに感謝した。入浴剤を入れておいて本当に良かつた。

ユエはひと時、湯の中に視線を落としていたが、真剣な顔で湯船の淵にしゃがみこんだ。ユエの長い上着の裾が床に垂れて、ベチヤリと濡れる。

「湯が白いな」

「入浴剤を入れたから

ユエは分つてゐるのかいないのか、面白くもなさずつと白く濁る湯を見つめている。一向にそこから動かないユエに、麻奈は段々と

苛立つてきた。

「早く出て行つてよ。一体何考えて　」

「あれば、お前がやつたのか」

いつの間にか、ユエは真っ直ぐに麻奈の瞳を見つめていた。低く真剣な声で迫る彼は、いつもと何かが違う。麻奈は、自分の体に冷たい電気が走ったような気持ちになつた。慎重に答えなければいけないような気がするが、彼の質問の意味がまるで分からない。必然的に口にするしかなかつた。

「何のこと」

舌打ちを一つするユエに、麻奈は恐ろしいものを感じた。

「とほけるなよ。アイツを元の姿に戻したのはお前だらう

「アイツって、ビシャード陛下のこと」

「名前はどうだつていい。お前がやつたんだから」

ユエは至極真面目な顔をしている。その冷たい表情はハッとするほど美しかつた。

麻奈は首を横に振る。ユエが何を勘違いしているのかは知らないが、自分にはそんな大それた事など出来るわけがない。

「陛下が元に戻れたのは、あの鏡のおかげでしょう。私は、特に何もしていないもの」

ユエはザバリと水しぶきを上げながら、服のまま湯船に入つて来た。麻奈は飛んでくる水滴を顔に受けながら悲鳴を上げた。

「ちょっと、何してるの?」

ユエは水面を激しく波立たせながら麻奈に近付いて来る。麻奈の心にも、湯船の水面のような不穏な波が広がつてゆく。自分の答えの何が気に入らなかつたのだろうか。

ユエの黒い服は忽ちお湯を吸つて重たくなつたが、本人は特に気にする様子もなく湯船を真つ直ぐに横切つて来る。

いつもとは違う、彼の余裕の無い表情が麻奈を一層不安にさせた。

ユウは水しづきを上げながら、無造作に近付いてくる。麻奈は湯船から出るわけにもいかず、浴槽の淵に精一杯背中を押し付けていた。これ以上は下がれない。おまけに、小さなタオルすら手元にない。

麻奈は絶望的な思いで目の前に立つユウを見上げた。彼は変わらぬ無表情で、麻奈を静かに見下ろしていた。

「俺には、お前がやつたようにしか見えなかつた」

さつきの返答では、やはり納得できなかつたらしい。ユウはじつと麻奈を凝視している。欲しい答えを引き出すまで、彼はこうして静かなプレッシャーをかけ続けるのだろうか。麻奈は気が遠くなつてきた。

何も答えない麻奈に業を煮やしたのか、ユウは目線を合わせるよううにその場にしゃがみ込んだ。彼の上着の裾が海草のように湯船に広がる。

向かい合わせる形で座つたユウは、麻奈の喉にそつと指を這わせた。冷たい。麻奈は顔をしかめた。大きな手がゆつくつと自分の喉を包み込むように広がり、いきなり驚?みにされた。

「どうやつてあいつを元に戻したんだ。答えろ」

麻奈の背筋に悪感が走つた。普段からユウは麻奈に何かと触れたがる、しかし今の彼が自分に触れているのは、いつもと違つ理由なのだ。

ユウの手に、ゆつくつと力が入る。強い圧迫を感じとどめ、気道

がじわじわと締めつけられていく。温かい湯の中にいるはずなのに、
麻奈は体が冷たくなつていくのを感じた。

親しいとまでは言わないが、少し前までユエとは多少気安く接する事が出来ていたはずだった。それなのに、なぜこんな扱いを受けられるのか。麻奈にはまるで分からない。

「ユ、エ……くる、し

麻奈は危険を感じて、自分の首を締め上げているユエの腕を握り、少しつづつ力を加えていく。

麻奈の頭がジンジンと鬱血してきた頃、ようやくユエが手を放した。麻奈はむせかえりながら息を吸い込む。涙が溢れて、激しく咳込みながらユエを見上げた。

すまなそうな表情など微塵もしていなかつた。彼は自分の欲しい答えが手に入らなければ、麻奈を傷付ける事だつて構わないようだ。「ユエは、一体何が知りたいの。私は何も隠してない。心当たりがないから、私じゃないと言つただけ」「

麻奈は力の入らない声とは裏腹に、ユエを睨みながら喉に手を当てた。きっとそこは赤く指の後が付いていることだらう。それだけユエの力は強かつた。

麻奈は震える声と体をユエに悟らせよう努めたが、きっと無駄だらうと思つた。麻奈が小刻みに震えるたびに、水面には小さな波紋が広がつていていた。それでも、麻奈は精一杯の虚勢を張つて彫刻のように動かないユエを睨みつける。

さつき麻奈が暴れた時に水しぶきを浴びたのだろう。彼の頬や髪はぐつしょりと濡れていた。

「ユエだつて元の姿に戻りたいから、その方法を知りたいんでしょ
う」

前髪から滴り落ちる零を払いもせずに、ユエは麻奈を見つめていた。このまま、本当に彫刻になってしまいそうだ。

麻奈は改めてユエを見つめた。前から気になっていたことだが、この男には他の住人のように奇妙なところは一つもない。

「でも、ユエにはどこも変わらないように見えるけど」「

麻奈が疑問を吐き出さないうちに、顔の横から固い音が上がった。次いでパラパラと浴槽の欠片がお湯に落ちていく。何が起こったのか一瞬理解できなかつた麻奈だつたが、ユエの拳が浴槽の壁に突き刺さつているのを見てやつと理解した。

大理石で出来ていて浴槽にクモの巣状のひびをいた張本人は、血が滲む拳を引っ込めることもせずに、静かに麻奈を見下ろしていた。

「それ以上何も言つな」

ユエは更に一段低い声で麻奈の言葉を縛る。以前、彼にどこが変わつたのか尋ねた時にも同じようなことがあつたのを思いだした。

ユエの拳から滴る血が、白い湯にぱつと紅い花を咲かせて、すぐに沈んでいく。麻奈は震えながらそれを呆然と見ていた。怖い。血が、暴力が、ユエの美しくも冷たい表情が。今は彼の全てが恐ろしいと思つた。

しかし、今回ばかりは麻奈も折れる気はない。

「暴力で黙らせよつとしないで。ユエだつて、元の姿に戻りたいん

でしょう。だつたら私も力になるから、ちゃんと話をしよう

震える声を懸命に絞り出して訴える。首を絞められたからこそ、こんな目に合わされる理由を聞かずにはいられない。きっと話せば分かり合えるはずだと麻奈は思っていた。

ところが、ユエは突然喉の奥でくつくつと笑い始めた。いつもの余裕たっぷりの笑いではない。それは、ねつとりとした卑屈な笑い方だった。

「何が、おかしいの」

螺旋を巻きすぎた玩具のように笑い続けるユエを見て、麻奈はジユリアンの言葉を思い出した。

彼は初めに言つていたではないか。此処に住む者は正気ではないと。

「何か、勘違いをしているようだな」

やつと声を上げて笑うのを止めたユエは、唇に嫌な笑みを張り付けたまま、麻奈に向き直る。

「どうこう」と

「俺は一度でもお前に言つたか。元の姿に戻りたい、と

麻奈は首を傾げた。言つていなかもしれない。

「でも、元の姿に戻らなくちゃ此処から出られないんだよ。ユエだって、自分の故郷に帰りたいでしょう」

コエは笑みを深めた。それだけでコエの色気が匂い立つよつで、麻奈は目眩がした。いつまでも、この男の前で無防備な姿を晒しているのは違つ意味で危険な事を思い出した。

コエは滑るように一人の距離を更に詰めると、血だらけの手で麻奈の顎を持ち上げた。ピタリと密着する体。コエは満足そうに笑いながら、楽しそうに話す。

「逆だよ、逆。俺は此処から本当に出たいなんて思つてねえよ」

「どうして」

「分かるだろ? 俺は今の姿が氣に入ってるのを」

血が滴る指が麻奈の顎をくいと上向かせる。麻奈の恐怖で潤んだ瞳を覗き込んで、コエは満足そうなため息を一つ落とした。

「俺はそれなりにこの場所が氣に入ってるのだ。今まで、年も取らずにいられるならそれも悪くない。今までには男ばかりで死ぬほどつまらなかつたが、今はお前がいる。やつと女が現れて楽しくなつてきたところだつたのを……。全く余計な事をしやがつて」

コエは空ひでいる方の手で、鬱陶しそうに髪をかきあげた。

「俺はお前と此処で楽しくやれたらそれでいいんだよ」

コエは暗い笑みをその口許に張り付かせる。

「だから、お前を此処から出す気はねえよ」

宝石のようなコエのアイスブルーの瞳が、今は欲望と狂氣で濁つ

てこるよ」に見える。

「あの鏡には今後一切近付くなよ。でなければ

麻奈の耳に二田円型の唇を寄せると、コトはひつそりと囁いた。

「どうなるか、分かるな

たつぱりと麻奈に恐怖を植え付けてから、コトは手を離した。麻奈の怯えた視線を受け止めて、彼は水しぶきをあげて立ち上がった。

「良い子だから、おとなしくしてね」

さつきの麻奈の反応で、本当に何も知らないのだと分かったのだわ。コトはいつもの余裕たっぷりの流し目を送ると、水に濡れた服をひきずりながら浴室を出て行つた。

麻奈はそれをぼんやりと見送りながら、彼と一緒に浴槽の熱もどこかへ行つてしまつたように感じていた。心地良かつたはずの湯は、もう湯煙も立ち昇らなくなつていた。

すっかり生温くなつてしまつた湯の中で、麻奈はいつまでも動く事が出来ずにいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8985t/>

夕日と鏡と私のトラウマ

2011年10月6日14時22分発行